IS〈インフィニット・ストラトス〉 - ACE OF ACE -

Smoker

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉　－　ＡＣＥ　ＯＦ　ＡＣＥ　－

【Ｎコード】
Ｎ６９７５Ｕ

【作者名】
Ｓｍｏｋｅｒ

【あらすじ】
女性にしか扱えない兵器－－－『ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉』
その影響により、『女尊男卑』となった世界－－－その発端ともいえる『白騎士事件』

その『白騎士事件』で、圧倒的な力を世界中に知らしめた白騎士と互角に戦った一人のパイロットが居た事を誰も知らない

如何なる状況下においても、常に余裕を崩さずに仲間を勝利へと導いたパイロット

人は彼を『生粋のエース』――【ＡＣＥ　ＯＦ　ＡＣＥ】と呼んだ

Prologue — Interview With The Ace Of

本編をそっちのけに、やってしまいました。

そんな愚かな作者の二つ目となる長編ですが、どうかよろしくお願いします……

Prologue ― Interview With The Ace Of

あぁ、『あの時』の事か……よく覚えている

話せば、長くなる……そう、昔の話だ

知っているか？　『ＩＳ』が現れるまで、戦闘機などの旧来の兵器が戦場の主役だった頃、『ＡＣＥ（エース）』は三つに分けられるのを

『強さを求める奴』

『プライドに生きる奴』

『戦況を読める奴』

……この三つだ。まぁ、今となっては『ＩＳ操縦者』＝『エース』なんてモノになっちまったがな……

悪い、話が拗れちまったな……話を戻そう

――――――――

彼の名前は『ジェイソン・シーガー』

元アメリカ海兵隊　第３１４戦闘攻撃飛行中隊の隊長を務めた男性

女性を中心とした今の世界ーーー『女尊男卑』の発端となった大事件ーーー通称『白騎士事件』の際、『白騎士』と交戦した『戦闘機乗り（パイロット）』の一人でもある

彼が隊長を務めた第３１４戦闘攻撃飛行中隊ーーー通称『ファントム【Ｐｈａｎｔｏｍ】隊』

１２人編成の部隊であり、メンバー全員が『ＴＯＰ　ＧＵＮ』の主席でもある選りすぐりの精鋭たちーーー常に激戦の最前線にて活躍した特攻部隊

当時、各国の軍隊でその部隊を知らない者は居ないと言わしめる存在であった

あの『白騎士事件』までは……

――――――――

ジャーナリストである私は『白騎士事件』を追っていた

『白騎士事件』には未だに謎が多い

あの『白騎士』は一体、誰が操縦していたのか……開発者である『天災』とはどんな関わりがあったのか――私はそんな疑問を胸に彼方此方を駆け巡る中、ある一人の『パイロット』の存在を知る事になる

かつて、世界最高峰の腕を持ち、如何なる絶望的状況下においても

余裕を崩さずに仲間を勝利へと導く『生粋のエース』――――【ACE　OF　ACE】と呼ばれたパイロット

あの圧倒的な強さを世界中に知らしめた『白騎士』と互角に交戦したとも言われていたらしいが……勿論、そんな話はこれまでの各国の軍の公式発表に無ければ、資料にすら無い――『亡霊』のような存在

私は、第３１４戦闘攻撃飛行中隊に所属していた１２人の足取りを捜すも『１１人』の足取りは全く不明だった……

ただ一人……第３１４戦闘攻撃飛行中隊　隊長

『ジェイソン・シーガー大尉』を除いて

――――――――

あれは、やたらと太陽の日差しが眩しい日だった

当時、各国の軍事ネットワークへ何者かのハッキング行為により、各国が所有する核弾頭ミサイルが一斉に発射されるという史上最悪の事態が発生した

誰もが最悪の結末を迎えると思い、人々は居るのかも分からない神に祈った

そこに現れたのが『白騎士』――【ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉】だった

白騎士は一斉発射されたミサイルを瞬く間に撃墜していった――
被害を最小限に留めた上で……

白騎士の強大な力に畏怖した各国は白騎士の撃破、または捕獲の命令を下した

俺らの部隊も当然、その作戦に参加していた

――――――――

〈ファントム3からファントム・リーダーへ　隊長、今回の作戦は

史上最大級の規模だって聞いたが、本当ですか？〉

〈こちら、ファントム・リーダー　あぁ、海上と航空には各国の半数以上の戦力が導入されてるらしい……戦闘空域では、既に大勢の味方がやられているようだ〉

〈こちら、ファントム４　それだけの戦力を相手にしている『白騎士』ってのは、どんな化け物なんだぁ？〉

〈こちら、ファントム６　一斉発射された核弾頭ミサイルを簡単にスライスしちまうような奴だよ〉

〈マジかよ……一体、どこのイカレ野郎がそんな化け物を開発したんだ…？〉

〈ファントム・リーダーから全機に告ぐ　お喋りはそこまでにしておけ。まもなく戦闘空域だ……敵は正体不明だが、とんでもない化け物なのは確かだ。油断だけはするな〉

〈ファントム２　了解〉

〈ファントム４　了解、任せときな！〉

〈ファントム６　了解、【幻影】の名は伊達じゃないってのを教えてやるぜ！！〉

幾多の激戦を切り抜けてきた俺らには恐れは無かった

しかし、あれは相手が悪かったとしか言いようが無いな……

戦闘空域へと到着すると同時に俺らは白騎士との交戦を開始

だが、白騎士はこちらの猛攻撃をモノともせずに次々と艦隊や戦闘機を撃墜していった……

史上最大級の激戦の舞台となったあの空域――――後に『円卓』と呼ばれ、各国でも語り継がれる程の圧倒的な強さを誇った白騎士

あの時の光景は一生、忘れないだろう

上空と海上から取り囲むように展開する俺らをたった一人で相手をする白騎士――――俺の目の前には、正に『円卓の騎士』が居た……いや、あれは騎士というよりも『鬼神』と言うべきだろうか……

交戦を開始して、僅か数分で海上の艦隊は壊滅……俺らも半数以上が白騎士に撃墜されていた

〈こちら、ファントム４　クソッ！！　やられた！　離脱するッ！！〉

〈こちら、ファントム２　味方が次々とやられている！！〉

笑えない話だ……あの【円卓】で、俺らが相手をしていたのは本物の【円卓の騎士】だったんだからな……

〈……ファントム・リーダーから残った全機に告ぐ　直ちに進路を西にとり、戦闘空域を離脱しろ〉

〈な、何を言っているんですかッ！　隊長ッ！？〉

〈これ以上、お前らがこの空で散っても何の意味も無い。白騎士の相手は俺に任せておけ〉

〈こちら、ファントム６　隊長ッ！　その命令は承服できません！！〉

〈ファントム・リーダーからファントム６へ　少しは隊長らしい事をさせてくれ。これ以上、仲間を危険に晒させたくないんでな……ファントム２　指揮は任せたぞ〉

〈……こちら、ファントム２　了解、隊長……幸運を祈ります…〉

俺は僅かに残った友軍に撤退命令を下し、無謀にも一人で白騎士を相手しようとしたのさ

残った友軍と部下たちが撤退を開始し始めた中、俺は搭乗機――『Ｆ－１４Ｄ　Ｓｕｐｅｒ　Ｔｏｍｃａｔ』の操縦席越しから白騎士と真っ向で睨み合いをしていた

不思議と恐怖などは一切、感じる事は無かった……それ以上に俺は、圧倒的な強さを誇る白騎士を相手に自分が何処まで通用するのか――言いようのない高揚感が俺を支配していた

〈……来いよ、【円卓の鬼神】　物足りなさそうで申し訳ないが、俺が相手だ！！〉

俺は白騎士との交戦を開始した。これまで経験した幾多の激戦で自分が培ってきた技術の全てをぶつけてな…

どの位、時間が過ぎたのか……そんな事すら忘れる程、俺は白騎士

との激戦に意識を集中していた

こちらの攻撃を思わず、見惚れてしまう程の見事な動きで回避していく白騎士

極限にまで研ぎ澄ました集中力で白騎士から繰り出される攻撃を回避し、俺は白騎士と何とか交戦を続けていた――最初から白騎士に勝とうなんて事なんざ、考えていかった

ただ、仲間が空域を離脱するまでの時間稼ぎさえ出来れば、充分だったからな……

俺は白騎士に僅かながらもダメージを負わせるが、俺の方は既にミサイルも特殊兵装も底を尽き、燃料タンクも殆どが空……

俺はあえなく白騎士に撃墜された――だが、白騎士の放った攻撃

は操縦席の俺を狙わずに機体だけを狙った為、俺はほぼ無傷だった

落ちゆく機体の中、俺はレーダーを確認すると、こう言った

〈……ファントム隊、及び友軍の全機、戦闘空域の離脱を確認……
…俺の【勝ち】だ、白騎士……〉

そして、俺は落ちゆく機体から離脱。パラシュート降下で海へと落ちていった

その時だった……遥か上空で俺を見つめる白騎士――僅かながら与えたダメージの影響か、剥がれ落ちた装甲から垣間見えた『女』の顔を見たのは……

――――――――

私は、彼がそう語り終えた後に一つの事実を知った

今、私の目の前で『白騎士事件』を語った彼――『ジェイソン・シーガー』こそ、白騎士と互角に交戦したパイロット――『生粋のエース【ＡＣＥ　ＯＦ　ＡＣＥ】』である事を

私は彼に問い掛けた

『何故、生粋のエースと呼ばれた貴方は軍を辞め、空から離れてしまったのか？』

すると彼は言った

あの時の撤退命令は彼自身の独断によるものであり、惨敗を喫した軍からは、八つ当たりとも言える非難を浴びせられ、これまでの軍歴を剥奪され、不名誉除隊にされたと……

だが、彼は後悔していないと言った――大勢の戦友や仲間を犠牲にして、仮に白騎士を倒せたとしても、それは本当に失った仲間たちと同等の価値がある『勝利』なのかと――

私は彼の迷いの無い瞳に見惚れてしまっていた

彼は、こうも言っていた

『俺は確かに軍歴を剥奪され、不名誉除隊になったが……一切、後悔だけはしていない。それに……男が、夢や誇りを取り上げられたら、何をして生きていけば良いんだ？　生まれてきた意味が無いだろう』

そして、彼は最後に言った――あの日、自身の全てを賭して戦った『白騎士』に向けて……

『よう、白騎士……ありがとよ。あの時、お前は交戦してきた俺らを誰一人、殺さなかった……

いつか、俺がまた空へと舞い戻る日が来たなら……もう一度、俺と空を飛んで欲しい。勿論、戦いは無しでな……

それまでは……またな、【戦友】』

そう言った彼はどこか、少し嬉しそうな表情を浮かべていた

ジャーナリスト『アリシア・ウィーバー』の【白騎士事件】インタビュー記録より

Prologue — Interview With The Ace Of

正にやってしまった感の塊です……

取り敢えず、こっちの方はネタが思い付きやすいので、ちょくちょく更新していく予定です

前書きにもありましたが、こんな愚かな作者ですがよろしくお願いします……

回想　ー　【最高の仲間】　ー

俺の名前は『ジェイソン・シーガー』

所謂、【転生者】という奴だ

何故、そうなったのかは俺にもよく分からない……

分かっているのは、以前に俺は今とは別の人間としての人生を送っていたという位だ。そして、その時の俺は交通事故に巻き込まれ、命を落とした

だが、次に目覚めた時には俺は赤ん坊となっており、見知らぬ夫婦

の子供として生まれていた

だが、俺は自分にある【異変】が起きていたのを知った――まるで、コンピューターがインプットしたかの様に頭の中には様々な情報があったからだ

自分が【転生者】である事、【転生者】と呼ばれる者には【特殊な能力】を複数、授けられる事……そして、俺は赤ん坊でありながら、既に精神的な年齢は以前の人生のまま、引き継がれている事だった

俺に授けられた【特殊な能力】は三つ

人並み外れた運動神経、常に身体の状態を最善に保ち、鍛錬を行えば、上限無く上がり続けて決して、落ちる事の無い能力――『超人的な身体能力』

あらゆる乗り物を見ただけで、全ての操縦方法を理解し、驚異的なまでの操縦技術を扱える――『あらゆる乗り物の操縦方法と驚異的な操縦技術』

多種多彩な兵器、機体など専門的なモノから、あらゆる知識を所有する――『比類無き知識』

この三つを授けられた

二度目の人生を送る事となった俺は、生まれた直後に両親を失った――皮肉にも、以前の俺の死因と同じ【交通事故】でだ

俺は両親の死後、親類の軍人に引き取られた

成長していくにつれて、授けられた能力は顕著に表れ始めた

十代の頃には『超人的な身体能力』の鍛錬を兼ねて、サーフィンやモトクロス等の『極限【Ｅｘｔｒｅｍｅ】ゲーム』の大会へと次々に参加ーーー気付けば、世界大会の総合優勝者となっていた

１８を迎えた頃、その能力に目を付けた俺の保護者代理である軍人は、俺を軍隊へと入隊させたーーー二年後、海軍へと配属された俺は、戦闘機乗りとして活躍、そこから『Ｔｏｐ　Ｇｕｎ』と呼ばれる精鋭（エリート）中の精鋭が集まるアメリカ海軍のパイロット学校を主席で卒業する事に成功した

ーーーーーーー

その一年後、大尉となった俺は『アメリカ海軍　第３１４戦闘攻撃飛行中隊』ーーー通称『ファントム隊』の隊長へと就任した

何時の間にか、周りの仲間たちは俺を『生粋のエース』――【ACE　OF　ACE】と呼んだ

だが、俺がそんな名で呼ばれるのは『最高の仲間たち』が居たからだ。仲間を信頼できなければ、俺はとっくの昔に死んでいる……

その後、俺ら『ファントム隊』は世界中の激戦へ出撃、各国の軍隊でもNO.1の出撃率と成功率を修めた

それから四年後……数日前、ジャーナリスト『アリシア・ウィーバー』に語った『白騎士事件』へと出撃する事になった……

――――――――

白騎士に撃墜された俺は、海上に漂う艦船の破片にしがみついて丸1日程、漂流した後、味方に救助された

だが、基地に戻った俺を待っていたのは……あの時、俺が独断で下した『撤退命令』による厳しい処分と1ヶ月の自室謹慎であった……

1ヶ月の自室謹慎を終えた俺は軍法会議の場へと呼び出された。予想はしていたが、白騎士に惨敗した事を世界中で公開された事に怒り狂った軍上層部の矛先が、俺へと向けられた訳だ……

不幸中の幸いか、あの時に無事、撤退できたファントム隊と友軍の仲間たちが抗議し、俺は刑務所行きだけは避けられた

だが、下された判決は……今までの戦歴、勲章を含む全ての軍歴の

剥奪と不名誉除隊だった

判決が決まり、一週間の執行猶予が下された俺は長年、所属していた軍と当時、付き合っていた『恋人』への踏ん切りを着ける為、空軍へと顔を出していた

当時、付き合っていた恋人の名は――――『ナターシャ・ファイルス』

入隊から僅か、二年で中尉へと上り詰めた女性

アメリカ空軍でＮＯ．１の腕を誇るエース・パイロットでもある

俺の判決の噂は既に海軍だけでは無く、空軍にも広まっていた。ナターシャも当然、その噂を知っていた

顔を合わせた途端、ナターシャは涙で潤んだ瞳を俺へと向け、抱きついてきた。まるで自分の事の様に俺への判決に悲しんだ

ナターシャとの出会いは、まだ俺が『Ｔｏｐ　Ｇｕｎ』に所属していた頃に遡る

当時、空軍でエース・パイロットと称される腕前を持つ女性が居るという噂が広まっていた

女性がパイロットになる事は珍しくはない。だが、エース・パイロットと称されるのは稀な事だった――『男尊女卑』という当時の世界では、女性に対して偏見が多かったからだ

『上官と寝る』というな手段を用いたのだ、等の良からぬ噂も流れた――ナターシャもそんな偏見の目に晒されていた

だが、アイツはそんな偏見に屈しなかった。出撃を重ねる度に周りの偏見は無くなっていった

常に仲間を見捨てず、危機的状況を切り抜けていく姿を見て、ナターシャをエースと呼ぶ連中は徐々に増えていった

『Ｔｏｐ　Ｇｕｎ』に所属していた俺は、既にナターシャと何度かは会っていた。エース同士、気が合うのかは分からないが、よくアイツと連む事も多かった

そんなある日だ、アイツが俺を呼び出し告白してきたのは……

不思議とそんな予感を感じていた俺に断る理由なんて無かった

だが、今になって軍を去る事になった俺はナターシャとの踏ん切り
――【別れ】を告げる

彼女は何も言わず、涙ながらに俺を見つめた……そして、別れを告げる俺の口を塞ぐかの様に唇を重ねてきた――その後、互いの様々な感情に火が着き、歯止めが利かなくなった俺とナターシャは、一晩を共にした

その夜、互いに身を重ねた俺とナターシャだけが居る部屋で俺は彼女に言った

『俺はお前が空を去ったとしても、飛び続ける。お前もそうだろう？　俺の分も飛び続けてくれ…』

そう言ったら、彼女は誰もが見惚れてしまう程の笑みを浮かべ、こう言った

『別れなんて言わせない。今度は貴方を私に振り向かせてみせるわ』

それが彼女との踏ん切りとなった。今度は俺を惚れさせてみせると言ってな……

――――――――

そして、一週間後……俺は軍を去っていった

だが、思いもしなかったのは……海軍と空軍のパイロットたちが一斉に大空へと飛び立ち、空から離れる事となった俺を見送ってくれた事だ

勿論、それはパイロット一同の独断であり、命令違反となるのだが……アイツ等は、たかが一人の為にそんな馬鹿をしてくれていた

どうやら、俺が思った以上に俺は……『最高の仲間』に恵まれていたみたいだった

回想　―　【五反田食堂】　―

軍を去り、俺は生まれ故郷であるアメリカ西海岸で小さな修理屋を営んでいた。昔からバイクや車は好きだったし、改造や修理も得意だったからな……

ただ、空を見上げる時、やたらと太陽が遠く感じた……無理も無い――今までなら、大空を高く飛び上がり、太陽の近くまで行けたんだからな……

――――――――

それから、二年が過ぎた

その頃にはＩＳの技術は世界各国に普及、スポーツ競技から兵器にまで幅広くＩＳは浸透していった

やがて、世界各国では一国を代表する『ＩＳ操縦者』たちが競い合う世界大会『モンド・グロッソ』――所謂、ＩＳのオリンピックまでもが開催した

そして、その世界大会で世界を揺るがす出来事が起きた

日本代表の操縦者が第一回ＩＳ世界大会『モンド・グロッソ』にて、総合優勝を果たし、最強のＩＳ操縦者の称号――『ブリュンヒルデ【Ｂｒｕｎｈｉｌｄ】』を得たのだ

そのニュースは瞬く間に世界中へと駆け巡った――しかし、それだけでは無かった

総合優勝を果たした日本代表の操縦者は会見の場にて、かつて自分と互角に戦い、仲間を窮地から救った一人のパイロットへと『メッセージ』を送ったのだ

『私はあの時、お前と一戦を交えた際に今までに感じた事の無い高揚感と歓喜に満ち溢れた

あの時、お前は明らかな戦力差にも関わらずに仲間を救う為、私に挑んだ……

落ちゆくお前を見つめ、私は【お前と共に大空を駆け抜けたい】と強く感じた』

この『メッセージ』は大きな波紋となった。最強のＩＳ操縦者【ブリュンヒルデ】と互角に戦った謎のパイロット――人々は、その謎の存在に強く興味を抱いた

その『メッセージ』が送られる以前には、ジャーナリスト『アリシア・ウィーバー』のインタビューを受けていた為、俺は更なるメディアからの追求から逃れる為、旅へと出る事にした

だが、そんな事よりも俺は驚いていた――その『メッセージ』では無く……日本代表のＩＳ操縦者――最強の称号【ブリュンヒルデ】を持つ『織斑　千冬』があの時、装甲が剥がれ落ちた『白騎士』から垣間見た『女』であった事に……

――――――

俺は世界各国を旅して回った。アメリカからフランス、イギリスから中国……

最終的には日本へと渡った。灯台下暗しという訳では無いが『織斑千冬』の母国に居るとは思わないだろうと考えたからだ

日本での暮らしを始めた俺は、小さな車庫を買い取って改装し、その車庫を家としていた。勿論、軍時代の使い道も無く貯まり続けた給料は多少、旅費として消えたが未だに膨大な額のまま、残っていた

だが、暇なのは性に合わなく、俺は日本での職探しを始めて『五反田食堂』という店での仕事を始めた

本来ならば、アルバイトなどの類は取らないらしかったが、店主である『五反田　厳』曰わく、『お前さんの眼が気に入った』と即採用された

店主であって、俺の雇い主である『五反田　厳』が経営する『五反田食堂』は『五反田　厳』ー一ー【オヤジさん】の三人の家族で切

り盛りしている

オヤジさんの娘さんである【二代目　看板娘】と呼ばれる『五反田　雅』（因みに初代はオヤジさんの亡き女房だったらしい）

オヤジさんの孫で雅さんの息子、五反田家の長男――『五反田　弾』

同じく、オヤジさんの孫娘であり、雅さんの娘『五反田　弾』の妹――『五反田　蘭』

オヤジさんを含め、四人は見ず知らずの俺を暖かく迎えてくれた。俺も『五反田食堂』での仕事に精を出しながら、充実した毎日を送っていた

２ヶ月が過ぎるとオヤジさんの孫である『五反田　兄妹』は俺の事を『兄貴』、『ジェイ兄』と呼ぶようになり、俺も二人を『弾』、

『蘭』と親しく呼ぶようになった

『五反田食堂』では昼から夜まで、多少の休憩を挟むも毎日、客が途絶える事はない程の忙しさだった――訪れる客は老若男女を問わず、様々な人々が皆、笑顔を浮かべていた

これも『五反田食堂』の魅力であるのだろう――常連客の男たちの目当ては、雅さんと蘭の二人なのだろう。皆、雅さんと蘭の笑顔を見る度にニヤケた笑みを浮かべているしな

逆に女性客の目当ては、その豪快な性格と頼りがいがあるオヤジさんと破天荒ながら、オヤジさん譲りの頼りがいを持つ弾なのだろう（※ジェイソン本人は気付いてないが、女性客の八割以上がジェイソン目当てです）

ただ、仕事中に女性客たちに話掛けられ、会話をする度に雅さんや蘭から妙な威圧感を感じるのは何故だろうな……（二人共、笑顔を浮かべているのに何故か、恐怖を感じるのだが……）

そんな中、俺は弾の親友（弾曰わく、悪友）という一人の少年――

――『織斑　一夏』と出会う事になる

回想　ー　【少年】と【エース】　ー

『織斑　一夏』との出会いは至ってシンプルな感じだった

何時もの様に、食堂での仕事中に弾を訪ねに来た少年ーーー『織斑　一夏』

弾とは中学からの悪友らしく、この『五反田食堂』にもよく顔を見せていたらしい

当然、今までに見た事の無い俺が食堂に居るのは不思議に思うだろう

弾はアメリカから日本まで旅をしていた外国人だと俺の事を言った

だが、『織斑　一夏』はある事に気付いた――不名誉除隊されても、かつての名残で肌身離さずに身に着けている『認識票（ドッグ・タグ）』に目を着けたのだ

弾の奴はアクセサリーの一種なのだろう、と思っていたらしい。だから、俺が元海軍所属のパイロットだった事を明かしたら、随分と驚いていた（因みに雅さんと蘭も驚いていたが、オヤジさんだけは驚いてはいなかった）

直ぐに俺は『織斑　一夏』とも打ち解け、俺は『一夏』と、一夏は『アニキ』と呼ぶようになった

ある日の事だ、一夏は俺にある事を聞いてきた

『アニキはパイロットだったんだろ？　なら……【ＡＣＥ　ＯＦ　ＡＣＥ】って、知っているのか？』

正直、俺は驚いていた。今やＩＳの普及に『モンド・グロッソ』での【ブリュンヒルデ】で最早、聞く事は無いだろうと思っていた――【かつての呼び名】

俺は一夏に聞いた

『何で【ＡＣＥ　ＯＦ　ＡＣＥ】なんて古臭いモノをお前が知っているんだ？』

そしたら、一夏はこう答えた

『以前、千冬姉から聞いたんだ。仲間を護る為、あの『白騎士』に挑んで互角に戦った戦闘機乗り――『生粋のエース』の話を』

そして、一夏は言った

『俺の……【憧れ】なんだ。圧倒的な力を前にしても仲間を護る為に、その現実を覆す力――俺も誰かを護る為に、そんな力を持つ男になりたいんだ』

その時の一夏の眼は今でも、はっきりと覚えている

あれは俺たち、戦闘機乗りが戦いを前に決心を固めた時の眼――

『焔の着いた眼』だった

真実を知れば、きっと一夏は驚くだろう

何故なら、お前が目標としている男は――今、お前と共に笑っている男なんだからな

だが、日本での穏やかな暮らしをしていた俺は完全に気が緩んでいたとしか言いようがない

何故なら、『織斑』の名が付く日本人とは既に出会ってたからな……

――――――――

一夏との出会いから、数週間が過ぎた頃、一夏は俺に紹介したい人が居ると言った

断る理由など無い俺はそれを承諾して後日、一夏の家へと招待された

他人の家庭環境には首を突っ込まない主義だが……『織斑家』には両親が居なく、一夏には姉が一人居るらしい

そこで俺は漸く、失念していた『織斑』の名前に気付く事になる

何故なら、一夏が俺に紹介したい人一一一夏の姉である『織斑千冬』だったのだから

回想　ー　【白騎士】との再会　ー

あの時は互いに驚いた

まさか、一夏の姉が『白騎士』ーーー最強のＩＳ操縦者【ブリュンヒルデ】でもある『織斑　千冬』とはな……

だが、向こうも驚いていたのは確かだ。自分の弟が『アニキ』と慕う男が、かつてのパイロットとは予想も出来なかっただろう

お互いに面食らっていた時、一夏は俺らにこう聞いた

『あれ？　アニキと千冬姉って……もしかして、知り合いなのか？』

俺らは何とか、その場しのぎに話を合わせた

『あ、あぁ……彼とは以前に『モンド・グロッソ』の際に世話になってな…』

『あー……あの時、俺は選手たちの……そう、一種のサポート的なモノをやっていてな。軍隊時代の知り合いの代理でよ』

正にその場しのぎの嘘ではあったが、何とか一夏に真相を知られるのを免れる事は出来た

その後、一夏は弾の奴との約束があると言い、家を後にした――勿論、俺と『織斑　千冬』を残して……

長い沈黙が続き、時間だけが過ぎていく。そろそろ、この嫌な緊張感に似た状況を抜け出すか、と俺が口を開く前に『織斑　千冬』は口を開き、言った言葉は……【謝罪】だった

「…済まない……あの会見で私が言った事は……私からの一方的なモノだ……

『ＩＳ』という圧倒的な力で一方的なまでに私はお前を含め、仲間や友軍たちを撃墜していった……

なのに『共に空を飛びたい』等、都合の良い事だけを言って……一夏から聞いた……世界中を旅していたと……

だが、本当はあの会見での世間からの追求から逃れる為なのだろう……？

……だから……私は……」

顔を俯かせ、『織斑　千冬』は謝罪の言葉を延々と言った

そんな彼女に俺は、そっと手を伸ばすと――俯いた彼女の額を指で弾いた

「痛ッ……！？」

予想外の事だろう。彼女は若干、赤くなった額を擦りながら俺を見る

「んな事は気にしちゃいない。あの時、俺は墜ちる機体から言ったんだよ、『俺の【勝ち】だ』ってな

俺は最初からお前に勝とうなんて、思ってない。仲間をあの空域から撤退させれば、充分だったんだよ」

「だが、お前は……！」

俺は言葉を遮る様に彼女の唇に指を押し当てる

「俺はあの会見の前に、ジャーナリストから『あの時』のインタビューを受けた、といってもゴシップ系雑誌のだがな……その時に言ったよ、『俺はあの時の事は一切、後悔していない』

それにあれだけの激戦にも関わらず、俺らを一人も殺さなかった。それは寧ろ、感謝してるんだぜ？　本来なら簡単に殺す事も出来たんだしな」

俺は言葉を続ける

「あの時、俺は仲間を撤退させるのが目的だった。最終的に仲間が撤退できた事が俺にとっての【勝利】だったんだよ」

俺は彼女の唇に押し当てた指を離し、手を差し出す

「それと……自己紹介はお互い、まだだったよな

俺は『ジェイソン・シーガー』　元アメリカ合衆国海兵隊　第３１４戦闘攻撃飛行中隊『ファントム隊』隊長で大尉だった

光栄だったぜ？　あの時にお前と僅かな間だったが互角に戦えた事を」

すると彼女は静かに笑みを浮かべ、言う

「…私は『織斑　千冬』　かつて『白騎士』であり、最強のＩＳ操

縦者【ブリュンヒルデ】でもある

誇りだったぞ、お前と一戦を交えた事をな」

「そりゃ……尚更、光栄だな。よろしくな、【千冬】」

「こちらこそ……【ジェイソン】」

そして、俺と千冬は互いに握手を交わした

ーーーーーーーー

奇妙なモノだろう？

かつて、敵だった奴と今では親友に近い関係となっている

他人から見れば、理解し難いモノなのかも知れない

だが、そんな事は知った事じゃない

他の奴が、どうこう言おうが……好きなだけ、言わせておけば良い

俺は彼女の事を信用し、彼女も俺を信用している

理由なんて分からない

お互い、一戦を交えたからかも知れない

ただ、そう感じるんだよ

――――――――

千冬と親友に近い関係へとなる中、意外な一面を知る事にもなった

「……千冬、お前…もしかして、『片付けられない女』って奴か？
男の俺から見ても、この散らかり様はあまりにも酷いぞ？」

「う、うるさいッ……第一、お前が口出しする事じゃないだろう……ッ！！」

「一夏が前に言ってたぞ？　『千冬姉は相変わらず、片付けられないから俺が家事をしないとな』ってよ」

「ッ……一夏め、余計な事を……」

そんな風に毎日――日常を送る中、俺はもう一人の『白騎士事件』に深く関わった人物と出会う事になる

『ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉』の開発者であり、『天災』と称される女性科学者――『篠ノ之　束』にな

回想　ー　【天災】と呼ばれし女　ー

それから、２ヶ月が過ぎた頃……

日本での俺の住まいとなっている車庫には度々、現れる奴が居た

ーーーーーーーー

その日は『五反田食堂』での仕事は休みであり、俺は数少ない趣味であるバイクや車を整備しながら、過ごしていた

「ジェイくーんッ♪　愛しの束さんが遊びに来たぞーッ！！」

そう……度々、俺の車庫に現れる奴はコイツ――――

「……『束』、何時も言ってるが整備中に現れるのは構わないが抱きつくなって言ってるだろう？」

「むぅ……ジェイくんは束さんみたいな美少女に抱き付かれて、嬉しくないのかなぁ？」

バイクを整備する俺の背中に、その豊満な胸を押し当てる『女』

モデルすら裸足で逃げ出す程の女性らしさを強調する引き締まった肢体に、まるで童話に登場する【不思議な国に迷い込む少女】の様な服装で身を包み、やたらと機械的で兎の耳をイメージした飾りを頭に着けている『コイツ』の名は――――『篠ノ之　束』

あの『白騎士』を含む『ＩＳ』の開発者であり、【天災】と称される女性科学者だ

――――――

『ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉』

元々は次世代の宇宙服を目的とした強化服（パワード・スーツ）だったが、開発者である『篠ノ之　束』が起こした事件――『白騎士事件』

それを機に『ＩＳ』の計り知れない能力に目を着けた各国は、次々

と『ＩＳ』の兵器化へと着手していった

だが、『ＩＳ』には一つの問題点があった――それは、『女性』にしか扱えないというモノだった

それ以降、ＩＳとその技術は各国へと普及。また、女性にしか扱えない為、各国の軍事・国防の要職に多くの女性が就任していった結果……

これまでの男性を中心とした社会――『男尊女卑』が終わりを告げ、新たに女性を中心とした現在の社会――『女尊男卑』が始まった

当時、俺が『白騎士事件』での不名誉除隊となった後、その影響は軍隊でも広がった

今まで、戦場での主役であった旧来の兵器と軍の縮小、男たちの肩身はどんどん狭くなっていき、俺に軍歴の剥奪と不名誉除隊の判決を言い渡したこれまで上層部に務めていた男幹部たちもが次々と退任、今では男の軍人たちは厄介者に近い扱いを受けているらしい（俺の除隊後、残る『ファントム隊』の１１人も直ぐに変わり行く軍を捨て、自ら退役したらしい）

――――――――

『篠ノ之　束』と出会う事になったのは、千冬との出会いから直ぐだった

ある日、千冬は俺に会いたいという友人が居ると言った

後日、俺の車庫に千冬と共に来たのが『篠ノ之　束』だった

「キミがちーちゃんの言ってたパイロット君かぁ……中々、男前じゃないかぁッ♪」

……と、脳天気な台詞を言うコイツがまさか、あの『白騎士』を含むＩＳの開発者だとは夢にも思わないだろう……

『篠ノ之　束』は直ぐに俺の事を「ジェイくん」と呼ぶようになり、俺に自分の事を『束』と呼ぶように強要させた

千冬曰わく『束が初対面の奴にそう言うのは極めて稀な事だ』らしい

束は人に関しては殆ど無関心であり、自らの両親ですら、ただの身内としか見ていないらしい。唯一、その身内に関心があるのは【妹】だけの様だ

束が俺に関心を持ったのは、あの圧倒的な力を誇る『白騎士』と互角に対抗したからだろう

若しくは、『転生者』という【異例（イレギュラー）】な俺と【天災】と呼ばれる自分の持つ【異例】を感じたからかも知れない

その後、『白騎士事件』は世界中に自身が開発したＩＳの能力を見せつける為のデモンストレーションであった等、驚かされる内容の話ばかりだった

普通ならば、男である俺らを蔑まれる対象とした原因である束に対して怒りを露わにするだろう

だが、俺は元から気にしてはいなかった――元々、古来から『男尊女卑』の時代はあり、今までに女性を蔑ろにしてきた【ツケ】が今となって来ただけ、『男尊女卑』から『女尊男卑』――ただ、今までの立場が入れ替わっただけだ、と考えていたからだ

それにあの時は、あまりの内容に怒りよりも呆れたという感情しか無かったしな……

――――――――

それから、束は度々、俺の車庫に現れる様になった

流石に各国に目を着けられている――所謂、『お尋ね者』の立場である束は仕事中には現れる事は無かったがな（その時だけは何故か、俺の携帯には必ず、束からの着信、又はメールが届いており、「女からなのか？」と蘭や雅さんから問い詰められる羽目になるのは余談だ）

車庫に戻れば、何故なのか、束は俺のベットで気楽そうに寝ていたり、俺が帰宅後にシャワーを浴びている最中に「天才である束さんが、お疲れなジェイくんの背中を流してあげるぞーッ♪」等、狙っているのか？としか言えない様なタイミングで現れたりもした

偶に千冬が来ている時に現れ、その度に……

「何故、お前が我が物顔でジェイソンの家に居るんだ……ッ！！」

「痛たたたたぁッ！！　ちーちゃん、痛いよッ！？　ちーちゃんのアイアンクローで天才な束さんの脳髄が零れ出ちゃうよッ！！？」

「そんな脳髄など、零れてしまえッ！！」

「痛い痛いッ！！　ジェイくん？！！　愛しの束さんのピンチだよ？！　助けてって……痛たたたたぁッ！！」

……等と、千冬のアイアンクローを食らうのが当たり前の光景なのだと思う自分が恐ろしく感じる事もあった

だが、束と出会った事で……

俺は再び、あの大空へと舞い戻る事になるとは……

この時の俺はまだ知らなかった

回想 ― 【幻影】 ―

それは、第二回目となるＩＳ世界大会――『モンド・グロッソ』の最中に起こった

当時、第一回目の『モンド・グロッソ』での総合優勝を果たした千冬も当然、日本代表のＩＳ操縦者として、大会に参加していた

最強のＩＳ操縦者――【ブリュンヒルデ】が二度目の制覇を果たすのか？　そんな噂が各国に広まる中、『ある事件』が起こる

それは千冬が決勝へと順調に歩を進め、決勝戦の当日だった――千冬の弟である一夏が何者かに誘拐されたのだ

俺はそれを知ったのは千冬からの連絡だった

会場に居る千冬にドイツ軍が独自の情報網で入手した一夏の誘拐を知らせたのだ。そして、俺は千冬からの連絡を受けた

その時、俺は千冬に頼まれたのだ

『ジェイソン……お願いだ……一夏を……私の家族を助けるのに手を貸して欲しい…』

こんな風に頼まれて、断るなんて馬鹿な事をする訳が無いだろう

俺は連絡を受けた後、車庫の奥底に眠る一台の物置代わりとなった車に近付き、トランクを開ける

軍を去り、『女尊男卑』となった今の世界で二度と身に着ける事は無いだろう、と思いながらも廃棄する事なく、残しておいたモノ

かつて、海軍のパイロット――【ＡＣＥ　ＯＦ　ＡＣＥ】と呼ばれる以前……僅かな間、海兵隊特殊偵察部隊だった頃に使っていた装備

俺はその防弾と防刃を兼ね揃えたジャケットを身に着ける――――

その背には偵察部隊の頃、個性が必要だな、等と考えて入れた紋章（エンブレム）

後に『ファントム隊』の紋章ともなる『漆黒の馬に跨り、剣を高らかに掲げる首の無い黒騎士』――中世の時代に実在したという東欧の伝説『首無し騎士（ヘッドレス・ホースマン）』が入っていた

――――――――

考えてみれば、予期する事が出来た事態だった

そう、『俺』――『織斑　一夏』は自分の情けない状態に苛立ちを覚える

『モンド・グロッソ』での覇者――『織斑　千冬』の弟である俺が、こんな風に狙われるのは考えれば、分かる事だった

情けない……不甲斐ない……

俺は縛られた状態で俺を誘拐して、この古ぼけた廃墟と呼べる場所にまで連れてきた連中を忌々しげに睨み付ける

だが、俺は軍人だった『アニキ』に言われた事を思い出していた

『良いか、一夏　どんな状況に陥っても絶対に冷静になれ。頭が冷

えれば、物事を落ち着いて判断できるからな。軍隊でも生き残る為には必要不可欠だぞ？』

俺は深く息を吐き出し、気持ちを落ち着かせる。そして、アニキが言ったように冷静に自分の状況を考える

俺と誘拐犯たちは今、古ぼけた廃墟と呼べる場所に居る。内部の構造からして、元工場……微かに鼻をつく潮風からして海が近いと思う

誘拐犯たちは……七、八人……それに『銃』なんてモノを持って、やたらと強屈な身体つきからして、アニキみたいに元軍人って所か……

俺は出来るだけ、思考を冷静にさせて状況を分析する

今、自分には何が出来て……何が出来ないのか……

こんな無様な状態じゃあ、何一つ出来やしない――つくづく、力無い自分を恨んだそんな時だった

『異変』が起こったのは……

――――――――

男たちは今回の簡単な『仕事』の成功を確信していた

男たちは元軍人で『傭兵』だった。あの忌々しいＩＳのせいで、職を失って今では雇われ兵士としての日々……

常に戦場で活躍し、敵を殲滅して男たちは喝采を受けた。なのに、今ではＩＳのお陰で女たちは我が物顔で世の中を支配したつもりでいる

今回の『仕事』――『織斑　一夏』という少年の誘拐の依頼人は不明だった。ただ、仕事の依頼と仕事内容とは釣り合わない程の莫大な報酬を相手側は提示してきた

『織斑』の名前は男たちでも聞いた事がある

今や世界中に普及されたＩＳの世界大会一一一『モンド・グロッソ』での総合優勝者であり、最強のＩＳ操縦者『織斑　千冬』

普通ならば、そんな奴の身内に手出しするのは自殺行為だろう。だが、男たちはＩＳを使う女たちを憎んでいた一一一ＩＳという強大な力が無ければ、何の役にも立たない癖に自らを『選ばれし者』だの『エリート』だとほざく女たちに痛烈な一矢を報いてやろうと思ったからだ

それに幸いにも、『織斑　千冬』は第二回目となる『モンド・グロッソ』に出場している為、標的一一一『織斑　一夏』という少年は一人だけだった

あっという間に標的を攫うと一時、身を隠すために埠頭沿いにある

廃工場へと移動、仲間たちと共にこの成功と引き換えに得る莫大な報酬に期待を膨らませた

だが、男たちは知らない

その男たちが居る場所一一一日の光も届かない暗闇には【幻影】が潜み、男たちを狙っている事を

一一一一一一一

『異変』は縛られた俺の側に立つ男から始まった

見ているだけで不快感を覚えさせるような表情で笑いながら、俺を見下す男――――こんな奴らに捕まるなんて千冬姉にとって、俺はどうしようもない足手まといだ、と自己嫌悪する俺の目に映ったのは……

突如……本当に一瞬だったから、よく見えなかったけど……黒い影――――そう【幻影】といえるソレは俺の側に立つ男を暗闇へと引きずり込んでいった

姿が見えなければ、音すら聞こえなかった。正に【幻影】は男たちに次々と襲いかかっていった

一人が消えても、残る誘拐犯の連中は全く気付かなかった。その『異変』を気付き出した男も居たが、その男も他の連中に気付かれない間に【幻影】に暗闇へ引きずり込まれた

二人が消えて、ようやく連中も気付いたらしく、俺の側へと駆け寄ると叫ぶように怒鳴りながら、俺に聞いてきた

『おい、小僧ッ！！　お前の側に居た二人はどこに行ったんだッ！？』

俺に聞かれても答えられる訳が無いだろう。【幻影】としか言いようの無い『何か』が暗闇へと二人を引きずり込んでいったなんて信じる訳が無い

聞いてきた男は何も答えない俺に腹を立てたのか、縛られて無防備な俺を殴りつけた

殴られた衝撃で頭はフラつき、口内からは血生臭い鉄の味が広がる

だが、その時だった。その【幻影】が残る男たちに一気に襲いかかったのは……

一人、また一人が一瞬で暗闇へと吹き飛ばされて消えていく

あまりの出来事に焦った男たちは手にした銃を四方八方へと撃ち始めた

鼓膜を激しく震わせる銃声――テレビや映画とは全く違う轟音に俺は地面へと伏せる

手で耳を塞ぎたくても縛られた状態の俺には出来ず、ただ必死に目を瞑った。聞こえるのは激しく鳴り響く銃声と男たちの悲鳴――五分くらいが過ぎた頃、目を瞑った俺の耳には先程までの激しく鳴り響く音は聞こえず、その代わりに俺へと近付く足音が聞こえた

その足音が一歩、一歩と近付くに連れて俺はこう思った

ゴメン……千冬姉……俺……最後まで、千冬姉の足手まといだった……

そう観念した俺の耳に聞こえたのは……

『…よぉ、一夏　大丈夫か？』

俺が千冬姉と同じ位に尊敬し、慕っている……『アニキ』の声だった

――――――――

かつての装備を物置代わりの車から引っ張り出した俺は一夏と一夏を誘拐した連中が居る場所――千冬から聞いたドイツ軍の情報を頼りに埠頭沿いにある廃工場へと向かった

その後はさっさと事を終えた。俺は持ち前――授かった能力を活用し、連中を片付けていった（あの時は、到着から10分くらいで片付いたから……自己最短記録だろうな）

だが、何よりも驚いたのは一夏を救出した直後にＩＳを展開した千冬が現れた事だ

決勝戦をそっちのけに千冬の奴は一夏を助けに向かったらしい。何だか、悪い事をした気分だったな……駆け付けた頃には俺が全て、片付け終えた後だったんだからな……

今回の事件は世間一般では非公式扱いとなり、千冬の『モンド・グロッソ』での決勝戦出場の棄権は世間の大きな話題となったのは言うまでもない

だが、話はまだ終わらない

今回の一件でドイツ軍は千冬に対して、一つの貸しを作った訳だ

後日、ドイツ軍は千冬に一年という期間で教官を務めて欲しいという要求を出した

勿論、千冬はそれを承諾した。だが、予想外な事も起きた

千冬と共に何故か、俺までもが補佐として指名されたのだ

かつての軍歴を剥奪された俺に何故、指名が来たのかは謎だった

とは言っても千冬の弟であり、俺の弟分でもある一夏を助けたのはドイツ軍の協力があってこそ……

千冬と俺は一年という期間限定で教官とその補佐に着任する事になった

そこで、俺が再び空を飛べる様になり……

かつての呼び名――【ＡＣＥ　ＯＦ　ＡＣＥ】と呼ばれる様になる事なんざ、誰一人が予想なんてしていなかっただろう……

回想　―　【フランキー】　―

ドイツへと向かった俺らを出迎えたのは一人の女性だった

『ドイツへようこそ、私は【フランキー・アルマ】中佐　これから一年、貴官たちが教官を務める基地での責任者だ』

『フランキー・アルマ』

因みに本名は『フランチェスカ・アルマ』であり、【フランキー】は通称らしい

ドイツ軍で随一の実力を誇る女性エース・パイロットであり、階級

は中佐

長く艶やかな黒髪、左目には眼帯をしており、その眼帯の下からでも見える程、大きな切創の傷痕……だが、その傷痕を差し引いても千冬や束たちと引けをとらない程の美貌を持っていた

後に知るが、アルマ中佐の性格は常に堂々としており例え、相手が自分以上の階級だろうが自国の首脳だろうが、物怖じせずに立ち向かうという男の俺から見ても『男前な性格』の持ち主だ

アルマ中佐に案内され、到着した基地で千冬が教官を務めるドイツ軍のＩＳ配備特殊部隊『シュヴァルツェ・ハーゼ』――通称『黒ウサギ隊』についての簡潔な紹介を受けた

部隊章は『眼帯をした黒ウサギ』であり、ドイツ国内にある１０機のＩＳの内、３機を保有している名実ともに最強の部隊

最強のＩＳ操縦者――【ブリュンヒルデ】の名を持つ千冬が、その部隊の教官に務めるに関しては納得だが、俺まで指名された事に関しては全く不明としか言いようがない

だが、基地に到着すると俺はアルマ中佐に呼び出された

――――――――

「生粋のエース――【ＡＣＥ　ＯＦ　ＡＣＥ】と呼ばれたパイロット『ジェイソン・シーガー』大尉……会えて、光栄だな？」

「……人違いでしょう、それと俺には軍に居た記録（軍歴）は存在しませんよ？」

『いや、お前で間違いない……アメリカ合衆国　海兵隊に所属し、今ではその存在を知る者は殆ど居ない部隊――『第３１４戦闘攻撃飛行中隊　ファントム隊』の隊長

『白騎士事件』までには、数多の戦闘で『一度も被弾した事が無い』という超人的な操縦技術を持つ世界屈指のエース・パイロットとしても有名だ

だが、『白騎士事件』での独断による撤退命令により、これまでの軍歴を剥奪、不名誉除隊とされた……まだ、人違いだと？」

「……それもドイツ軍独自の情報網から、ですか？」

するとアルマ中佐は手にしていた資料を綴じると残った蒼い右目で俺を見る

「少し、違うな……私は以前、この軍の精鋭戦闘機部隊――『

スレイプニル』を率いていた

私も『白騎士事件』の戦闘空域――【円卓】に居た

当時、軍でも最強と称されていた私たちは無惨にも白騎士に敗れた

……

私も『あの時』、お前に助けられた一人だった訳だ……

だから、感謝している」

「……中佐、感謝される事をした覚えはありません。あれは俺の独断なんですよ？」

するとアルマ中佐はふと、笑みを浮かべて言う

「【フランチェスカ】だ、今は私と二人しか居ないからな。ただし、それ以外の時には必ず『中佐』と『敬語』を使って貰うからな？【ジェイソン】」

「……了解、【フランチェスカ】」

そう言って、俺はアルマ中佐ーーー【フランチェスカ】は握手を交わそうとしたがーーーー何故か、フランチェスカは俺の差し出した腕を絡めるようにして抱き付いた

「……フランチェスカ……何してんだ？」

するとフランチェスカはこう言った

「何、握手なんかで掌の感触よりも『こっち』の方が良いだろう？
私とお前との仲だしな」

そういって、フランチェスカはその豊満な胸で俺の腕を挟み込む

「いや、そりゃあ……そっちの感触の方が……って、私とお前の仲って……」

その時だった

俺の背後から、今までに感じた事の無い『恐怖』が居たのは――
――「ほほう……アルマ中佐に呼ばれていったから、どんな要件かと思ったが……随分と楽しそうだなぁ……ジェイソン？」

声の主の方へと振り返れば、そこには一一一腕を組んで静かに微笑みながら、こちらを見る千冬が居た……但し、目だけは一切、笑っていなかったが……

「おや、『織斑　千冬』殿ではないか？　随分と物騒な雰囲気を出してるが……大丈夫ですかな？」

ニヤリッ、と笑みを浮かべて更に抱き付いた俺の腕を自らの胸で挟み込む

「いえ、心配には及びませんよ…『アルマ中佐』、ですが……ジェイソンの腕に抱き付くという行為に関しては、二人の会話の内容は存じておりませんが必要な事でしょうか？」

互いの呼び方にやたらと力が込められているのは気のせいだろう…

…少なくとも、今はそう願う

「何、この行為に関しては『私とジェイソンとの仲』では挨拶代わりだ。それに古来の人は『気に入った異性を腕尽くで虜にした』という……だから、私もその古来の伝統に従った訳だ」

「アルマ中佐、今の世界では個人の意志を尊重するという常識をお忘れみたいですね……それに『ジェイソンとの仲』については、私の方が深い間柄だと自負しておりますが？」

嗚呼、俺は何時までこの二人の間に居なければならないのだろうか……

「……なぁ、取り敢えず…お互いに冷静になってから……」

俺がそう口にした瞬間……

「「お前は口を挟むなッ！！」」

相当、頭に血が昇っているのかは知らないが……千冬とフランチェスカ、両名の拳が勢い良く俺の顔面へと炸裂

その結果、俺の意識は当たり前の様に刈り取られていった……

余談だが、これまでに衝撃（ショック）で気絶した事は三回、ある

――――――――

最初のは海軍にて、パイロットになる前だ

「普通、パイロットとなるには様々な適性検査などを行うが、特殊偵察部隊ではキミの噂は幾度となく聞いている。その為、技術と精神、知識面においては文句なしで合格だ

だから、簡易的な【衝撃テスト】を行う」

「【衝撃テスト】？」

椅子に座り、上官と試験官（何故か、医師（ドクター）まで居るが）の方へと向いた俺の目に映ったのは……

試験官が持つ木製の野球バットが俺の顔面に炸裂する瞬間だった

「こりゃ、凄いな……二分も経たない内に意識を取り戻したぞ」

「おめでとう、テストは合格だ。パイロットになれるぞ」

……等と抜かす連中に殺意を覚えた俺は悪くない筈……

ーーーーーーーー

あれは千冬と友人に近い関係となった頃……多少、世話になる事もある織斑家に差し入れをしに行った時だ

その時、広間では一夏と会えたが千冬の姿が無く、一夏曰わく「久々に千冬姉、仕事が休みだから、まだ寝てるんじゃないかな？」と言い、俺が千冬を起こしに行く事となった

千冬の部屋の前に着くと俺はおもむろに扉を開けた（この時、ノックすれば良かったが……）

そして、俺が見たモノ――着替え中なのか、黒い下着姿の千冬だった。そして、互いの視線が交差する

「……やっぱ、黒が似合うよな？」

「み、見るなぁぁぁぁぁッ！！」

……と、千冬の拳が俺に炸裂して意識を一瞬で刈り取った時

――――――――

そして……今現在、千冬とフランチェスカの二人の拳を喰らった時だ

因みに分かると思うがこれが三度目の気絶だった

回想　―　【出来損ない】と呼ばれし少女　―（前書き）

相変わらずの駄文かつ超ご都合主義が冴え渡る話です

そんな駄目な作者ですがよろしければ、これからもよろしくお願いします……

回想　―　【出来損ない】と呼ばれし少女　―

三度目の気絶から、数日後……

千冬が教官を務めるＩＳ配備特殊部隊『シュヴァルツェ・ハーゼ』
―――『黒ウサギ隊』は正に優秀だった

教官を務める千冬の教導は、基礎を徹底的に身体に染み込ませるという従来の教導スタイルだった

確かに優秀なＩＳ操縦者と言えど、基礎を蔑ろにすれば、ロクな結果にはならないだろう。それは俺が戦闘機乗りである頃と同じだ

だが、ＩＳは高性能な代物だ。操縦者の実力以上の力を発揮させる
――しかし、基礎を徹底して身体に染み込ませた操縦者がＩＳを
操縦するならば、ＩＳを完全に操る事が可能だろう

千冬もＩＳという存在をよく知っている。そして、人間性能の限界
というのも充分に理解しているからこそ、教官としての指名を受け
たのだろう

この教導スタイルはＩＳに最も有効だと、俺は思う

男である俺はＩＳについては、全くの専門外だが……稼働時間に比
例して、上達するらしい。だから、回数を重ねての教導を千冬は繰
り返した

この点については、筋トレと同じモノだろう。より、ハードなトレ
ーニング内容よりも軽いモノで回数を重ねれば、効果があるようにな

俺の仕事は教官を務める千冬の補佐

とは言っても、ＩＳを使う事が出来ない俺には教導を受ける『黒ウサギ隊』の隊員たちの適性資料の確認くらいの仕事だった。無論、『女尊男卑』の世界では……どこに言っても男の肩身は狭い

『黒ウサギ隊』の連中からは何故、男である俺が千冬の補佐を務めているのか、理解に苦しむ表情を浮かべられていた

だが、そんな中で俺は一人のＩＳ操縦者の資料を見付ける

名前は『ラウラ・ボーデヴィッヒ』

まだ幼いながらにして、少佐の階級と『黒ウサギ隊』の隊長の座に着く少女だった

功績はあらゆる兵器の操縦方法や戦略等を体得し、常に優秀な成績を誇るという驚くべきモノだ

しかし、資料にはＩＳの登場以降、今までの成績とは打って変わり、全て基準以下の成績となっていた

ＩＳ操縦者である時点で、少なからずはＩＳに対しての適性はあるのだろう

だが、俺はそれ以上に引っ掛かる点があった

あの若さにして、以前の成績は不釣り合い過ぎる……過去に某国では、中国の一人っ子政策で男を望む家庭から生まれた娘が孤児院に送られるのに目を着けて、秘密裏に養女として引き取るという事をしていた

引き取った娘に様々な戦闘と殺人技術を仕込ませて、一切の感情も無く任務を確実にこなす【冷徹な機械】にする為にだ

しかし、あの若さでそこまでの技術を体得できるとは思えない。生まれながらも特殊な能力を持つ【転生者】である俺ならば、まだしもだ……

何かが引っ掛かる……俺はそう感じた

―――――――

後日、俺はフランチェスカに『ラウラ・ボーデヴィッヒ』について、問いただした

そこで知ったのは、更に驚くべきモノだった

『ラウラ・ボーデヴィッヒ』は、かつてドイツが研究していた遺伝子強化の試験体として生み出された存在―――所謂、『試験管ベビー』であり、戦うための道具としての存在という事だ

ＩＳ登場以降、成績の急激な悪化の理由は―――『越界の瞳（ヴォーダン・オージェ）』と呼ばれる疑似ハイパー・センサー仕様のＩＳ用補佐ナノマシンを左目に移植した際の不適合である事を知った

『越界の瞳（ヴォーダン・オージェ）』とは、ＩＳ適合性の向上のための処置の一環で、『脳への視覚信号の伝達速度の飛躍的な高速化』、『超高速戦闘下での動体反射を向上』を可能にする代物らしい。理論上、不適合などのリスクはないと言われたが……

現に移植された『ラウラ・ボーデヴィッヒ』の左目は金色へと変色、制御不能となった。

その後、あらゆる訓練において後れを取る事となった今では……【出来損ない】という烙印の象徴となってしまった

（因みに『黒ウサギ隊』の隊員たちは、全て『越界の瞳（ヴォーダン・オージェ）』の移植者であり、肉眼の保護と部隊の誇りとして眼帯を装着している）

―――――――

その話を聞いた俺は、フランチェスカと千冬を呼び出して『ある頼み』をした

もしかしたら、『ラウラ・ボーデヴィッヒ』――彼女に同情したからかも知れない

だが、それ以上に俺は気に食わなかった

テメェ等の都合で作り出しておいて、自分たちの期待通りに行かなかったら、【出来損ない】と呼ぶだと……？

俺はこの世で我慢ならない事は三つある

『仲間を見捨てる事』

『裏切る事』

そして、何よりも……

『命を軽々しく扱う事』だ……

――――――――

それから、暫くすると『黒ウサギ隊』の教導成績にて、『ラウラ・ボーデヴィッヒ』の成績は徐々に頭角を表し始めた

他に変わった事と言えば……

「う……長…た……隊長ッ！」

ふと思考の海に意識を沈めていた俺を『隊長』と呼ぶ声により、俺は意識を引き戻す

そして、その声の主の方へと向く――そこには……

「『ラウラ』、その『隊長』って呼び方はどうにかならないのか？階級はお前の方が上なんだぞ？」

そう、今や名実ともに『黒ウサギ隊』隊長――ＩＳ配備特殊部隊『シュヴァルツェ・ハーゼ』きっての実力者の座へと返り咲いた『ラウラ・ボーデヴィッヒ』が居た

「いえ、私にとって『隊長』と『教官』は【出来損ない】と呼ばれた私を再び、今の座へと返り咲かせてくれた恩人ですので……それに、フランキー中佐から隊長の軍歴や率いていた部隊についても聞いております。

如何なる状況下においても仲間を見捨てずに勝利へと導く――『生粋のエース【ＡＣＥ　ＯＦ　ＡＣＥ】』と呼ばれた隊長は私にとって、理想の隊長像ですから」

相変わらず、堅苦しい奴だな、コイツは……というよりも口が軽いぞ、フランキー……

俺は『ラウラ』の隣に居る『黒ウサギ隊』副隊長――『クラリッサ・ハルフォーフ』へと目を向ける

「『クララ』、お前からも何とか言ってくれないか？」

「無駄だと思いますよ？　隊長はシーガーさんを織斑教官と同じくらい、慕っていますから」

そう言って、『クララ』は静かに微笑む

――――――――

あの時、俺は『ラウラ・ボーデヴィッヒ』についてを知った後、千冬とフランチェスカに頼んだ事――『ラウラ・ボーデヴィッヒ』を俺と千冬が再び、部隊長の座……『最強』へと返り咲かすというモノだった

フランチェスカはそれを笑いながら、承諾した。『頂点（トップ）から【出来損ない】へと墜ちたエースを再び、頂点へと戻す為に鍛え直す』という俺の考えを気に入った様子だった

基本的にＩＳ関連は千冬が担当、俺の担当は従来の空中戦の基礎、体力と精神面の向上だった

既に『ラウラ・ボーデヴィッヒ』はあらゆる兵器などの操縦方法を体得している為、その応用をＩＳに生かした訳だ

空中戦の基礎に関しては俺が『Ｔｏｐ　Ｇｕｎ』時代に経験した内容を活用した。それに『Ｔｏｐ　Ｇｕｎ』とは【空中戦再教育】の為、設立されたモノだしな

教導スタイルは『Ｔｏｐ　Ｇｕｎ』と同じ一一一日に二度の実戦訓練、合間を縫っての学科とテスト……実戦訓練に関しては最強のＩＳ操縦者『織斑　千冬』が居るから、『ラウラ・ボーデヴィッヒ』は日が経つに連れて、成長を果たしていった

徐々に本来の実力を取り戻していく『ラウラ・ボーデヴィッヒ』は千冬の事を『教官』と、俺の事は『隊長』と呼ぶようになり、俺らも『ラウラ』と呼ぶようになった。因みに最初の頃、俺は渋っていた（一応、以前の俺の階級は大尉であり、ラウラは少佐であったからだ）

だが、涙目で俺を見上げて『隊長……駄目なんでしょうか……？』なんて【反則技】を使われて、俺は折れるしか無かった（まだ子供である年齢の少女に、そんな目で言われた時の罪悪感がハンパなかったからだ……）

『黒ウサギ隊』副隊長一一一『クラリッサ・ハルフォーフ』との出会いはラウラの教導中でのモノだった

千冬と共にラウラへ全力でサポートする俺を見て、この『女尊男卑』の世界に居る『過去の栄光に縋り続ける情けない男』たちとは違い、『女尊男卑』の世界でも、周りからの目を気にせずに堂々とする俺の姿に信頼できると思ったらしい

元々、階級も同じ『大尉』であった為か、直ぐに俺は『クララ』と呼ぶようになった（だが、この時にラウラと千冬がやたらと不機嫌だったのは謎だ……）

――――――

それからは、隊長である『ラウラ』と副隊長である『クララ』からの信頼を得た俺は徐々にだが、他の隊員たちにも信頼され始めていた

千冬曰わく『お前の兄貴的な人柄も理由の一つだろうな』らしい

確かに信頼を得た隊員の何人かは『お兄様』だの『アニキ』だの『お兄ちゃん』だのという奴も居たがな（その時、千冬やラウラたちは『またオトしたのか……』、『ライバルが……』、『朴念仁……』等と良く分からない事を呟いてたな）

ドイツでのそんな教導の日々を送る中、俺は『思わぬ再会』を果たす事となった

それが、千冬やラウラたち……何故か、『黒ウサギ隊』の隊員たちがやたらと不機嫌になる事になるのだが……

回想　―　【出来損ない】と呼ばれし少女　―（後書き）

次話では、『女性の嫉妬は恐ろしい』というのが主題となる予定です

『思わぬ再会』で登場する人物は、既にお分かりでしょうけど……

回想　ー　【思わぬ再会】と【復職】　ー

ドイツ軍での教導を始め、半年の月日が過ぎた

私ーーー『織斑　千冬』は私の補佐官として、私と共に教導を受け持つ彼ーーー『ジェイソン・シーガー』と共に半年の月日を過ごしたのだ

ジェイソンは私にとって、束以外に親友といえる間柄だ。しかし、私は彼に……その……少なからず、好意というモノを持っている……

いや、私以外にも私と彼の教え子となっている『シュヴァルツェ・ハーゼ』ーーー『黒ウサギ隊』の隊員たち、隊長を務めるラウラや副隊長のクラリッサ……私の古くからの親友ーーー『篠ノ之　束』も好意を持っているのだろう……

ジェイソンはＩＳという存在ーーーこの『女尊男卑』の世界に翻弄

された男だろう……かつて『生粋のエース』と呼ばれていた男が、これまでの栄光を奪われ、空から墜ちてしまったのだから……

だが、彼は自分が行ってきた事に後悔など無い、と言った。ＩＳを操る私たち、今の『女尊男卑』の世界では様々な面での主役となっている女性を一切、恨むことは無かった

他の男性ならば、かつての栄光に縋り続けるか、これまでの主役という座を奪った『女尊男卑』の世界を恨み、女性を憎むのが大抵なのだろう

しかし、彼は常に堂々として今の世界に屈すること無く、自分を貫き通している――そんな彼に私たちは惹かれたのかも知れない

半年の月日が過ぎた今では、私が仕切っていた教導に彼も教導を受け持つ様になっていた

また、以前まではジェイソンの事を『女尊男卑』の風潮か、快く思

わなかった隊員たちも今では、ジェイソンの教導を真剣に取り組んでいる

教導については、ＩＳ関連のモノは男であるジェイソンには専門外である為、私が担当を受け持ち、体力面と精神面の向上を兼ねてのトレーニングはジェイソンが担当している

元々、軍人であるジェイソンにとっては、正に適任だろう。しかし、流石は元エース・パイロットというべきか……

彼のトレーニング内容は『少々、酷なモノ』だった

――――――――

「おらおらッ！！、最後くらいは気合いを入れて走れよな？　もし、一人でも脱落したら……もう1セット追加だぞッ！！」

今、俺は基地内の滑走路にてトレーニングを行っていた

滑走路の距離は片道でおよそ、３０００～４０００m程。片道一回を1セットとして、計2セット（往復一回）のランニング形式のトレーニングだ

これでも、充分に譲歩した方だ。昔の男だらけの部隊では少なくとも、4～5セットはやっていたからな

俺と千冬も勿論、このトレーニングには参加している。サボる奴が居る訳では無いが、ただ隊員たちだけを走らせて激を飛ばすのは俺の性分じゃないしな

トレーニングを終えた頃には隊員たちは皆、滑走路の上に寝転ぶよ

うに仰向けとなって倒れ伏す。ラウラやクララ、千冬も若干は息をきらすも他の隊員たちと比べれば、まだ余裕がある様子だ

「ほら、全員に俺からの差し入れだ」

そう言って、俺はクーラー・ボックスに入れてある人数分のスポーツ・ドリンクを手渡す

毎回、俺がやる教導（トレーニング）を終えた際に必ず、差し入れる定番となっているがな

「ふぅ……毎度の事だが、お前の自腹でこの人数分の差し入れは厳しいんじゃないのか？」

手にしたタオルで汗を拭いながら、千冬は俺を見る

「何、軍での給料は殆ど使い道が無くてな。多くあっても困るモノ

じゃないが……

これ位の差し入れで、アイツ等（隊員たち）の笑顔が見れるんなら、惜しくも何とも無いさ」

俺は笑いながら、憎たらしい位に晴れ渡る空を見上げる

以前まで遠く感じていた空が今はやけに近く、俺は感じていた

――――――――

ジェイソンの教導（トレーニング）を終えた私たちは、ジェイソンからの差し入れであるスポーツ・ドリンクでの水分補給をしていた

私も日本代表のＩＳ操縦者として、普通の人間よりは、体力はある方だと自負していたが……あのトレーニングを平然とこなし、汗一つすらかいていないジェイソンの体力は異常だろう

以前、日本に居た際、剣道での模擬戦をジェイソンと行ったが……三時間以上の長期戦となった際もアイツは平然としていたな。それ以前にアメリカ出身であるジェイソンはあまり剣道を知らなかったが、いざ模擬戦を開始すると型などは無茶苦茶だったが、私と互角に渡り合った

元は軍人である以上、戦い慣れているのだろう。ジェイソンは長年、剣道を経験している私から見ても申し分ない実力を誇っていた

「教官、隊長はあれだけのトレーニングに平然としていますが……何か、秘訣でもあるのでしょうか？」

私の隣で休んでいたラウラはジェイソンを見つめながら、私に問う

「いや、アイツの場合は秘訣というよりも習慣だろうな。プロの演奏家は毎日、欠かさずに楽器を引くという。常に演奏の感覚を忘れない為にもな

アイツも同じだ、軍を離れた後も毎日、欠かさずに鍛錬を続けているらしい」

「成る程……常に自分を甘やかさず、厳しくする……私も見習わなくては…」

……ジェイソンの言う通り、堅苦しい奴だな……

ふと、ジェイソンを見ると他の隊員たちから何やら会話をしているジェイソンの姿があった。隊員は皆、笑顔でジェイソンとの会話を楽しんでいる様子だ

皆、ジェイソンの兄貴的な人柄に惹かれているのだろう。毎回、わ

ざわざ差し入れを自腹で用意する男だしな

私はそんな風にジェイソンの事を考えているのが習慣となっている事に気付かないでいた

――――――――

俺が受け持つ教導（トレーニング）を終えた後、俺はフランキー中佐――フランチェスカに呼び出されていた。詳しくは知らないが……何やら、仕事上での話らしい

「フランキー中佐、何か御用でしょうか？」

俺は敬礼をフランチェスカに向け、質問する

「……今、私のオフィスには私とお前の2人っきりだ。だから、その堅苦しい挨拶は止めろ、ジェイソン？」

「……仕事上での話って聞いたが……俺に何の関係があるんだ？」

するとフランチェスカは、一つの資料を取り出すと俺に手渡す

「今日、この基地に二人のＩＳ操縦者が到着する。どちらもアメリカからだ

一人は米軍のテスト操縦者、もう一人はアメリカ代表の操縦者だ。理由については二人が来てから話すが……お前が居なくては話にならなくてな……」

俺は手渡された資料へと目を通す……が、そのテスト操縦者の項目を見て固まる

「後、三十分で到着する予定だ。資料にもあるが、アメリカ代表の操縦者の名は『イーリス・コーリング』、テスト操縦者の方は元空軍所属でエース・パイロットだったようだ

名前は……」

少なくとも、アメリカ代表の方の名前は知らなかった。俺が除隊した後にアメリカ代表となったからだろう

だが、テスト操縦者の方は知っている……いや、お互いに『知りすぎている』というべきか

「……悪いが、この後で格納庫（ハンガー）の整備兵たちとポーカーの約束が……」

「却下だ、それに言った筈だぞ？

お前が居なくては話にもならないとな」

逃げ場無し……しかもよりによって、此処で会う事になるとはな……

俺が手にしている資料に書いてある項目一一一テスト操縦者の名前はこう書いてあった

『ナターシャ・ファイルス』

……どうやら、俺の運とやらは、これまでに無い位に最悪のようだ……

一一一一一一一一

そして、三十分後……

俺にとっての【公開処刑場】と成り得るこの格納庫で、千冬とフラ

ンチェスカ、ラウラたち『シュヴァルツェ・ハーゼ』の隊員一同が、到着した二人のＩＳ操縦者一一一『イーリス・コーリング』と『ナターシャ・ファイルス』に目を向けている

あえて言っておこう。正直、ナターシャの奴が何を言い出すのか、気が気では無い事を……

「……という訳だ。質問のある者は挙手しろ」

フランチェスカの声で意識を引き戻すと、どうやら二人についての紹介を終えたみたいだった

「はい、お二人はアメリカ出身であり、ファイルス操縦士は米軍のテスト操縦者と聞いておりますが…お兄さ……ジェイソン・シーガー補佐官とは面識があるのでしょうか？」

危うく、俺の事を『お兄様』と呼び掛けた隊員が挙手し、二人に質問を問い掛ける。よりによって、ピンポイントでかよ……

俺は一同から少々、離れた場所に居たが懐にしまっていたパイロット・グラスを取り出すとソレをかけて、なるべく視線を合わせない様にする

「私は面識は無いけれども……『ナタル』の方が詳しいんじゃないかしら？」

「そうね……【ジェイソン】と面識はあるんだけれども……何て言えば良いかしら…？」

焦らすような口調で微笑みを俺へと向ける

俺の脳内では警告音（アラート）が鳴り出して、止まらない

《メーデー、メーデーッ！！　捕捉（ロック）されたッ！！》

「そう……お互いに、『よく知っている仲』かしら？」

《敵機、ミサイルを発射ッ！！　繰り返す、ミサイルを発射ッ！！》

「『よく知っている仲』……ですか？」

「えぇ、何故なら……私と彼は【恋人】だったんだから」

《被弾したッ、被弾したッ！　離脱できないッ、墜落するッ！！》

「ほほう……それは中々、興味深いモノだな…？」

千冬が俺に視線を向けると同時に一同、全員が俺を見る

「……人違いではないでしょうか？　同姓同名という可能性が……」

俺は視線を逸らした状態で言う

「あら、最後の夜は二人でベッドの上であんなに激しく……」

「すまん、俺が悪かったから、それ以上は言うな……」

ここからが良いところなのに……、と呟くナターシャ

「「ジェイソン……」」

振り返れば、聖母と表現すべき微笑みを浮かべる千冬とフランチェスカが居た――但し、その目だけは一切、笑っていなかったが

「「後で詳しく話を聞こうじゃないか…？」」

「……了解…」

そんな二人を前にＮＯと言えるだろうか？

間違いなく不可能だろう（しかも、ラウラを含む『黒ウサギ隊』のメンバーは涙目で俺を無言のまま、見つめるのだから罪悪感は桁違いなまでにハンパない…）

だから、此処では会いたくなかったんだ……

修羅場と化した格納庫で俺は思った

――――――――

場所は変わり、『黒ウサギ隊』を除く俺たちはフランチェスカのオフィスに集まっていた

無論、一時間前までは千冬とフランチェスカの質問（いや、尋問か？）があったのは言うまでもない……

「それでは、改めて自己紹介をしよう。

私は『フランチェスカ・アルマ』中佐、この基地での全権と責任を任されている

【ジェイソン】とは『深い間柄』でもある」

「私は『織斑　千冬』、日本代表のＩＳ操縦者であり、今はこの基地での教官を務めている

【ジェイソン】とは『親しい間柄』とでも言っておこう」

やたらと『間柄』を強調する二人……何故、間柄にこだわるのかは不思議だがな

「それじゃあ、此方も改めて……

私は『イーリス・コーリング』、アメリカ代表のＩＳ操縦者よ

彼（ジェイソン）とは初対面ね」

「そして、私は『ナターシャ・ファイルス』、元空軍所属のエース・パイロットであって、米軍のテスト操縦者でもあるわ

彼とは【恋人】であって、『誰よりも深い間柄』と言っておきましょうかしら？」

やたらと【恋人】というのを強調するナターシャ……頼むから、これ以上に二人を焚きつけるな

火に油なんてレベルじゃないぞ……最早、核弾頭を放り込むと同等だぞ……

そして、四人の視線は俺へと向けられる

「……『ジェイソン・シーガー』元大尉、第３１４戦闘攻撃飛行中隊ーーー『ファントム隊』隊長を務め、今は千冬の補佐官を務めている……

そこに居るナターシャとは……【元恋人】だった…」

「そう、ジェイソンには【何度も】抱かれているわ」

ナターシャ……頼む、五分で構わないから二人を焚きつけるな……

「……まぁ、その話については『後日、ゆっくりと』聞かせて貰うとして……」

フランチェスカは仕事の話へと切り替える――その表情は『フランチェスカ』では無く、『フランキー中佐』のモノになっていた

「わざわざ、二人にアメリカからドイツまで来てもらった理由は……先程、格納庫にて説明した我が軍のＩＳ配備特殊部隊――『シュヴァルツェ・ハーゼ』の監査という訳だが……

それは『表向き』だ。本当の目的は『ジェイソン・シーガー』元大尉、貴官だ」

「俺が……ですか？」

するとアメリカ代表のＩＳ操縦者、米軍のテスト操縦者――『イーリス・コーリング』と『ナターシャ・ファイルス』は、こう告げた

「ＩＳとその技術が兵器としても普及した現在では、軍や国防にも多くの女性たちが要職についております

『ＩＳに対抗できるのはＩＳだけ』

その考えから、このドイツ軍でのＩＳ配備特殊部隊『シュヴァルツェ・ハーゼ』の様に各国では様々なＩＳ配備の部隊結成、最新機の共同開発などに力を入れている傾向があります」

『イーリス・コーリング』の説明の後に続け、ナターシャは言う

「ですが、過去に起こったあの『白騎士事件』――あの事件の際、今までは極めて、少数の人物しか知らない【ある事実】が最近となって判明しました

かつて、世界最高峰の腕を誇ったパイロット……あの白騎士とも唯一、互角に交戦した戦闘機乗り――【ＡＣＥ　ＯＦ　ＡＣＥ】という存在を

国際ＩＳ委員会は、ＩＳを使わずに対抗できる世界で唯一の存在――【ＡＣＥ　ＯＦ　ＡＣＥ】の詳細を全権を使用して、あらゆる方面を調べ上げた結果……ようやく辿り着いた訳です

第３１４戦闘攻撃飛行中隊『ファントム隊』隊長、『生粋のエース

【ＡＣＥ　ＯＦ　ＡＣＥ】』と呼ばれたジェイソン・シーガー元大尉、貴方にね」

そして、彼女――ナターシャは言った

「ジェイソン・シーガー元大尉、国際ＩＳ委員会の命により、かつて貴官に言い渡された軍籍を含む軍歴の剥奪と不名誉除隊を取り消し、貴官を【復職】させます

但し、海軍としてではなく……国際ＩＳ委員会――【国連】所属の『フリー・パイロット』、所謂『傭兵』としてですが」

それは俺にとっての……【復職通告】だった

回想　―　【ＡＣＥ】の条件　―（前書き）

空中戦などのスカイ・アクション物の執筆は今回が初の試みなので、表現が曖昧となって難しい……

そんな作者ですが、よろしければ今後ともよろしくお願いします……

回想　―　【ＡＣＥ】の条件　―

【復職通告】から翌日……

俺は今や、国際ＩＳ委員会―――【国連】所属の『傭兵』となった訳だ

一つ、疑問に思った事は……よくアメリカ軍はソレを容認した事だ、一度は除隊したパイロットを使うのをな

だが、ナターシャ曰わく……当時、俺に判決を言い渡した上層部たちは『女尊男卑』の影響で俺が除隊して直ぐに上層部の席を降ろされた

また、同時の判決は軍の法律では無く、私情を挟んだ上での身勝手な不当判決である、という事で当時の上層部のメンバーには批判も

あった為か、皮肉にも連中は俺に言い渡した『軍歴の剥奪』と『不名誉除隊』となったらしい

まぁ、その点に関してはあまり興味は無かった。どこかの言葉にもあるが……『人を裁いたら、自らもその秤で裁かれる』

つまり、それ相応のツケはいずれ、ソイツ等にも回ってくるモノだと考えていたからだ

そして、国連所属の傭兵となった俺は今――ドイツ山岳地帯の上空に居る

――――――――

話はこうだった。国連はパイロットとしての俺の腕を買った、しかし、俺は除隊から数年はもう一度も飛んでいない

そこでかつての腕を取り戻す為、訓練という名目で再び、こうして空を飛んでいる訳だ

――――――

晴れ渡った大空の下で俺は搭乗する機体、フランチェスカが戦闘機乗りであった頃の愛機『Ｓｕ－３３』――通称『フランカー』の操縦席にて、再び大空を飛ぶ喜びを噛みしめていた

《ファントム１　こちら、フランキー中佐だ。聞こえるか？》

《こちら、ファントム１　感度良好》

操縦席（コックピット）内に無線での俺らの会話が響き渡る

《ジェイソン、お前にはかつての腕を取り戻す為、『相手』を用意している》

《『相手』……無人機（ＵＡＶ）か？》

《直にお前の正面に現れる。精々、頑張ることだな》

俺はレーダーに映る前方の機影を確認する

そして、前方へと視線を向けると……

《……おい、数年間の空白（ブランク）を抱えてるパイロットに一国を代表する『ＩＳ操縦者』を相手させる気か？》

俺の前方に居る『相手』――アメリカ代表のＩＳ操縦者『イーリス・コーリング』がＩＳを展開した状態で居た

《何、私はスパルタ流でな。それに人間、極限にまで追い込めば何でも出来るだろう？》

嗚呼……今、絶対に笑顔で言っているよな、フランキー……

《それじゃあ、始めましょうか……【ＡＣＥ　ＯＦ　ＡＣＥ】さん？》

前方に居る『イーリス・コーリング』からの無線が入る

……まぁ、何とかなるだろう。これまでもそうだったしな

《お手柔らかにな……ルールは一般的なモノだ『捕捉された方の負け』、問題は？》

《いいえ、じゃあ……始めましょう》

その言葉と同時に俺と『イーリス・コーリング』の模擬戦が開始される

――――――――

ＩＳと空中戦を挑んだのはコレで二度目だ

模擬戦を開始すると同時に驚異的な機動性で『イーリス・コーリング』に背後へと着かれた俺はそう思いながら、スロットル・レバーを押し込み、エンジン出力を上げる

端から見ても遊ばれているとしか言いようが無いな……コレは…

俺は速度を加速させ、迫るＩＳ－－－『イーリス・コーリング』を引き寄せる

徐々に距離は狭まる中、俺は『高機動旋回』－－－【ハイＧターン】からの宙返りで『イーリス・コーリング』の背後へと回り込む

回り込むと同時に俺はミサイルから機銃へと武装を切り替え、前方の『イーリス・コーリング』への捕捉を開始する

だが、ＩＳと旧来の戦闘機とではあまりにも機動性は違いすぎる。
『イーリス・コーリング』は左方向へと急旋回、此方からの射程外へと移動する

徐々にかつての勘を取り戻していく俺は、相手の左方向への急旋回とほぼ同じタイミングで急旋回、ピッタリと背後へ回り込む

身体に刻み込まれた――かつて、数多の激戦を潜り抜けてきた経験が俺を支配する。脳裏ではあの『白騎士事件』で行った数々の戦闘機動が繰り返して再生される

徐々にＩＳの機動性に慣れ始めた俺は捻りを加えての急降下を開始、急降下した俺に続けて『イーリス・コーリング』も雲の中へと入っていった……

――――――――

私――『イーリス・コーリング』は侮っていたと実感した。『ナタル』の恋人だった男性――【ジェイソン・シーガー】の実力をだ

この模擬戦を始める数十分前、基地の格納庫で『数年振りに戦闘機を操縦するな』、と苦笑いを浮かべて戦闘機の操縦席へと乗り込んでいった彼

だが今、私が相手をしているのは【ジェイソン・シーガー】という男性では無く……『生粋のエース』――【ＡＣＥ　ＯＦ　ＡＣＥ】と呼ばれた戦闘機乗りだった。ＩＳを操縦する私の背後へと回り込み、今も背後に着いている

捕捉されない様、急旋回を開始すれば、まるで予知しているかの様に同じタイミングでピッタリと着いてくる

これが【ＡＣＥ　ＯＦ　ＡＣＥ】の実力……

ＩＳと旧来の戦闘機という圧倒的な機能性の差を覆し、今にも私を撃墜すると言わんばかりの勢いで迫ってくる

私は『ＩＳに対抗できるのはＩＳだけ』と彼に言った

だが、現に彼は戦闘機でＩＳに対抗している。それは覆しようの無い事実

すると、今まで私の背後に着いていた彼の搭乗する戦闘機は突如として、急降下を開始すると雲の中へと入っていった

私は好機と思わんばかりに雲の中へと入っていく

雲の中は、当たり前の様に視界が悪く、彼の機体すら見えない

私はＩＳに備わっている『ハイパー・センサー』を使い、機体の位置情報補足を行う

すると直ぐに反応は表していた。しかし、その反応は私自身だった

何故？　センサーの故障なのか？　何故、私自身を表している？

混乱する私に映る視界に一瞬、陰りが表れる……まるで私の上を『何か』が覆い被すかの様に

私は頭上を見上げた。そして、ソコには……

《よぉ、何をボサッとしてんだよ?》

背面飛行で操縦席越しから、私を見下ろす彼が居た

――――――――

背面飛行での状態で、『イーリス・コーリング』を操縦席越しから見下ろしながら、俺は考えた

ＩＳというのは極めて、高性能な代物だ。搭載されたセンサー類も従来のモノとは比べ物にもならないだろう

『ＩＳに対抗できるのはＩＳだけ』

それは間違ってはいない……でもな、

《人が作り出したモノだ、やり方次第ではどうとでもなるモノなんだよ》

俺は背面飛行から機体を水平に戻すと加速、雲の中から抜け出す

続けて、『イーリス・コーリング』も雲の中から抜け出し、俺を追い掛ける

ある程度の速度に達すると俺は垂直上昇飛行を開始、上昇時にかかるGにより、身体中が軋む――しかし、俺にとってはその軋む音でさえ歓喜に感じる。自分が飛んでいる事を改めて、実感できるからだ

太陽を背にした状態で俺は下方に居る『イーリス・コーリング』の真上を飛んでいた

そこで、ある考えが浮かんだ

ＩＳとは元々、次世代型の宇宙服として開発されたモノ。以前、千冬から聞いた話では地上２００ｍの距離からでも、下に居る人間の眉先すら見えるらしい

今、俺は太陽を背にしたまま、本来は『イーリス・コーリング』にも降り注ぐ日差しを機体で覆い被している状態だ。ならば、ソレを利用できるのでは？

賭けに近い考えを俺は行動に移す。『イーリス・コーリング』が上昇を開始すると同時に機体を旋回、覆い被していた強烈な日差しが『イーリス・コーリング』へと降り注ぐ――すると僅かだが、『イーリス・コーリング』の動きが一瞬、鈍くなる

すかさず、俺は急降下から背後へと回り込む。降下中に用意していた捕捉を開始――鈍くなった動きが回復した頃、俺の機体は前方の『イーリス・コーリング』を捕捉完了（ロック・オン）していた

――――――――

私――『ナターシャ・ファイルス』はたった今、帰投したばかりの元恋人だった彼――『ジェイソン・シーガー』のトレーニングを見ていた

戻ってくると同時に彼はトレーニング・ウェアへと着替えてトレーニングを開始。そして、今に至る所だ

「戻ってくると同時にトレーニングって……随分と凄いわね？」

背後からの言葉に振り返ると、そこには一一一先程、山岳地帯上空でジェイソンに翻弄されていた『イーリ』が居た

「彼は昔からそうなのよ。晴れの日は飛ぶかトレーニング、雨の日は整備かトレーニング……絶えず、鍛えるのが日課ね」

「随分と努力家なのね？」

そんな会話をしている私たちの側へとトレーニングを終えたジェイソンが近寄る

「…はぁ……ナターシャ、タイムは…？」

私は先程まで計測していたタイムを確認する

「２時間１０分ジャスト……１００Ｋｍマラソン（ウルトラ・マラソン）をそんなタイムで終えるのは、『ジェイ』くらいじゃないかしら？」

「１００Ｋｍを２時間１０分って……最高記録でも、６時間はかかるけど？」

若干、汗を流すものの平然としているジェイソンに私たちは視線を向ける

「まぁまぁだな……取り敢えず、俺は汗でも流してくる」

そう言って、滑走路を後にしていった

「……凄いわよね、彼って…」

ジェイソンの後ろ姿を見つめながら、イーリはそう言う

「……昔、ジェイは言ってたわ。『エース』は三つに分けられるってね」

「三つ……？」

「えぇ……そう三つ…

『強さを求める者』

『プライドに生きる者』

『戦況を読める者』

……この三つよ。ジェイは……そう、『戦況を読めた上で強さを求めて』、エースと呼ばれたのよ」

そして、私も滑走路を後にする前にイーリに言う

「それと……彼に魅せられたら……『墜ちる』しか無いわよ？」

その直前、イーリからの小さな呟きを私は確かに聞いた

『……もう手遅れかもね…？』

また、『ライバル』が増えた訳ね……でもね……

そう簡単には渡さないわよ？

――――――――

基地のシャワー室にて、先程まで行っていたトレーニングでかいた汗を流す

数年振りの飛行に身体中の筋肉が悲鳴を上げている――明日は筋肉痛だな、こりゃ……

だが、俺は満足感に満ちていた。かつての勘と腕を徐々に取り戻していった事にだ

すると俺は背後から気配を感じ取る。俺が此処（シャワー室）に居るのを知った上で来る奴と言えば……

「……ナターシャ、お前か？」

俺は背後に居るナターシャと思われる奴へと振り返る――だが、そこに居たのはナターシャでは無く……

「残念、ナタルじゃないわよ？」

一糸纏わぬ姿……つまり、全裸でバスタオルを身に付けた『イーリス・コーリング』が居た

「……イーリス……悪いな、長居し過ぎだか？」

別に狼狽える事は無い。女の裸はナターシャで見慣れているからな

当たり前だが、かつて恋人だったアイツとは……まぁ、恋人同士が『スる事』は何度も経験しているからな

「ふふ……別に気にしないで？　私は『ジェシー』が居るのを承知で入ってきたんだから」

「…『ジェシー』……？」

「『ジェイソン・シーガー』だから、略して『ジェシー』なの。それとも……駄目だったかしら…？」

イーリスは俺の側へと近寄るとその繊細な指先で俺の胸板をなぞる

様に指を滑らす

「いや、別に構わないけどな……」

やけに熱っぽい視線を俺は感じながら、イーリスを見る

「……見事だったわ、ＩＳを翻弄する腕前……実戦だったら、今頃は……」

「紛れだよ、それに俺は雲や太陽……環境を利用しただけだ。戦闘機とＩＳの基本性能（スペック）じゃあ、勝負にすらならないだろ？」

するとイーリスはバスタオル越しから、その豊満といえる胸を俺の胸板へと押し当て、腕を俺の背へと回す

シャワー・ノズルから降り注ぐ温水が絶えず、俺とイーリスを濡らしていく

「…戦況を判断して、自分の居る場所の環境をも利用して、自分の力にする……それはジェシーの実力があるから、成せる事なのよ？

それにナタルから聞いたわ。『戦況を読めた上で強さを求め』、エースと呼ばれたって……

ジェシーは『エースとしての条件』を二つも満たしてるじゃない？」

「……俺は何時だって、自分をエースとは思っちゃいないぜ？

俺が【ＡＣＥ　ＯＦ　ＡＣＥ】なんて呼ばれたのは――『最高の仲間』たちが居たからだ

でなきゃ、とっくの昔に死んでいる」

イーリスは俺を見上げると、その繊細な指で俺の頬を撫でる

「……ジェシーと飛んで分かった事があるわ……

貴方は常にどんな不利な状況下でも余裕を崩さず、自信に満ち溢れている……それでも、自分の腕を過信し過ぎていないってね…」

「……イーリス……俺は……っ…」

「ん……っ……」

イーリスは俺の言葉を遮る様に……自ら、唇を重ねてきた

あまりに突然すぎる出来事に俺は唖然としたまま、立ち尽くしていた

五分……いや、十分？

或いはそれ以下かも知れない

それ程、時間が長く感じる間……イーリスは俺と唇を重ねていた

「っ……『イーリ』よ。イーリスじゃなくってね？」

悪戯が成功した子供の様に嬉しそうに『イーリ』は笑い、俺から離れるとこう言った

「今のは『お礼』よ。『ＩＳに対抗できるのはＩＳだけ』じゃない事を教えてくれた事にね、それと……」

『ナタルたちには負けないわよ？』

そう言い残し、イーリはシャワー室から出て行った

一人、シャワー室に残された俺は軽く壁に頭を打ちつける

取り敢えず……今、言える事と言えば……

「千冬たちにバレたら、殺される……」

その場合の自分が被る被害を考え、一気に体温が下がるのを感じた

俺は……

今、浴びているシャワーの温度を上げる事にした……

回想　―　【ＡＣＥ】の条件　―（後書き）

次回はドイツ駐在中でのジェイソンの受難（女難？）の日々を題材に更新予定です

さて、ジェイソンは無事にドイツでの教導補佐という仕事をこなせるのか？

番外編　―　【受難】又は【女難】　―

ドイツでの教導に加え、国連の傭兵（飼い犬）になってから一週間が過ぎた

本来ならば、国連からの通達と表向きの理由としての監査が終わったので任務完了と言う訳なのだが……未だにイーリとナターシャの二人が居るのが謎だ…

理由を聞いてみれば『ここ数年は休み無く仕事をしていたから、【長期休暇】を取った』らしい。ならば、南辺りで休暇を過ごせば良いものを何故、ドイツの一一一それも軍事基地で過ごすのか？

まぁ、余計な詮索は止めておこう。俺の安全の為にもな

ドイツでの教導補佐の仕事は至って順調だった。これも優秀なＩＳ操縦者たちである千冬たちや部下からの信頼を得ているフランチェスカが居てからこそなのだろう

ただ……女ばかりの職場で男である俺が居るからなのかは知らないが……ロクな目にあわない事が多かった

例えば……

――――――――

その日は教導が休みであり、俺は与えられた自室で惰眠に貪っている時だった

ふと、眠っている俺は自分の身体に【何か】が纏わり付く感覚で目を覚ます。自室では俺しか居ない筈……

俺はシーツを退け、纏わり付く【何か】を確認しようとすると……

「スゥ……スゥ……」

……と、可愛らしい寝息をたてるラウラが居た。どうやって、鍵の掛かった部屋に入ったのかよりも俺はラウラの格好へと目を向ける

その格好は……待機状態のＩＳ以外、何も身に着けていないモノだった（要するに【全裸】という訳だ）

「おい……ラウラ…」

俺の腹部辺りに抱き枕を抱える様にして眠るラウラを揺する

ラウラが密着する腹部からは暖かな体温と共に小ぶりながらも柔らかな双丘の感触が伝わる

「ん……隊長ぉ……？」

寝ぼけ眼を擦りながら、俺を見上げるラウラ

「……何してんだ？」

「……添い寝です」

「……何故に…？」

理由も無く、男に全裸で添い寝をする奴が何処に居るんだよ…？

「以前、クラリッサから聞きました。日本という国では、慕っている異性が居る場合はその異性と共に添い寝をするという伝統がある

と言う事を」

……俺も日本には長い間、居たがそんな伝統は聞いた事が無いぞ…

取り敢えず、ラウラに服を着させて部屋へと戻したのだが……俺はその日以降、教導のメニューに【正しい日本文化】という項目を追加する事にした

ーーーーーーー

他にも多数、あるのだが……『千冬』と『フランチェスカ』、『イーリ』と『ナターシャ』の四人を挙げる事にしよう…

ーーーーーーーー

あの時は……そう、教導を終えた俺が夜に一人、街へと繰り出して酒場へと訪れた時だった

丁度、酒場でラジオから流れる音楽に耳を傾けて心地良い酔いを堪能している時にイーリは現れた

「探したわよ、ジェシー……この私を置いていくなんて随分と良い度胸じゃない？」

「お前……どうやって、分かったんだ？この酒場だってよ」

イーリはカウンターに座る俺の隣へと腰掛ける

「ナタルからはジェシーの趣味や好みについては散々、聞かされてたからねぇ……

そりゃ、ジェシーの話を持ち出したら、もう止まらないったら、ありゃしないわよ……」

注文した酒を煽りながら、ため息を零して愚痴を言い始めるイーリ

イーリの奴、あのシャワー室での一件から急に性格が変わったと思ったら、こっちの方が素らしい。まぁ、こっちの性格の方が話しやすいから楽なんだかな

「そりゃ、悪かったな……まぁ、飲めって……俺の奢りだ」

「勿論、飲ませていただくに決まってんじゃない？

こっちはジェシーが居なかった数年間も毎日、ナタルからはジェシーについてを聞かされていたんだから……」

イーリの愚痴と共に酒は進み、次々と俺らは店のボトルを空けていった。それは店中の酒を飲み干す勢いでな

日付が変わった頃、俺らはようやく店を出た。金額に関しては海軍時代での稼ぎは良かったので問題は無かったが……

「うー……ジェシー……」

イーリの奴は一人じゃ、まともに歩けないまでに飲み過ぎていた

「イーリ、飲み過ぎだぞ……歩けなくなる程、飲むか？」

「うぅ……ジェシーだって、あんだけ飲んでたじゃないの……」

「俺は【特別】なんでな……所謂、蟒蛇って奴だ」

嘘では無い。授かった【能力】の一つ……『超人的な身体能力』のお陰でな

どうやら、常に身体を最善の状態に保つ為なのか……大量の酒を飲んでも精々、ほろ酔い程度……数分もすれば、酔いも覚めちまうからな

俺はイーリを背負い、基地への帰路を歩き出す

「ジェシー……私をベッドに連れてってくれなきゃ、サヨナラよ？」

「なら、酔いが覚めるまでの間……道路にでも寝かせとくか？」

「アンタねぇ……【恋する乙女】がこう言ったら、普通はＹＥＳって言うのが男ってモノなんだけど？」

「【恋する乙女】は、歩けなくなるまで酔わないのが普通じゃないのか？」

すると、イーリは背負う俺の耳に軽く噛み付く

「……おい、何してんだよ。イーリ？」

「何って……誘ってんのよ？」

そう言って、イーリは俺の背中に胸を押し当てて首筋に顔を埋める

「……やっぱり、道路にでも寝かせとくか…」

その後、基地に戻るまでの間……イーリ曰わく【誘惑】とやらを散々、味わう羽目になったのは言うまでもない……

――――――――

ナターシャの場合、他の三人とは違い……その……【欲求不満】とでも言っておくべきか……

あの時は千冬が教導を担当、ＩＳを使っての実戦訓練であった為、俺は暇となった訳だ（補佐として、イーリが千冬と共に教導を行っていたから心配は無かったが…）

暇になった俺は自室で教導内容のチェックを行っていた時にナターシャが現れた

「……少しは休憩でもしたら、どう？」

背中からかかる声と共にその細い腕が俺に巻き付く。背中からは柔らかな感触が……って【感触】？

振り返って、ナターシャの姿を確認すると……

「…ナターシャ……何で【全裸】なんだ？」

「それはねぇ……待ってたからよ…♪」

するとナターシャは俺をベッドへと押し倒す。コイツ、この細腕で意外と力があるんだな……、なんて事を考える俺へとナターシャは顔を近付ける

「……こうして、ベッドに二人っきりなんて…何年振りかしら……」

「少なくとも押し倒された事は無かったな……」

ナターシャは指先を俺の胸板へと滑らし、服のボタンへと指をかける

「…随分と盛ってるな……欲求不満か……？」

「そうよ……ジェイが居なくなってからの数年間……私の隣に居るのが当たり前だったのにね……

それに……ずっと夜は寂しく過ごしてたのよ？」

ナターシャの顔を見ると……その瞳はうっすらと涙で潤んでいた

「……俺と付き合った事……後悔してるか？」

俺はナターシャの潤んだ瞳から流れる雫を親指で拭う

「いいえ……一回も思った事なんて無いわ……それに……貴方以外、他の男なんて考えられないわ……」

そう言って、ナターシャは唇を重ねた

まぁ、あの後……場の勢いとでも言うか……『スる事』をシた俺も俺なんだがな……

ーーーーーーーー

後の二人……『フランチェスカ・アルマ』と『織斑　千冬』の話だが……

千冬に関しては長くなる為、先にフランチェスカの方を話しておこう……

ーーーーーーーー

その日は教導は休み、俺はドイツでの【楽しみ】を堪能していた

ドイツには『アウトバーン』と呼ばれる高速道路がある。そこは【速度無制限】と全線の【料金無料】という何とも魅力的なモノだ

俺は【とある経緯】を経て手に入れたバイク――英国生まれの名二輪車『ヴィンセント』に跨り、アウトバーンで飛ばしていく車の僅かな隙間を縫う様にしてかっ飛ばしていた

そんな中、サイドミラーから一台のバイクが迫ってくるのを見た

黒のライダースーツ、同色で羽ばたく鷲の絵を入れたフルフェイス・メット……体つきからして、女というのまでは理解できた

その女は身に着けてるライダースーツとヘルメットと同様、黒のマシン――日本製バイク（確か……あれは【ＮＩＮＪＡ】と呼ばれるモノだ）を飛ばし、俺の側へと寄せる

バイク好きであり、バイク乗りとしての性なのかは知らないが……

俺はその女ライダーとのスピード勝負を開始、互いに速度を更に加速させ、まるでダンスをするかの如く、二台のバイクは交差し、次々と前方を走る車の隙間を潜り抜け、疾走した

俺はアウトバーンを抜け、休憩所にバイクを駐車させる。女ライダーも俺の隣へとバイクを駐車させた

「良いバイクだな、それに腕も良い……思わず、見惚れちまって事故る所だったぜ？」

すると女ライダーはヘルメットへと手を掛け、こう言った

「そうやって、多くの女たちを口説いてきたのか？」

俺は女の声を聞き、驚いた……その声と素顔でな

「……【フランチェスカ】か…？」

女の正体――それは、俺が千冬の教導補佐として居る基地の責任者【フランキー】こと、『フランチェスカ・アルマ』中佐だった

「私もよく彼処（アウトバーン）で走っていてな……久々に走ったが、お前が居るとは驚きだったぞ？」

「そりゃ、こっちの台詞だ。バイク乗りとは聞いていなかったぞ？」

「聞かれなかったからな」

フランチェスカは笑みを浮かべ、俺の側へと近付く

「さっきの勝負……僅かながらだったが……私の勝ちだな？」

片手を俺の首へと回し、顔を近付けさせる

「……一応、聞いておくが…何する気だ…？」

「何、勝者は【褒美】というモノを得るのが当然だろう？」

そう言うとフランチェスカは唇を重ねた（勿論、俺への確認など無いがな）

「っ……私への【褒美】でもあるが……お前も楽しめただろう？」

「……ここに千冬たちが居ない事がせめてもの救いだよ…」

「なら、私の下に来れば良いだろう？　お前の身の回りの安全は私が全権を持って保証するぞ？」

そう言って、フランチェスカは笑った

その後、基地に戻ってから……ドイツ軍独自の【情報網】とやらで知った千冬たちに散々な目に会わされたのは最早、『お約束』となっていた……（というよりも、そんな事に情報網まで使うか…普通？）

――――――――

残るは千冬なのだが……少し、長くなるな…

あれは……そう、教導後の時だ

俺はいつもの様に全員への差し入れをしてた時だった

「ジェイソン、後で話があるので私の部屋に来てくれ」

別に教導後には偶に格納庫の整備兵とのポーカーをする位しか、やる事が無かった俺はそれを受諾した

一時間が過ぎた頃、俺は千冬の部屋へと来ていた

「ほぉ……以前とは違い、綺麗じゃないか……部屋の中」

「う、うるさい！！彼処は私の家だぞ、どう扱おうが私の勝手だろうが…！」

そう言って若干、顔を赤らめる千冬

織斑家での千冬の部屋は……まぁ、凄かったからな。服は脱ぎ散らかされ、部屋で飲んだであろう酒の空き缶やらが転がっていたからな

「まぁ、綺麗で何よりだ……此処（ドイツ）では一夏の奴は居ないから、俺が片付ける羽目になるんじゃないかって思っていたからな」

「う……た、確かに一夏が家事を担当しているが私だって、別に片付けられない訳じゃないんだぞ……」

若干、うっすらと涙目で言われてもなぁ……説得力ってモノが無いんだけどな

「まぁ、そういう事にしておくか……それで、話ってのは？」

「……あぁ、此処での教導も半年が過ぎたからな……お互いに労いという事で飲もうじゃないか、と思ったんでな」

「成る程な……確かに千冬とは長い付き合いだが、あまり一緒に酒を飲む事は無かったしな」

以前、日本に居た際では俺の車庫（という名の家）で飲む事は何回かはあったが、その度に束の奴がどこからともなく現れたからな。
その度に……

『何故、お前は狙ってる様に現れるんだ……！！』

『ふっふーん…甘いよ、ちーちゃん？
愛しのジェイ君と2人っきりでお酒を飲んでジェイ君を酔わせて…
…痛い痛いッ！！』

『誰が誰の【愛しの】だ！！　今日という今日はもう勘弁ならんぞ、束……！！』

『痛たたたぁッ！！ちーちゃん、ギブギブッ！！』

あの時は、危うく冗談抜きで束の頭が千冬のアイアンクローによっ

て粉砕される所だったよなぁ……

今となっては良い思い出だが……

まぁ、俺と千冬は2人っきりで酒を飲み交わす事になった訳だ。丁度、翌日は互いに教導は休みだった為に俺らは次々と用意していた酒を空けていった

暫くすれば、千冬の奴は酔いつぶれてしまい、床で眠ってしまった。流石に自室とはいえ、風邪を引くと思った俺は千冬を抱えてベッドへと運んだ

運んだまでは良かったものの……千冬は俺を掴んだまま、熟睡していた。流石に起こす訳にも行かず、仕方無く千冬の眠るベッドの端で眠る事にした俺は悪くない筈だ

翌日となって、最初に目を覚ましたのは千冬だった。隣で俺が寝て

いる事に驚いた千冬は自分の格好を確認した

千冬は覚えていないが、酔った際に『暑い』と言って衣服を緩めてた為に服装は乱れていた。俺は男しか居ない軍での癖なのか半裸（つまり、上半身裸）で寝ていたのだが……何やら【勘違い】をした千冬はこう言った

「……ジェイソン……その……もしかして……私たちは…寝た（アッチの意味で）のか…？」

「あー……まぁ、確かに寝た（睡眠的な意味で）な」

すると千冬は……

「う、うわぁぁぁぁッ！！」

顔を真っ赤という表現では言い表せないまでに赤くして……隣に

居る俺を扉からぶち破る勢いなまでの強烈な掌底を喰らわした（どう考えても、これは俺が悪い訳じゃないよな？）

後になり、勘違いと気付いた千冬に謝罪されたから別に気にしちゃいないが……俺じゃなきゃ死んでたぞ、あの威力はよ……

――――――――

……という訳だ。何故か、結果的に俺はロクな目にあってないのだが……

『好意は悪意の裏返し』とでも言いたいのだろうか？

寧ろ、俺は【殺意】を感じるのだが……まぁ、俺みたいな奴の事を好いてくれるのは嬉しいのだが……

「……好かれる様な事をした覚えは無いんだがなぁ……」

俺は俺一人しか居ない自室で静かに呟いた

回想　ー　【架空機】　ー

ドイツでの教導も残す所、ひと月になった頃……まぁ、未だにナターシャとイーリの二人は【長期休暇中】の様であり、基地に居るんだけどな……

俺はフランチェスカに呼ばれ、この基地では閉鎖されている第四格納庫へと来ていた。格納庫の前では千冬とフランチェスカ、ナターシャとイーリの四人が待っていた

「……それで、俺を呼んだ理由ってのは何なんだ?」

するとフランチェスカは格納庫の扉を開くと言う

「此処は閉鎖されている格納庫とされているが……理由は【ある機体】を格納しているのでな……」

格納庫内の中央には一機の機体が鎮座していた……【コイツ】は……

「……見覚えがあるのか？」

千冬は隣に居る俺を見る

「……あるも何も……【コイツ】を設計したのは俺だ、【ＣＦＡ－４４】－－－『次世代型のステルス艦上戦闘機』として、俺が設計した機体だ」

俺は機体－－－【ＣＦＡ－４４】の側へと寄り、機体を間近で見る

「特許申請でも出しとくべきだったかもな……と言っても、コイツを設計したのは【自室謹慎中】だったから無理だろうけどな……」

「…これはＩＳとその技術が普及し始めてから、程なくしてアメリカとドイツが共同開発した試作機……所謂、【架空機】という奴だな……だが……」

「…当ててやろうか？　開発に成功したまでは良かったものの、何らかの問題点が浮上して……機体の状態からすると、２～３回のテ

スト飛行を行ったきり……だろ？」

俺はフランチェスカへと目を向ける

「そう……ＩＳの技術を応用して開発に成功したまでは良かったものの、【問題点】が多くてな……

先ず、これは従来のＩＳとは違って戦闘機を主体としている為にパイロットとしての腕は必要不可欠……

それにあまりの高性能さが裏目に出たのか、並大抵のパイロットでも操縦が厳しい上、ＩＳとは女性にしか扱えない……女性で、そこまでの腕を持つパイロットは少ないのでな」

するとナターシャは言葉を続ける

「以前、私を含めて数人がテスト飛行を行うも……誰一人、この機体の真価を発揮する事は出来なかったわ…」

「それで、設計者であって世界屈指の腕前を持つジェシーにアドバイス、又は解決策を聞こうと考えた訳よ」

イーリは俺へと目を向け、言う

「……コイツは普通の戦闘機とは違い、【ある特殊兵装】を搭載する事を想定して、安定性を重視した設計だったが……

設計途中に俺は、この一機だけで有利な戦況を維持できる様に【エース・パイロット仕様】に設計し直した。並大抵のエース・パイロットでも操縦は難しいだろう……

扱えるパイロットにとっては最高の相棒となるが……同時にコイツは操縦者の命を簡単に奪う――『死神』にすら成り得るからな」

するとフランチェスカは【ＣＦＡ－４４】へと近付く

「しかし、よくもまぁ……こんな兵装を思い付いたものだな……』全方位多目的ミサイルシステム（Ａｌｌ　Ｄｉｒｅｃｔｉｏｎ　Ｍｕｌｔｉ－ｐｕｒｐｏｓｅ　Ｍｉｓｓｉｌｅ）』――【ＡＤＭＭ】

『電磁加速砲（Ｅｌｅｃｔｒｏ　Ｍａｇｎｅｔｉｃ　Ｌａｕｎｃｈｅｒ）』――【ＥＭＬ】

……それと【３０ｍｍ航空機関砲】を二門搭載とは……」

「設計上の思い付きだ。それに実際に開発したお前らもお前らだろうが……それと……」

俺は機体の五角形状のエア・インテーク部に注目する

「…エア・インテークをいじった様だが……何をしたんだ？」

「…この機体――【ＣＦＡ－４４】の特徴は高い機動性と【キレ】だ」

「……【キレ】？」

「【キレ】とは単なるスピードや瞬発力じゃない。空中での一時静止状態からの凄まじく桁外れの０加速――僅か、一瞬で到達する最大速度（トップ・スピード）

何よりも重要なのは……その最大速度を瞬時に静止状態へと戻す――【フル・ブレーキング機能】だ」

「……その【０（ＺＥＲＯ）－１００（ＭＡＸ）－０（ＺＥＲＯ）】は最早、【超】が付く程の過酷な運動だろう？　そんな運動の核と

なるモノなんてあるのか？」

すると千冬は口を開く

「……成る程、それでＩＳの【核（コア）】と技術を利用した訳か？」

「…そう、ＩＳの【核（コア）】とは開発者である『篠ノ之博士』しか解明できない未知数の能力を秘めている。最早、奇跡としか言いようの無い確率で、アメリカとドイツはその【核（コア）】を利用する事に成功した訳だ

エア・インテーク部から取り込んだ空気を機体の中心部に内蔵したその小さな【核】が限界速度（ＭＡＸスピード）から０（ＺＥＲＯ）の制動エネルギーを内部機構の回転エネルギーに転換、収縮と圧縮したエネルギーを一気に放出する

その放出されたエネルギーにより、軽々と【極超音速】に到達する」

瞬時で『マッハ５以上』に到達する【ＩＳ搭載戦闘機】……俺が設計した『ステルス艦上戦闘機』とは桁外れのバケモノになったモノだよな……

「だが……こんな機体内で、そんな複雑な機構を組んでいる以上、何かしら【他の機能】を犠牲にせざるを得ないだろう？」

するとフランチェスカは言う

「その【犠牲】が最大の欠点でな……ＩＳに搭載されている【ハイパー・センサー】等の補助的な機関は、この機体にも搭載しているが……

……防御面、つまり【絶対防御】が犠牲となっている」

「…要するに防御面においては従来の戦闘機と同様、キツい一撃を喰らえば墜落って訳か……だが、こんな【高性能】なんて言葉が生易しく感じる程の性能を誇る機体となった訳だ

普通のパイロット・スーツでは、そんな【極超音速】でのＧ負荷に耐えきれないと思うが……その点はどうしたんだ？」

するとフランチェスカは、【ＣＦＡ－４４】の側へとある強化ガラス製のケースへと近付く

「これは、ＩＳの皮膜装甲（スキン・バリアー）技術を応用したモノだ。【ＣＦＡ－４４】操縦時のあらゆる負荷にも対応できる」

【ソレ】は全身装甲……いや、全身装甲と言っても機動性を重視した軽量装甲（ライト・アーマー）仕様と言える強化服（パワード・スーツ）だった

ヘルメットは酸素供給用のマスクとＨＵＤ（ヘッド・アップ・ディスプレイ）の機能を兼ね備えたモノであり、フランチェスカの話ではネットワーク回線へと接続でき、瞬時に戦況、情報の収集も可能らしい

だが……

「…これも【ＣＦＡ－４４】と同様、ＩＳ操縦者である【女】にしか使えないんだろ？」

「そうだ。その上、それは装着者の身体能力を強化するだけであり、他のＩＳとは違って飛行が出来なければ、固有武装すら無い

正に【ＣＦＡ－４４】専用のパイロット・スーツ（パイロット・スーツ）という訳だ……」

「成る程……この強化服にとっての固有武装は……コイツ－－－【

ＣＦＡ－４４】って訳か……

それにこの強化服が無ければ、操縦は無理な上で……肝心の機体は女で無ければ起動できないし、並外れたエース・パイロット級の操縦の腕前が必要……

随分とハードルが高すぎる代物だな？」

「そこで、設計者であるお前からの意見を求めたのだが……」

「無理だな、ＩＳ搭載の件に関しては専門外だが……コイツは並外れたパイロットの腕前が必要だ。

先ず、その根本的な条件を満たさない限りは戦線への導入どころか、飛ばす事すら難しいだろうよ

それに……ナターシャ程の腕前でも難しいなら……望み薄だろうな、残念ながら」

千冬は機体を眺め、呟いた

「……【ジェイソン】なら飛ばせたか？」

「…少なくとも、自分が操縦できない機体（モノ）を設計したつもりは無い……が、ＩＳを搭載しているなら話は別だ。男である俺には不可能な事だからな…」

女性にしか扱えない代物――『ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉』

随分と厄介な欠点だよな……

だが、その時……俺は千冬たちには言っていなかったが…ある自信が何故か、あった

『俺ならば、コイツを起動できる』

理由なんて分からない。根拠も無い

だが、そう俺は感じていた

だが、その僅か2日後……

その自信は【現実】となる事は誰一人として、知らないだろう

回想　ー　【隊長】として　ー

【ＣＦＡ－４４】の件から翌日……

その日、教導での実戦訓練中に『ある出来事』が起こった

訓練中、部隊（チーム）での連携を図ろうとした際に一人の隊員の独断による突出が原因で連携が乱れ、散々たる結果となったのだ

幸いにも怪我人は無く、千冬からは厳しい一喝を貰うだけで済んだのだが……

【隊長】として、隊員たちの手綱を上手く握れなかった事にラウラの奴は深く落ち込んだ様子で、今日一日の教導終了後、未だに自室に引きこもったままらしい

まぁ、無理もないだろう。いくら優秀な軍人である以前に、まだ年端もいかない少女……

技術面は優れていようが、精神面ではまだ未熟……所謂、途上段階というやつだ

教導終了後、俺は千冬とクララの二人からラウラの様子を見てくる様、頼まれた

千冬曰わく『お前はラウラの様な奴にとっては、『人生』としても『隊長』としても【先輩】にあたる訳だ。【先輩】として、アドバイスの一つでもくれてやれ』らしい

そんな訳で俺は今、ラウラの部屋に居た

――――――――

ラウラの様子を見にきたまでは良かったものの……

先程まで泣いていたのか……目は若干、赤く腫れ上がり、髪はボサボサ……

こりゃ、相当堪えてるな……【以前の仕事柄】、僚機を失って鬱状態になったパイロットは何人か、見た事はあるが……

今のラウラはそれと同等に近い有り様だった

「…隊長……私は……」

ベッドの上で指先が白くなるまでシーツを握り締め、俯いた状態のラウラは言う

「…私は……隊長として失格です……」

俺は軽くため息をつき、ベッドの端に腰掛け――俯いた状態のラウラを軽く抱き寄せる

「…お前のせいじゃないだろうが……

どんな優秀な軍人だろうが隊長だろうが、誰だってミスするモンなんだぞ？」

涙で潤んだ紅い瞳で、俺を見上げるラウラは軽く俺の着ている服を握り締める

「…でも……私は【戦う為に生まれた存在】です……

なのに、こんなミスを仕出かして……こんな惨めに涙を流しているんですよ……？」

「…【戦う為に生まれた存在】なんざ知った事じゃないんだよ……

……ラウラ、お前はお前だ。お前以外、誰が『ラウラ・ボーデヴィッヒ』という人間なんだよ？」

俺はラウラの頭をそっと撫でる。女の扱い方に手慣れてる訳じゃないが……

ナターシャの奴が落ち込んだ際、余計な口を挟まずにこうして行動で示せば、落ち着いたからな

俺は『ある昔話』を語る事にした。昔話といっても少々……いや…結構、重い内容だがな……

「……俺は昔、部下を『処断』した事がある…」

「…え……？」

ラウラを俺を見上げる。その表情は驚愕を表していた

「俺が率いていた部隊――『ファントム隊』は十二人編成の部隊……

だが、本来は『十三人』居た……忌々しいクソ野郎だったよ…

……そう、あれは……」

――――――――

あれは、俺が『ファントム隊』の隊長となってから、二年が過ぎた頃だ……

当時、南アフリカでは反政府運動が活発だった。アメリカとの関係も悪く、国民たちの不満も頂点に達したのだろう

『大いなるアフリカの大地はアフリカ人のモノ。愚かな政府とアメリカから、アフリカを取り戻せ』

その言葉を掲げた国民たちは反乱を起こした。事態は直ぐに収まると思っていたが、反乱の焔は政府軍の一部にも灯ったのか、事態は悪化の一途を辿った

アメリカは事態の収拾をアフリカ政府から協力を求められた。アメリカは武力による収拾を開始

とは言っても既に度重なる反乱で疲弊した国民たちを制圧するのに対し、そこまでの戦力を導入する必要は無いと考えて俺たち、一個中隊を導入した

正直、気乗りしない任務だった。民間人を攻撃すると同じような内容だったからな……

その任務の際、俺は隊員たちに『ある指示』を出した

『撤退する者、または無抵抗の民間人に対して一切の攻撃をするな無謀と知っていても挑む【勇敢な戦士たち】には俺たちも、それ相当の敬意を持って全力で相手しろ』

戦士とは戦う事でしか存在意義を示せないモノだ。それぞれが護るべきモノの為に命を賭して戦う……

ならば、俺たちもその戦士たちの誇りを讃え、彼らと戦う事を誇りに思おう、と考えた訳だ

だが、そんな中……

『ファントム隊』の【十三番機】を操縦する忌々しいクソ野郎――『ラインハルト・レノックス』は【やってはならない事】をした。
逃げ惑う民間人たちに向け、攻撃を始めたのだ

俺は搭乗する機体――『Ｆ－１４Ｄ　Ｓｕｐｅｒ　Ｔｏｍｃａｔ』をラインハルトの奴が操縦する機体――『Ｆ－１５Ｅ　Ｓｔｒｉｋｅ　Ｅａｇｌｅ』の側へと寄せる

民間人への攻撃に夢中となった奴は、俺が隣に居る事すら気付いていなかった。無線からは聞くだけで不快感を感じさせる奴の笑い声が聞こえた

《ひゃっはーッ！！　俺みたいな『エース・パイロット』から逃げられると思ってんのかぁ？》

『エース・パイロット』だと……？

あぁ、間違いなくお前はエースだよ。但し、【屑】のだがな

《雑草のように放置しとけば、勝手に増えるテメェ等、愚民どもは俺が駆除してやるぜぇ？　ひゃっはははははッ！！》

その時の俺は至って、冷静だったよ……

何故なら、【あまりの怒り】に冷静になっていたからな

《クズ野郎って言葉はな、お前の為にあるんだよ。ラインハルト》

こんな奴が俺たち、『ファントム隊』の隊章―――【首無し騎士（ヘッドレス・ホースマン）】の紋章（エンブレム）を掲げているのに虫唾が走った

だが、その不快感とも……お別れだ

《今のお前は、命令不服従と民間人虐殺……軍人としても人間としても、最悪の行為を行った訳だ》

俺は奴の背後へと移動し、機体の全兵装の制御（ロック）を解除する

《そう言えば、お前は一度も他の隊員との模擬戦に勝てた事が無かったよな……俺が今、相手になってやるよ……》

《た、隊長……何を言ってるんッスか…？》

自分でも、ここまで感情の無い声で話せるとはな…、と感心する程

の冷たい声を聞いた奴は恐る恐ると返答を返した

《各機、一切の手を出すな【隊長】として、全責任は俺が取る。『ラインハルト・レノックス少尉』　貴官は命令不服従、その上での民間人虐殺を繰り返し、我が隊の規律、軍規を乱し続けた》

俺は言葉を続けた

《軍規に明記してある――いたずらに部下が軍規を乱した場合、上官は処断する権限を有する、とな……ここまで言えば、分かるよな。更正の見込みも余地も無いお前にはここで死んでもらう

但し、お前が殺した民間人たちは天国だろうが、お前は地獄行きだがな》

無線からは奴の甲高い悲鳴が聞こえ、それと同時に奴が操縦する機体は急旋回して、俺から逃げていく

俺は旋回し、逃げていく奴を追い掛ける。奴は馬鹿の一つ覚えのよ

うに急旋回を繰り返し、俺から距離をとろうとする

そんな酷い腕で、よく『エース・パイロット』と名乗れたモノだ…
…まだ新米パイロットの方がマシな腕前だよ、全く……

俺は高機動旋回――『ハイGターン』から急上昇し、奴の機体の真上へと移動、その状態から機首を真下に位置する奴の機体へと向け、捕捉を開始する

《ラインハルト、模擬戦の結果は不合格だ。この隊からも、この世からも消えてもらおう》

捕捉（ロック・オン）完了した俺は兵装を機銃へと切り替える

《た、隊長ッ！　俺…いや、自分が間違っておりましたッ！！

自分はただ、部隊と軍を思っての……！》

《自分の上官を脅迫して、俺の部隊へと入った男の言葉を信じるとでも思うか？》

《な、何を根拠の無い事を……》

《言っておくが、他の隊員たちも既に知っている。お前は自分の上官の不正を知り、それをネタに脅迫して『ファントム隊』へと入ったクズ野郎だと言うことはな

それと……間違えに感しては『ファントム隊』に入る以前に気付くべきだったな……

本当に救えない奴だよ……お前は…》

俺は操縦席にいる奴一一一『ラインハルト・レノックス』に向け、急降下を開始した。完全に射程内へとラインハルトの奴を捕捉した状態でな

《く……るな……来るなぁぁぁぁッ！！》

奴のその言葉を最後に俺は、操縦席へと向けて一切の躊躇なく引き金を引いた

放たれた機銃弾はキャノピーを貫通して機体ごと、奴の身体に風穴を空けていった

穿たれたキャノピーの穴からはラインハルトの血飛沫を撒き散らし、機体は黒煙を吹き出しながら失墜していった

俺は操縦席からそれを眺め、無線で残った十二人に告ぐ

《各機に告ぐ……こちら、ファントム隊　隊長『ジェイソン・シーガー大尉』だ。当空域、及び戦闘地帯での敵性勢力の排除を確認した。尚、我が隊の『ラインハルト・レノックス少尉』は民間人虐殺、命令不服従、上官に対する反逆、複数の罪を犯した為、隊長権限として『処断』を下した。

また、今後の任務にて同様の蛮行を確認した場合、同じ隊員、友軍でも攻撃を辞さないと思え。

我が隊の同志たちの【良心】に期待する》

すると残る十二人からの返答が一斉に返ってくる

《Ａｙｅ　ａｙｅ　ｓｉｒ！》

そして、俺は静かに空を仰ぎ見て呟く

「……あばよ、忌々しき【存在しない十三番機（ゴースト）】

精々、地獄で自分がやった事に後悔するこったな……」

――――――――

「……という訳だ」

今まで昔話を語っていた俺の膝上に座るラウラを見下ろし、俺は言う

「…隊長……」

「…良いか、よく覚えておけよ

この先、お前は今回以上に悪い事態に遭遇するかも知れない。だから、【隊長】として覚悟を決める事だな…

…部隊の長としての責任、部下たちの為にも部隊を守る事も隊長の務めを果たす覚悟をな……

時には『処断』という非情さも必要だと思う事だ」

「……私は……隊長と同じように出来るでしょうか…？」

「……お前は俺以上に仲間に恵まれている。それに才能だってな

俺の様にならなくて良い……お前はお前の道を進め」

俺は膝上に座るラウラの頭を撫でる

するとラウラは軽く俺に抱き付き、上着を軽く握り締めて胸板に顔を埋めた

「……やっぱり……隊長は……」

俺はその小さな呟きを微かにだが聞き取った

『やっぱり、隊長は私にとって理想の隊長像です』

やれやれ……俺は苦笑を浮かべた

『俺なんかを理想の隊長像にするなんて、ロクな隊長にはならない

ぞ？』

そう思いながらな……

回想 ― 【出撃】 ―

ラウラとの件から、翌日……

その日は普段とは違った。何故なら、基地内で鳴り響く警報音(アラート)で叩き起こされる羽目になったからだ

俺は眠気で呆けた意識を覚醒させ、基地内での仕事着――【復職通告】以来、教導時に着ている黒い作業着(ツナギ)に似た旧来の戦闘機用パイロット・スーツを身に付け、部屋を飛び出た

基地内では戦場の様に兵士たちが駆け巡り、この警報音の原因に対しての対処にあたっていた

俺は管制塔へと走り、扉を蹴破る勢いで開ける。塔内ではフランキーからナターシャまで一同が既に勢揃いしていた

「フランキー、何が起こったんだッ！？」

「落ち着け、ジェイソン」

フランキーと共に指示を出す千冬は俺を見て、言う

「ジェシー、今から説明するけど……これは、かなりヤバい事態よ……」

イーリは俺の肩へと手を乗せ、俺を落ち着かせようと宥める

話はこうだ、現時点でドイツ都市部へと急速で向かう未確認飛行物体（アンノウン）を管制塔内のレーダーが捉えた

その『アンノウン』の正体はドイツが以前、開発していた試作段階の兵器、『大型ミサイル・コンテナ弾頭』――通称【スタウロス】

【スタウロス】は現段階でおよそ、１０機が試作品として開発されていたらしい。

その【スタウロス】とは発射された大型のミサイル・コンテナ弾頭に多数の巡航ミサイルを格納、一機の【スタウロス】でも小さな都市ならば、簡単に都市ごと敵を殲滅する事が可能な広範囲に渡る殲滅を目的とした兵器らしい

何故、そんな兵器がドイツ都市部へと向かっているか、その理由はこうだ

【何者か】がドイツの軍事ネットワークへと侵入（ハッキング）、全１０機の【スタウロス】をドイツ都市部へと向けて発射させた。その上、ハッキングした奴は独自の防衛ネットワーク（ファイア・ウォール）を張り巡らせ、此方からのアクセスは不可能としたのだ

本来ならば、ラウラが率いるＩＳ配備特殊部隊『シュヴァルツェ・ハーゼ』を導入し、【スタウロス】の撃墜へと向かわせたいのだが……

既に【スタウロス】は標的としている都市部から到達するまで僅か、１０分の距離へと迫っていた。それに対し、この基地から【スタウロス】の距離まではおよそ、１５分弱と言った所……

従来の戦闘機は勿論、ＩＳでも到底、間に合わない状況だった

都市部の人口は少なくとも、約一千万人以上……僅か、１０分程でどうやって避難させれるのか？

既にフランキーは部下に警察へ市民たちの避難誘導を指示しているが……

【スタウロス】は標的近くに迫ると格納した多数の巡航ミサイルを拡散させ、標的とその周囲を完全に破壊する代物……

僅か、１０分という短い時間で避難したとしても攻撃範囲からは逃れられないだろう

俺はふと、【ある事】を思い出した。２日前、第四格納庫で見た『ＩＳ搭載戦闘機』――【ＣＦＡ－４４】を

だが、ＩＳは女にしか起動できない代物。男の俺が起動できる訳が無い

だが、俺は２日前と同様に【根拠の無い自信】があった

『俺なら起動できる。俺しかアレを乗りこなせない』

すると俺の懐にしまっていた携帯が鳴り出す

俺は携帯を取り出し、届いたメールを確認する。差出人はこう書いてあった――【篠ノ之　束】と

そのメールの内容は短くこう書かれていた

『常識（リアル）なんて、簡単に壊せるモノなんだよ？』

その内容を見ると同時に俺は第四格納庫へと走った

――――――――

俺は第四格納庫にある機体――【ＣＦＡ－４４】の側にある専用のパイロット・スーツである強化服（パワード・スーツ）を納めたケースへと近付く

俺はケースの側に寄り、拳を握り締めると……その握り締めた拳をケースへと叩き込む。【転生者】としての並外れた力を込めた拳を叩き込まれたケースは簡単に砕けた

俺は砕けたケース内に納められた強化服へと手を伸ばす

「何故、男である俺がＩＳを起動できるという自信があるかは知らないが……

もし、本当に……今の『常識（リアル）』をブッ壊せるなら、俺に力を貸しやがれ……」

俺はその言葉と共に強化服――――『ＩＳ＜インフィニット・ストラトス＞』に触れる

触れると同時に俺の頭には様々なＩＳの情報が流れ込んでくる

＜皮膜装甲（スキン・バリアー）展開＞

＜ハイパー・センサー最適化＞

ＩＳからの電子音と共に、強化服は俺の身体に合わせて装着されていく

全身への装着を終えた俺は、この強化服の固有武装である機体――【ＣＦＡ－４４】へと向かう

俺は機体の側へと近付くと操縦席に向かい、一気に跳躍する

元々、並外れた身体能力を持つ上、強化服により更に強化された俺の跳躍力は易々と操縦席へ到達する

操縦席へと乗り込んだ俺は【ＣＦＡ－４４】の全システムを起動、同時に全武装の制御を解除する

そして、俺は管制塔に居るフランチェスカたちに無線を入れる

《フランキー、聞こえるか？》

《ジェイソン？　一体、何処に居るんだッ！？》

俺は【ＣＦＡ－４４】の胴体部に搭載された推進機（スラスター）を起動させ、機体を低空浮上させる

そのまま、搭載した武装－－－【３０ｍｍ航空機関砲】の照準を前方の閉ざされた扉へと合わせる

《フランキー、時間が無いから少し、手荒で悪いが恨むなよな？》

その言葉と同時に俺は引き金を引いた

――――――――

『フランキー』こと、【フランチェスカ・アルマ】はこの非常事態においても極めて冷静な判断を下していた

しかし、我がドイツ軍の軍事ネットワークへの侵入、その上で試作段階の兵器――【スタウロス】を開発したこの国に発射した

これでは、まるで……

「まるで『白騎士事件』の再来だな……」

フランチェスカは静かに呟いた

但し、状況は『白騎士事件』以上に最悪だが…、と心の中で付け足した

確かにそうだろう、あの時は『白騎士』の登場によって最悪の事態は免れたが……

今回は『白騎士』は登場しない上、あと１０分足らずで発射された【スタウロス】は都市部へと到達するのだからだ

既に警察への避難誘導を指示したものの、１０分で一千万人以上の市民をどうやって広範囲に渡る【スタウロス】の被害から避難できるのか？

最悪の事態を迎えるのは明らかに目に見えていた

そんな時だった。先程、この管制塔から姿を消した【一人】からの無線が入ったのは

《フランキー、聞こえるか？》

その声を聞くと同時にフランチェスカを始めとした管制塔に居る全員が、その声に耳を傾ける

「ジェイソン？　一体、何処に居るんだッ！？」

すると無線からの声の主――【ジェイソン・シーガー】は言った

《フランキー、時間が無いから少し、手荒で悪いが恨むなよな？》

「……どういう意味だ？」

次の瞬間、管制塔からも見渡せる滑走路側に位置する第四格納庫の正面から爆発が起こった

「第四格納庫にて、爆発ッ！！」

管制塔内を埋め尽くす程の人数が居る部下の一人が報告する

「爆発した第四格納庫から、動きが……これは…」

フランチェスカと千冬、ナターシャとイーリスの四人は第四格納庫へと目を向ける。そこで目にしたのは……

「き、機体を確認ッ！　【ＣＦＡ－４４】ですッ！！」

もう一人の部下が声を上げ、報告する

「まさか……アレを操縦してるのって……」

イーリスは隣に居るナターシャへと目を向ける

「……他に居ると思うかしら？」

若干、呆れ顔のナターシャは呟いた

《フランキー、言いたい事は分かってるが……今、すべき事は一つだろ？》

ジェイソンからの無線が管制塔内に響く

『フランチェスカ・アルマ』は再び、ドイツ軍人――【フランキー中佐】として意識を切り換える

「分かった……【ファントム1】、離陸を許可する
直ちに都市部上空へと急行し、弾頭を撃墜せよ」

《こちら、ファントム1　了解》

そして、ジェイソンが操縦する機体――【CFA-44】は滑走路中央で推進機での低空浮上から、アフターバーナー点火へと切り換える。上空へと機体は高度を上げて飛行していく

一連の動作を見守ったフランキーは無線を入れる

「離陸成功、貴官の幸運を祈る……任せたぞ、ジェイソン」

《了解、【極超音速】飛行開始》

その無線から数秒後、ジェイソンが操縦する【ＣＦＡ－４４】は上空にて凄まじい衝撃波（ソニック・ムーヴ）を放ち、【極超音速】で基地上空から飛び去った

回想　―　【都市防空】と【遭遇】　―

『ＩＳ搭載戦闘機』―――【ＣＦＡ－４４】を操縦する俺に【極超音速飛行】での『万力』という言葉が生易しく感じる程のＧ負荷が襲う

地球上の全重力が俺にのし掛かっているんじゃないか？、そう思わせる程のＧ負荷で内臓に絶えず、圧迫感を感じる

この強化服（パイロット・スーツ）と俺の桁外れの適応力と耐久力でなければ、今頃はこの操縦席を潰れたトマトの様にして汚しているだろう

だが、三十秒もしたら絶えず、襲うＧ負荷とも内臓への圧迫感にも慣れてきた。俺は今更ながら、自分が化け物じみた奴だと再確認していた

俺は意識を切り換えると、前方へと視線を向ける――その先には、

目視でも三機の【スタウロス】が視認できる距離にまで、この機体は追い付いていた

《こちら、ファントム１　【スタウロス】を三機、目視で確認》

《了解した、ファントム１　攻撃を許可する。頼んだぞ……【ジェイソン】》

俺はフランキー中佐――『フランチェスカ・アルマ』からの返答を確認すると同時に強化服のヘルメット部に内蔵されたＨＵＤ機能――照準機構を作動させる

ヘルメット越しからの俺の視界には『攻撃対象』である【スタウロス】に照準を定めるカーソルが表示される

《こちら、ファントム１　攻撃を開始する。任せとけ、【フランチェスカ】》

その言葉を合図に俺は機体を前方に位置する【スタウロス】三機の側面へと回り込ませる

この機体――【ＣＦＡ－４４】とは従来の戦闘機、現時点で普及されているＩＳを遥かに凌ぐ機動性を誇る機体だ。だが、同時にパイロットとの相性が悪ければ、操縦者を簡単に死に至らしめるという『死神』の顔を持つ

しかし、パイロットとの相性が良ければ、正に操縦者の手足となり思うがままに操る事ができる『最高の相棒』ともなる。そう、あの『白騎士』とも互角に渡り合える程だ

どうやら、俺は後者に当たるらしい。思い描いた理想的な機動で回り込み、機体の機首は【スタウロス】の側面へと向いている――勿論、三機の【スタウロス】を完全に捕捉（ロック）した状態でだ

《捕捉完了（ロック・オン）！！》

引き金を引くと同時に搭載された兵装一一二門の【３０ｍｍ航空機関砲】から発射された機関砲弾は標的とした【スタウロス】の胴体部を真っ二つに寸断、搭載された巡航ミサイルにもダメージを与える

機関砲弾のシャワーを浴びた【スタウロス】は空中にて、残る二機を巻き添えに誘爆。一方で【ＣＦＡ－４４】は、その鋭い機動性を誇る動きで降り注ぐ【スタウロス】の破片と爆発の隙間を瞬時に潜り抜ける

《三機の撃墜を確認　フランキー、残りの【スタウロス】は？》

《あと、七機だ。待て……お前の位置から北東に【アンノウン】を捕捉した》

俺は操縦席から北東の方向へと視線を向ける。そこには此方に向かって飛来する二機の【スタウロス】が確認できた

《機関砲の射程圏外か……【ＥＭＬ】に切り換える》

機体を北東へと旋回、機銃から【ＥＭＬ】へと兵装を切り換え、起動させる

起動と同時に機体上面にある左右二つのウェポン・ベイに搭載された砲身が展開される

ヘルメット越しからの視界では飛来する二機の標的へとカーソルが表示される。【ＥＭＬ】は無誘導型であり、操縦者自らが捕捉しなければならないが……設計者である俺はその事を充分、理解している

俺は速度を緩め、機体を安定させる。そして、表示されたカーソル内に標的を収める

《『マッハ７』で発射するコイツを避けられるか？》

俺は徐々に距離を縮める二機の標的に視線を逸らさず、発射スイッチに指を掛ける

そして、専用の発射コードを口にした

《ファントム１　スラッシュ！》

機体上面に搭載された二門の砲身から、【電磁誘導】により超加速された弾丸が空気を切り裂き、標的一一二機の【スタウロス】へ目掛けて発射される

眩い二筋の閃光が二機の【スタウロス】を貫く。超加速により、貫通性と破壊力を増した弾丸は【スタウロス】の装甲を易々と貫き、内部に搭載された多数の巡航ミサイルをも破壊する

空中にて、爆散した二機の【スタウロス】を目視で確認した俺は再び、フランキーへと無線を入れる

《こちら、ファントム１　更に二機の標的を撃墜した。残る五機の位置は？》

《こちら、フランキー中佐　残る五機の内、三機が都市部上空へと接近している。直ちに撃墜に迎え！！》

《ファントム１　了解した》

俺は機体を急旋回させ、此処から南東に位置する都市部上空へと向かい、【フル・ブレーキング機能】を作動させる

急旋回した後、機体が僅かな間、胴体部に搭載した推進機（スラスター）による空中停止（ホバリング）状態となる

エア・インテーク部の制御を解除すると機体は制御解除されたエア・インテーク部から一気に空気を取り込む。俺に装着された専用パイ

ロット・スーツである強化服（ＩＳ）のヘルメット越しの視界からは搭乗する機体――【ＣＦＡ－４４】の機体情報が表示される

表示されたのは取り込んだ空気量とこの機体の中心部に内蔵された『心臓』ともいえる【核（コア）】の状態だった

《機体、及び機能の安定を確認。【フル・ブレーキング機能】作動》

推進機からアフターバーナー点火へと切り換えると同時に再度、飛行を開始

一定の速度へと到達、それと同時に俺は一気にスロットル・レバーを最大まで押し込む

一旦、機体は速度を完全に停止すると操縦席に居る俺は落下による僅かな浮遊感を感じた

……『来るぞ』

俺は奥歯を噛み締め、全身に力を込めて衝撃に備えた

次の瞬間、エア・インテーク部から取り込んだ空気を内蔵された【核（コア）】は取り込まれた空気による制動エネルギーを内部機構の回転エネルギーに転換、アフターバーナー点火と同時に収縮と圧縮したエネルギーを一気に放出する

機体は空気の壁を突き破り、空中にて凄まじい衝撃波と共に瞬時に二度目の【極超音速】へと突入する

再度、【極超音速】によるG負荷が俺を襲う。俺は暴れ狂う操縦桿を押さえつけ、【極超音速】飛行中の機体を安定させる

一連の動作から僅か、二分足らずで【ＣＦＡ－４４】は三機の【スタウロス】が迫る都市部上空へと移動していた

無線からはフランキーの声が響く

《【スタウロス】、レーダーから消失（ロスト）！！　『拡散』するぞッ！》

俺は都市部上空に飛来する三機の【スタウロス】の弾頭部が開くのを確認する

マズい……！

先程、使用した兵装――【ＥＭＬ】を起動、拡散態勢に移行する三機の【スタウロス】の内、一機を捕捉する

《捕捉完了、ファントム１　スラッシュ！！》

搭載された二門の砲身から超加速で発射された弾丸は、空気を切り裂き眩い閃光と同時に捕捉していた【スタウロス】を貫く

拡散前だった為、搭載された巡航ミサイルと共に【スタウロス】は先程、撃墜した二機と同様に空中にて爆散する

《ジェイソン、レーダーから複数のミサイルを確認した！　拡散したぞッ！！》

フランキーの無線で俺は残る二機の【スタウロス】へと視線を向ける。視線の先には【スタウロス】から拡散した巡航ミサイル群が都市部へと迫る光景だった

一機につき、約１２機の巡航ミサイルが拡散されるのを俺は目視で確認ー一一一機で１２機を搭載……二機だから、計２４機か……

《拡散を確認、【ＡＤＭＭ】を起動する》

俺は【ＣＦＡ－４４】に搭載された最後の兵装『全方位多目的ミサイルシステム（Ａｌｌ　Ｄｉｒｅｃｔｉｏｎ　Ｍｕｌｔｉ－ｐｕｒｐｏｓｅ　Ｍｉｓｓｉｌｅ）』－－－【ＡＤＭＭ】を起動させる

起動と同時に機体の胴体部のシャッターが引き開けられる。その下から姿を現したのは、イージス巡洋艦などに搭載される【ＶＬＳ（Ｖｅｒｔｉｃａｌ　Ｌａｕｎｃｈｉｎｇ　Ｓｙｓｔｅｍ）】－－－潜水艦などの艦艇に使用される垂直発射システムの様なミサイル発射口だった

俺が装着する強化服のヘルメットに内蔵された照準機構が作動し、複数のカーソルが視界に広がる

その数は同時発射可能なミサイルの数－－－計２４機のカーソルが表示された

表示されたカーソルが都市部へと飛来する２４機の巡航ミサイルを捕捉、その数秒後には全ての巡航ミサイル捕捉完了を告げる

俺は発射スイッチに指を掛けると【ＥＭＬ】と同様、専用の発射コードを口にした

《ファントム１　ドライヴ！！》

俺は発射スイッチを押し込む。上下から垂直方向に撃ち出されたミサイルはある程度、母機である【ＣＦＡ－４４】から離れた場所で水平方向へと針路を変更、捕捉した巡航ミサイル群へと加速を開始する。

計２４機のミサイルは捕捉した巡航ミサイル群を迎え撃つ様に真っ正面から突っ込んでいく

加速されたミサイルはそれぞれが捕捉した巡航ミサイル群へと命中、

都市部上空にて盛大な花火と化した

機体を安定させ、都市部上空を旋回しながら、俺はフランキーへと無線を入れる

《こちら、ファントム１　拡散した巡航ミサイル群の撃墜に成功》

無線からは管制塔内に居たフランキーの部下たちによる歓声が聞こえた

《よくやったな、ジェイソン……だが、まだ二機が残っているぞ》

《分かってる。残る二機を撃墜したら、任務完了って訳だろ?》

だが、そこで無線からは管制塔内に居るであろうフランキーの部下からの報告が入った

《残る二機の【スタウロス】を確認、方角は……え…ッ？》

《…何か、あったのか？》

すると、その報告を告げた部下からの更なる報告が入った

《二機の【スタウロス】が撃墜されました……！》

《…フランキー、俺以外に戦闘機かＩＳを出撃させたのか？》

《馬鹿を言うな！　その空域にはお前以外は戦闘機もＩＳも居ない筈だぞ…？》

すると今度は管制塔内に居るイーリから無線が入る

《ジェシーッ！　北西の海上から高エネルギー反応を確認したわ！！》

俺は北西へと機体を旋回、海上へと機首を向ける

北西に位置する海上には【何か】が、俺が居る場所へと高速で移動するのを確認できた。俺は高度を下げ、その接近する【何か】を改めて確認する

【コイツ】は……

俺は確認した【正体】を無線でフランキーたちに告げる

《……フランキー、よく聞け。こちらに接近する【何か】の正体を

確認した》

《……何なんだ？》

そして、俺は静かに告げる

《……【ＩＳ】だ、それも大型の推進機（スラスター）で海上を高速移動している上、馬鹿みたいなデカさの武器を装備したな…》

それが、国連に所属する俺が、後に率いる事となる『ＩＳ操縦者』と『戦闘機乗り』で編成された【部隊】の敵――『亡国機業（ファントム・タスク）』が所有する……ギリシャ神話に登場する『一つ目の巨人』の名を持つ【無人ＩＳ機】――『サイクロプス』との遭遇だった

回想　―　【激闘】　―

【ソイツ】は従来のＩＳとは全く違った

俺が装着する強化服と同様の全身装甲……だが、人が装着するには余りにもデカすぎるサイズだった

重装甲仕様（ヘビー・アーマー）、背中には海上を高速移動する為に使用している戦闘機のアフターバーナーと同等、又はそれ以上の大型推進機（スラスター）を背面部に搭載。まるでＳＦ映画に登場するロボット兵器といえる様な姿だった

そのデカすぎる強化服（ＩＳ）の腕に装着している武装――俺の搭乗する機体【ＣＦＡ－４４】にも搭載されている『３０ｍｍ航空機関砲』を更にデカくした代物を携えていた

《…おい、千冬…イーリ、ナターシャ……あんなＩＳを見たことがあるか……？》

恐らく、管制塔内のモニターには俺がヘルメット越しから見る海上のＩＳが映されているだろう。ネットワーク回線を繋ぎ、先程から無線を取り合っている分、造作ない事だからな

《いや……あんな大型ＩＳを見たことが無い……》

《というよりも、全身装甲のＩＳなんて今、ジェシーが装着している強化服以外は存在しないわよ…？》

千冬とイーリが返答を返す

俺は高度を更に下げ、海上を高速移動するＩＳへと近付くと無線を入れる

《…所属不明のＩＳ操縦者に告ぐ。【スタウロス】を撃墜したのは其方か？》

だが、向こうからの応答は無かった

《…取り敢えず、此方の指示に従って欲しい。進路を南東にとり…》
…？

すると、そのＩＳは移動を止めると背面部に搭載されている大型の推進機を使い、その場で静止状態に入った。俺は機体を旋回させ、静止状態となったＩＳへと視線を向ける

そして、そのＩＳは上空にて旋回する俺へと視線を向けた――全身装甲である為、操縦者の顔は確認できないものの、その頭部の中心に内蔵された一つ目のカメラが俺を捉える

その時だった。そのＩＳの背面の上部に位置する装甲が開き、六機の【ミサイル】が射出されたのは

《ジェイソンッ！　ミサイルだッ！！》

《分かってるッ！！》

俺はフランキーからの無線よりも早く、機体を急旋回させる。ＩＳから射出された六機のミサイルは機体スレスレを通り過ぎ、遥か上空へと飛んでいく

《クソッ！　ＩＳ操縦者に告ぐ！！　こちらに戦闘の意思は無い！繰り返す、こちらに戦闘の意思は無いッ！！》

だが、機体に備わっているレーダーはミサイルに対する警告が警告音（アラート）と共に表示される

俺は先程、回避したミサイルが飛んでいった上空を操縦席のキャノピー越しから見上げた――視線の先には回避した六機のミサイルが上空から再び、俺へと向かう光景だった

追尾式か……！

だが、上空より飛来する六機のミサイル弾頭部が開くのを俺は確認した。俺の脳裏には先程、撃墜した【スタウロス】の拡散時の光景が駆け巡る

まさか……！！

俺はスロットル・レバーを押し込むと機体を急加速させ、ミサイルから距離をとる。それと同時に弾頭部が開いたミサイルからは複数の小型ミサイルが射出され、先程まで俺が居た場所へと雨霰の如く降り注ぎ、空中にて炸裂した

《フランキーッ！　どうすれば良いッ？！》

俺はＩＳからの攻撃を何とか回避しながら、フランキーへと無線を

入れる。たかが【傭兵】となった俺の判断で所属不明とはいえ、このＩＳを撃墜すれば、後に国際問題にも成りかねない

現時点で、それらの判断を下せるのは基地での全権と責任を任されている立場上、フランキー位だろう

《……ファントム１　交戦を許可する》

《本気か……いや、成る程な……》

無線からは攻撃を許可するフランキーとそれに納得した様子の千冬の声が響く

《ジェイ、聞こえる？》

《ナターシャか……一応、聞いておくがれっきとした理由はあるんだろうな？》

《えぇ、相手はドイツ領空域に侵入した上、現時点でドイツ軍に【補佐官】として在籍している貴方に不法な戦闘行為を仕掛けたわ》

《つまり、こっちは反撃するには充分過ぎる理由って訳だ。ジェイソン、相手が悪かった事を教えてやれ》

やれやれ……これで、ＩＳと戦り合うのは三度目だな

《こちら、ファントム１　了解、反撃を開始する》

俺は機体を右方向へと急旋回させ、海上にて高速移動を行いながら、俺を追い掛けるＩＳと真っ向から向かい合った状態で急降下を開始

海面スレスレの高度を保ち、兵装を【ＡＤＭＭ】から機関砲へと切り換える。向かい合った状態で捕捉を開始、狙うはあのＩＳが持つ武装一一一『超大型の機関砲』

《捕捉した、攻撃する》

俺は引き金に指を掛け、速度を更に加速させる。鋭い機動力を誇る機体――【ＣＦＡ－４４】は前方の獲物（ＩＳ）へと牙を向ける

引き金を引くと同時に搭載された二門の『３０ｍｍ航空機関砲』は激しい銃火を上げ、鋼鉄すらも易々と貫く機関砲弾をバラ撒く

海上にて、ＩＳとすれ違う時間は恐らく、２分も無い程の短いモノだろう。だが、そのすれ違いの間に放たれた牛乳瓶の底部ほどにも匹敵する口径の機関砲弾は確実に狙うＩＳの武装を砕いた

《ＩＳ機の武装破壊、ＩＳ操縦者に告ぐ　直ちに攻撃を中止し、此方の指示に従え。さもなくば、撃墜する》

俺は【最終通告】を送り、様子を見る

だが、そのＩＳは背面部に搭載した大型の推進機の出力を上げて、移動を開始する。先程、破壊した武装が無くなった分、その機動力は更に上がり、キレも増していた

海上での高速移動を開始したＩＳは、背面の上部に搭載した武装――【スタウロス】とは異なる拡散式のミサイルを発射する

《平和的な解決は無理……か…》

俺は機体を上空へと急上昇させ、後方より迫るミサイルから距離をとる。ミサイルはある程度の距離へと到達すると弾頭部が開き、内部に搭載した小型のミサイルが拡散して空中にて炸裂する

爆風の影響で機体が不安定となるのを俺は両手で操縦桿を押さえつけ、無理矢理に機体を安定させる

充分な高度へと到達すると同時に俺は『ハイＧターン』による宙返りからの急降下を開始、兵装を機関砲から【ＡＤＭＭ】へと切り換

える

胴体部のシャッターが開くのを確認し、俺はＩＳへと捕捉を開始する。起動させるミサイルの数は１２機、恐らくは相手もミサイルを発射するだろうと考え、６機はミサイル迎撃用に残る６機はＩＳ本体に向けてだ

ＩＳには操縦者を保護する【絶対防御】というモノがある。以前、ＩＳ操縦者である千冬たちに聞いた話ではシールドを突破した攻撃のみが『実体』－－－操縦者にダメージを与えられる

【絶対防御】とは操縦者が死なない様に【一部】を除くＩＳには必ず、搭載されているシールドだ。しかし、それは極端にエネルギーを消耗する為、ＩＳが破損したとしても平気だと判断した場合は作動しない仕組みらしい

【絶対防御】に使用されるエネルギーが空となれば、その【一部】である『ＩＳ搭載戦闘機』－－－【ＣＦＡ－４４】と俺が装着している専用のパイロット・スーツであるＩＳと同様、操縦者自身にダメージを受ける事となり、最悪の場合はＩＳもろとも操縦者も死に至る

今、【ＡＤＭＭ】の同時発射できる最大数――２４機を発射すれば、２４機の内で６機はミサイル迎撃として消費するも残る１８機は、あのＩＳへと撃ち込めるだろう。しかし、直撃すれば一機でも高い威力を持つ【ＡＤＭＭ】を１８機もの数を喰らえば、どうなるだろうか？

間違いなく、シールドのエネルギーは瞬く間に空となり、ＩＳもろとも操縦者は【木っ端微塵】となるだろう

無闇な生殺与奪は避けたい。それが最善であり、俺の考えだった

６機ならば、恐らくはシールドのエネルギーを空にする程度で済むだろう、そう考える俺は捕捉完了と同時に発射コードを告げる

《ファントム１　ドライヴ！！》

胴体部のＶＬＳ式の発射口から１２機のミサイルが射出され、母機である【ＣＦＡ－４４】からある程度、離れると水平方向へと針路を変え、標的であるＩＳへと向かっていく

どうやら、俺の読みは当たりらしい。ＩＳは迫る１２機の【ＡＤＭＭ】を確認すると六機のミサイルを発射するも、間近に迫っていた【ＡＤＭＭ】はＩＳが発射したミサイルが拡散する前に迎撃していく

その影響で上空に激しい爆風が巻き起こる中、残る６機の【ＡＤＭＭ】は標的へと加速、ＩＳも推進機を使い回避行動に入り、２機の【ＡＤＭＭ】を避けるも残る４機は上空にて確認する俺から見ても文句無しに直撃していった

《【ＡＤＭＭ】４機の命中を確認、これで大人しくはなるだろう》

《……殺してないだろうな？》

《フランキー、俺は殺人鬼じゃない。無闇な生殺与奪は避けたいからな、直撃はしたが【絶対防御】で恐らく、あのＩＳのシールド・エネルギーは空だろうけどな》

俺は海上へと視線を向ける。視線の先にはシールドが剥がれたのか、装甲に若干の傷を負ったＩＳは上空の俺を見上げる様に見ていた

するとＩＳは再び、拡散式ミサイルを発射し、俺から距離をとり始める。俺はあのＩＳとの交戦の最中、ひとつの疑問を思い浮かべた

《…千冬、あのＩＳの動き……妙だと思わないか…？》

《……どういう意味だ…？》

《あのＩＳ、先程から攻撃と回避を繰り返しているが……どれも最初の動きと寸分、狂わずに動いてるんだよ》

するとフランキーからも同意見が出る

《…確かに……人間ならば長期の交戦、又は自分が追い込まれれば、少なくとも動きに乱れが出始める筈……》

《……ひとつ、これは俺の推測なんだが……アレが【無人機】って可能性はどうだ？》

その言葉と同時に俺はＩＳへと機関砲攻撃を開始、狙うはあのＩＳスレスレの海面だ。放たれた機関砲弾は海面へと着弾し、水柱を上げる

ＩＳはその攻撃を回避しての高速移動を繰り返すも、その動きは【ＡＤＭＭ】命中前と変わらない完璧なまで一定した機動を保っていた

《フランキー、あのＩＳの生体反応を確認できるか？》

《了解した、だが……少し、時間が掛かるぞ？》

《俺を誰だと思ってんだよ？　心配すんな、問題無い》

俺は機体を急降下から加速、距離をとるＩＳへと迫る。ＩＳは今ま

で拡散式ミサイルを射出していた背面の上部とは違い、今度はちょうど腰辺りの装甲が左右へと開放され、それと同時に複数の小型ミサイルを射出。後方より迫る俺へと飛来してくる

《隠し玉って訳か、恐れ入ったよ……》

――だが、そんなモノで俺を墜とせると思ったか？――

俺は機体を垂直上昇させ、迫る小型ミサイルを上空へと誘導、垂直上昇飛行からの高機動旋回――『ハイGターン』による宙返りで機体スレスレをミサイルが通過していくのを確認、ミサイルの背後をとった俺はすかさずに【ＡＤＭＭ】を起動させ、前方を飛んでいくミサイルを捕捉、捕捉完了と同時に【ＡＤＭＭ】２４機を発射する

垂直発射された【ＡＤＭＭ】は、それぞれが捕捉したミサイルへと向けて加速、その数秒後には全てのミサイルを叩き落とした

《ジェイソン、生体反応の結果が出たぞ》

俺は機体を旋回、海上にて高速移動で逃走しようとするＩＳを追う

《それで結果はどうだ？》

《あのＩＳからの生体反応は確認されなかった。お前の読み通り、あれは無人機だ》

《つまり、これで心置きなく……『ブッ壊せる』訳だ…！》

俺はスロットル・レバーを押し込み、アフターバーナーを点火させて速度を上げる。するとＩＳは二種類のミサイルを搭載したそれぞれの装甲を開放、拡散式ミサイルと小型ミサイルを一斉に発射させた

《ジェイッ！！　スピードが速い上に距離が近いわッ！　今すぐに回避して！！》

無線からはナターシャの声が響く

《ナターシャ、勘違いしているぜ……やっと、ちょうど良い距離になった所だ》

俺はスロットル・レバーを最大まで押し込む。急降下状態で機体は一時の静止状態へと入り、一斉発射されたミサイルは眼前まで迫っていた

《ジェイソン（ジェイ／ジェシー）ッ！！》

無線からはナターシャたちの叫びに似た声が響き渡る……少しは俺を信用しろっての……

一時の静止状態の機体はエア・インテーク部から膨大な空気を取り込む

《【極超音速飛行】開始》

眼前へと迫ったミサイルが炸裂する瞬間、【ＣＦＡ－４４】は静止状態からの極超音速飛行を開始、炸裂寸前のミサイル群の隙間を潜り抜ける

機体の後方にてミサイル群は炸裂、だが極超音速飛行に入った機体は全くの無傷だった

俺は兵装を【ＥＭＬ】へと切り換え、ＩＳの頭上を通過する。そのまま、機体を背面飛行へと移行する

正に海面スレスレの位置での背面飛行を行う俺は前方のＩＳへと捕捉を開始する

《幕引きだ……その機械の塊（ギミック）のボディでも、この一発は強烈だぜ？》

捕捉完了と同時に俺は発射スイッチに指を掛ける

《ファントム１　スラッシュッ！！》

発射コードと同時に放たれたマッハ７の速度を誇る電磁誘導により
超加速した弾丸はＩＳの胸部を貫き、風通しの良い穴を空けた

胸部に風穴を空けられたＩＳはそのまま、力無く海面へと倒れ伏し
……海中へと沈んでいった

回想　ー　【疑問】　ー（前書き）

後半の描写は、やけに生々しいモノですが……多分、Ｒ－１５の範囲内で収まるモノだと思います

回想 ― 【疑問】 ―

あの無人ＩＳ機との交戦から、二日が過ぎた

まぁ、あの後に基地へ帰還した俺を待っていたのは基地中の兵士、黒ウサギ隊の隊員たちからの賞賛とフランキーたちの質問攻めだったがな……

当たり前の反応だろう。何故なら、俺は【男】でありながら、ＩＳを起動させた上でソレを使いこなしたのだ――つまり、この【女尊男卑】の常識（リアル）を見事にブッ壊した訳だ

だが、俺はＩＳとそのＩＳを搭載した戦闘機――【ＣＦＡ－４４】を起動させ、いきなり実戦に使った反動なのか、今までに経験した事の無い疲労感に襲われて自室に戻ると同時に倒れた

次に目が覚めた時は既に二日が過ぎていた。ラウラやナターシャ、千冬たちが交代で見舞いに来ていたらしい。だが、それよりも俺が

眠っていた二日の間に随分と世間は大騒ぎだったようだ

――――――――

「ほら、全ての新聞の一面トップになった感想はどう？」

二日間も眠っていてテキーラを一瓶、一気飲みした翌日の二日酔いよりも重い頭を覚ます為、頭以上に重く感じる身体を千冬に引き摺られて食堂で尋常では無い程の苦味と濃さのブラック・コーヒーを飲んでいる俺の前に数枚以上の新聞をイーリは置いた

「…何だ、そりゃ……？」

「読んでみれば、分かるわ。それに今やジェイは隣に居る千冬――『ブリュンヒルデ』と同じ位に有名人よ？」

何時の間にか、背後に現れたナターシャは言う

俺は置かれた新聞を手に取り、それを広げて書かれた記事へと目を通すが……

「……悪いが、ドイツ語は苦手でな……ラウラ、悪いが読んでくれないか…」

先程、食堂へと千冬に引き摺られている際に会ったラウラへと新聞を手渡す

「はい、隊長……『謎の戦闘機乗り、ドイツを救う』……『伝説のパイロット――【ＡＣＥ　ＯＦ　ＡＣＥ】』、『世界で初めてＩＳを搭載した戦闘機を起動させた【男性】とは？』

……どれも隊長を英雄扱いしていますね。それにＩＳを起動させた事も筒抜けみたいですよ？」

「……頭痛がしてきた……」

「頭痛薬の他に胃薬も必要になるわよ、これを見たら……」

そう言って、イーリは食堂に置かれたテレビの電源を入れる

電源を入れたテレビの画面が映し出したのは、【ＣＦＡ－４４】が大空を縦横無尽に飛び回り都市部へと飛来する【スタウロス】を撃墜する映像が流れていた

『この戦闘機はＩＳを搭載しており、この機を操縦していたのは何と【男性】であり、つまりは女性にしか起動できないＩＳを世界で初めて男性が起動させたという訳です』

『ですが、ＩＳを搭載した戦闘機を操縦するパイロットの腕はかなりのモノです。我々が得た情報ではこのパイロットはかつて、世界最高峰の腕前を持つ戦闘機乗り――『生粋のエース』と呼ばれた……』

テレビでは、どのチャンネルも全てがあの時の事を放送していた。どうやら、ドイツ以外の各国でも同じような番組を放送しているらしい

「…胃薬や頭痛薬じゃなく、鎮静剤が必要だな……」

他の新聞にはこう書かれているのもあった

あの『白騎士』と対なる存在――『黒騎士』

決して滅ぼす事の出来ない存在、一瞬で標的となったモノを刈り取る――『不死者』

ドイツを危機から救った英雄――『ジークフリート』

……随分と勝手に呼び名を命名されたモノだな、俺が寝ている間によ……

「…というよりも、何で俺の個人情報や【ＣＦＡ－４４】の事も普通に報道されているんだよ……それも【世界規模】でよ…？」

「それは、どこぞの誰かが機密扱いの情報をメディアに流したからよ。厳重なセキュリティを突破した上でね」

【ＣＦＡ－４４】などの兵器類を狙うならば、分かるが……俺の個人情報まで得る為、厳重なセキュリティを突破してまで入手する物好きなんざ、居る訳が……いや、居るな

俺の脳裏に一人の【ウサギ耳】の顔が浮かぶ

「……十中八九、【アイツ】の仕業だろうな…」

隣に座る千冬が小声で俺に耳打ちする

「…他に誰が居るよ……あのウサギめ……今度、会ったなら、折檻だな…」

俺は軽く目眩を感じながら、未だに重く感じる頭を押さえた

だが、俺はまだ事の重大性に気付いていなかった

今まで、俺を取り巻いていた全てが一変する事にもな

――――――――

そう、あれは普段と変わらずに教導が休みの際、定番となったアウトバーンでの走りでは、パパラッチや各メディアに追い掛けられ……

また、ある時は馴染みとなったドイツの酒場へと足を運べば、街中の人々が集まり拍手喝采に歓声……最早、パレード級の大騒ぎとなった

「……ある程度、予想はしていたが……こりゃ、予想を遥かに越え

たな……」

最早、唯一の安息地となった基地の食堂にて俺は酒瓶を片手に呟く。
ここ数日は基地で完全に缶詰め状態だから、気が滅入る

それに時間は既に深夜を過ぎており、食堂には俺一人しか居なかった

「随分と疲れた顔をしているな…？」

後ろを振り返ると其処には常に着用している軍服を緩め、ラフな格好をしたフランチェスカが居た

「……そりゃ、街に出れば珍獣扱いだぜ、フランチェスカ？

その上、明らかにどこぞの科学者の様な連中が現れては『我々に君の遺伝子を貰えないだろうか？』とか『是非、我々の【研究】に協力して欲しい』だぞ？」

「だが、お前の事だ。そう簡単に承諾する訳が無いだろう？」

するとフランチェスカは俺が持つ酒瓶を取り、豪快に酒瓶へと口付けると一気に酒を煽る

「まぁな、今頃は俺を訪ねた連中は全員、しばらくは病院のベッドの上で天井のシミを数えているだろうけどな……」

俺は以前、街へと訪れた際に購入した煙草を取り出すと一本を袋から取り出し、口にくわえる

「…あまり、煙草を吸うのは感心できんな……集中力が落ち、心肺機能も低下するぞ？」

「適度な喫煙なら平気だ……それに気晴らしだよ」

俺はくわえた煙草にマッチで火を着け、深く煙を吸い込む紫煙が肺を満たし、先程まで飲んでいた酒が溜まった胃袋が焼けただれる様な熱さを感じる

俺は深く吸い込んだ紫煙をゆっくりと吐き出す。吐き出した紫煙は食堂の天井へと上り、天井手前まで上がると空気の流れにより四散していった

「私は煙草が嫌いでな、先程も言ったが集中力が落ち、体力も落ちる上……」

フランチェスカは僅かに残った酒を一気に煽るとダラケた感じに座る俺の膝上に跨り……呆けた表情の俺へと唇を重ねた

重なった唇と共に俺の口内へとフランチェスカの舌がねじ込まれて先程、煽った酒が流し込まれる。流し込まれた酒が喉を伝う度にアルコール度数が強い為、焼けただれる様な熱さを感じる

俺はフランチェスカにされるがままだった。ねじ込まれたフランチェスカの舌は俺の歯列をなぞる様に動き、口内の中心に位置する俺の舌へと絡め、俺の口内を蹂躙する

既に煽った酒は無く、ただ無味の互いの唾液が生々しい音を立てながら混ざり合って俺とフランチェスカ、二人しか居ない静かな食堂に響き渡る

五分が過ぎただろうか……フランチェスカはゆっくりと舌を自分の口内へと戻し、唇を離す。唇を離す際には食堂の電灯に照らされた唾液による銀色の糸が俺とフランチェスカの唇を繋いでいた

「っ……それにキスする時、苦く感じるだろう……？」

「……俺には甘く感じたけどな……」

フランチェスカは俺の頬を撫で、ゆっくりと顔を近付けた

「なら、不公平だな……続きは私の部屋でな？」

「ここ数日、基地に缶詰め状態の俺を慰めてるのか？

なら、少しばかり……スキンシップってのが濃すぎるんじゃないのか？」

「拒むならば、お前だって簡単に拒めた筈だが？」

「…『来るものは拒まず、去るものは追わず』が俺の信条でな」

フランチェスカは俺の膝上から降り、俺の腕を引く

「ならば、拒まずに来て貰おうか……今夜は寝かさんぞ？」

まぁ、言うまでもなく……その後、フランチェスカの部屋で二人、仲良く【激しく燃え上がった】とでも言っておこう

ーーーーーーーー

あれから、三時間位が過ぎた頃……俺はフランチェスカの部屋ーー

一ベッドの端に位置する窓から陽が昇る光景を眺めていた

自分のすぐ隣のベッドへと目を向ければ……薄いベッドのシーツを羽織ったモデルも裸足で逃げ出す一糸纏わぬ姿のフランチェスカが静かに寝息をたてていた

普段とは違い、寝顔は随分と可愛らしいものだな……

そんな呆けた考えを頭に浮かべながら、俺は眠るフランチェスカの頭を軽く撫でた

俺はフランチェスカの頭を撫でながら、俺はある疑問を思い浮かべていた

何故、俺はＩＳを起動できたのか？　これも【転生者】とやらの能力のお陰なのか？

それに【スタウロス】の一件……あの無人ＩＳ機は誰が製作して何

の為、ドイツに現れたのか？

俺は床に脱ぎ捨てた上着から携帯を取り出し、その疑問の幾つかに答えられそうな奴に電話を掛ける――普段ならば、向こうからしか連絡が取れないが……何故か、今ならば連絡できると感じたからだ

「…俺だ……今、会えるか？」

俺は繋がった電話先の相手――『篠ノ之　束』にそう言った

回想　―　【疑問】　―（後書き）

次話では、この作品での【転生者】についてを主題とする予定です

まぁ、ご都合的な内容に仕上がるでしょうが……

回想　―　【天災】との再会と【居場所】　―（前書き）

修正を終えたので、改めての再投稿です

やけに長ったらしく、御都合主義と原作を逸脱したオリジナル展開が満載となっておりますので、ご注意を……

回想　ー　【天災】との再会と【居場所】　ー

束に連絡を入れ、翌日……いや、正確には二日が過ぎた

まだ、陽が昇る前の暗闇がドイツの街を覆う中で俺は一人、静寂に包まれた夜明け前の街をバイクで駆け抜けていた

既にフランチェスカからの外出許可は得ている。許可を得るのには、そう苦労はしなかった

まぁ、一晩中【激しく燃え上がった】のも理由の内だろう。それにフランチェスカは俺が今や一躍、有名人となった為に自由に行動できなくなったのを不憫に思ったのが最大の理由なんだろうよ

俺は束が指定した待ち合わせ場所へとバイクを駆りながら、ある事

を考えていた

――――――――

あれは、まだ日本に来て五反田食堂での仕事を始める前の頃だった

暇を持て余していた俺は俺自身――【転生者】という存在についてを改めて考えていた。この世界には俺以外の【転生者】とやらは存在するのか――または、過去にもそういった存在は居たのだろうか？

俺は手当たり次第にオカルト系などの過去の文献、古本屋などへ足を運んで調べた

だが、収穫は少ないモノだった。稀に前世――前の人生の記憶や技術を持ったまま、生まれてくる者などの所謂、生まれ変わりとい

うモノばかりであり、それ以外には満足な結果は出なかった

――――――――

今現在、俺は考え方の角度を変えてみる事にした。常人離れした身体能力も桁外れに高い適応力も謂わば、遺伝子に刻み込まれたモノ――ならば、人類最高峰の頭脳を持ち【天災】と称される束ならば、それらの謎を科学的に解明できるのでは？

それに【スタウロス】の件についても恐らくは関与しているだろう……それらを問いただすのを兼ねてだ

俺はバイクを加速させ、待ち合わせ場所へと急いだ

――――――――

待ち合わせ場所――海岸沿いの道路脇にバイクを駐車させ、俺は浜辺へと歩き出す。まだ陽が昇るには大分、時間がある……俺は浜辺をしばらく歩きながら、束の到着を待った

だが、一向に束が現れる様子は無かった。辺りを見渡しても人影は無く、海へと視線を向けてもこれといっての怪しげなモノも見当たらなかった

「こりゃ、無駄足だったか……？」

そう呟き、浜辺へと視線を戻した俺はあるモノを見つけた。それは砂浜に突き出た物体――ウサギの耳を模したようなモノであり、ご丁寧にもその物体には『引っ張って下さい』と書かれたタグが括り付けられていた

これは何かのテストか、罠の一種なのか……？

とはいっても束の姿が無い以上、明らかに怪しいソレ以外に束からの手掛かりは無い為、俺はタグに書かれた通りにソレを引っ張った

砂浜だった為か、ソレは難なく簡単に抜けた――だが、俺が引き抜いたソレは単なるウサギの耳を模したカチューシャであり、それ以外は何にも変わりは無かった

「…俺にどうしろって言うんだよ……？」

俺はまだ薄暗い空を見上げ、呟く。すると俺の上空より飛来……いや、落下する【何か】が見えた

戦闘機乗りであり【転生者】でもある俺の目は最早、そこらの望遠鏡以上の視力を誇る。俺は落下地点と予想される場所――今、俺が居る場所から走り出す

ある程度、落下地点から距離をとった俺の眼前に遥か上空より落下

するソレは砂浜へと激突――衝撃で砂煙が辺り一面を覆う。俺は目を凝らして落下したソレの正体を確認する

まさか、未知との遭遇と言わんばかりにＵＦＯじゃないだろうな……

だが、砂煙が晴れたソレの正体は呆けた俺の想像を遥か斜め上へとブッ飛んだモノだった

「……人参（キャロット）…？」

落下したソレはまるで漫画に登場する様なやたらとイラストチックな人参を模したモノだった

「あっはっはっはっはっ、引っ掛かったなぁ！　ジェイ君！！」

高らかな笑い声と共にその人参の中心部が開き、中から現れた人物……それは……

「……束、なんだそりゃ……？

というよりも今頃、基地じゃあ未確認飛行物体が現れたって大騒ぎだぞ…？」

「心配ご無用、この移動用ラボ【吾が輩は猫である（名前はまだ無い）】は従来のステルス機以上の高度なステルス機能を搭載しているから♪」

「無駄なまでにハイスペックだな、オイ……」

明らかに技術の無駄遣いだろうが……

「でも、久しぶりだねぇ……ジェイ君の【愛妻】である束さんの顔を見たくて堪らなくなっちゃったのかなー…？」

ニヤニヤという表現がピッタリな笑みを浮かべ、相変わらずのモデル顔負けの肢体を俺の身体へと擦り寄せる束

顔を俺の胸元に埋め、まるで猫が自分の縄張りを主張する様に顔を擦り付ける。すると束の動きは止まり、こう言った

「……雌（おんな）の匂いがする……

ジェイ君、私やちーちゃんという美人が居るっていうのに他の女を抱いたの？」

「犬か、お前は……

……その件に関しては…【黙秘権】を……」

「天才であり、ジェイ君の嫁である束さんは却下します

相手は誰かな、あのナターシャっていう元カノ？」

「いや、ナターシャとはひと月程、前でコレはフランチェスカ……あ……」

俺は自ら、最大の墓穴を掘った事に気付いた

「ふーん……もし、ちーちゃんやジェイ君を慕っている子たちにこの事がバレたら……きっと世間とかは大騒ぎだろうねぇ……？」

「頼むから、やめてくれ……『ドイツ基地で殺人、痴情のもつれが原因か？』なんて報道されるのが目に浮かぶ…」

「じゃあ、ジェイ君は束さんに対して大きな借りができた訳だね？ちーちゃんたちに内緒にしてあげるんだから」

まるで新しいオモチャを手に入れた子供の様に無邪気に笑い、束は俺を見上げる

「……あんま、無理難題をふっかけんなよな？

俺はお前とは違って、優れた人間じゃあ無いんでな」

「んー……無理難題じゃないよ？

束さんが要求するのはジェイ君からの愛かな？」

「愛ねぇ……それも難題ってモノに変わりないんじゃないのか？」

「別に大した事じゃない筈だよ？

例えば……」

すると束は顔を近付けると……無防備となっている俺へと唇を重ねた

ゆっくりと束の舌は俺の口内へと侵入、この間のフランチェスカと同様に侵入してきた束の舌は俺の口内を蹂躙した

十分が経過した頃、満足したのかは知らないが束は舌を戻してゆっくりと唇を離した

「……満足しましたか？」

「っ……束さんの初めてのキスを堪能したんだから、もっと嬉しそうな感想は無いのかなぁ？」

「ファースト・キスで舌を突っ込んでくる奴は居ないと思うが？

……取り敢えず、これで貸しはチャラって事か？」

「何だったら、もう一つの束さんの【初めて】も捧げてあげようか？」

「とても魅力的な話だが、遠慮させて貰おうか……そこまで、節操なしでも無いんでな」

「つれないなぁ……他の女は抱いても私やちーちゃんは抱けないっていうの？」

「お前ならともかく、何で千冬まで出てくるんだよ？

それより、何時からお前は【俺の女房】になったんだ？　恋人やら結婚やらを数段階、すっ飛ばしてよ……」

俺は軽く頭を押さえ、束へと目を向ける。コイツと話すと何故かしら、こっちのペースというか調子いうか……色々と崩されてしょうがない

「束さんのジェイ君に対する愛は常識なんて、つまらないモノは通用しないの♪

それにジェイ君は束さんやちーちゃん、その他多数の人に好かれてるんだよ？　ジェイ君もそこまで朴念仁じゃないと思うけど？」

「はぁ……キリが無いから、この話はパスだ……【本題】に入ろう」

俺は正に神出鬼没である束を呼び出した【本題】へと入る

「先ず、お前には頼みたい事がある。何故、【男】である俺がＩＳを起動できたのか……精密検査なり何なりと調べて欲しい

それにこのＩＳについてもな、本来なら【不死者（Ｎｏｓｆｅｒａｔｕ）】についても調べて欲しいが……生憎、機体は格納庫で厳重保管中なんでな」

少なくとも今、【スタウロス】の事を聞いても結局、はぐらかされてお終いになりそうだ、そう考えた訳で先に俺や待機状態－－－首にぶら下げた認識票となっているＩＳについてを調べて貰おうと判断した

「せっかちだなぁ、ジェイ君は……まぁ、そこも魅力的なんだけどね？」

そう言って、束は人参一一一移動用ラボへと俺を招いた

内部は移動用の為か、搭載された機材などはコンパクトにまとめられているが、それらに関しては素人の俺から見ても軍施設の設備とも引けをとらないモノだった

「先ずはジェイ君の検査からかな……それじゃ、上着を脱いでくれるかな？」

俺は言われた通り、上着を脱ぎ捨て半裸となる。手慣れた様子で束は注射器を取り出し、採血を開始する。やたらと熱っぽい視線を束から感じるのは気のせいだという事にしておこう

「血液の分析には少し時間が掛かるから、その間にジェイ君のＩＳを調べちゃうね？」

束は俺の首にぶら下がった待機状態となっているＩＳ－－－認識票を手に取り、ソレを眺める

「待機状態はジェイ君の認識票と同じ形状になってるね。ただ『首無し騎士』の刻印が刻まれている……

何の偶然か、ジェイ君が率いていた部隊の隊章と全く同じだよ？」

俺はその認識票（ＩＳ）へと目を向ける。刻み込まれた刻印はかつて、俺が率いた部隊－－－【ファントム隊】の隊章とは違い、色付けは無いものの『漆黒の馬に跨り、剣を高らかに掲げた首の無い騎士』だった

「……偶然というべきか……はたまた、必然だったのか……

世の中、分からない事ばかりだな…」

束は搭載された機材のキーボードを叩き、画面にはよく分からん数列やら計算式が表れる。しばらくすると画面には起動時のＩＳの図面が表れた

「ふむふむ……このＩＳは普通のとは違い、装着者の身体機能の強化を重視したスタイルになっているね

でも、その分は他の機能を犠牲としているかな」

「……つまり、分かり易く言うと？」

「装着者の身体機能は強化されるけど、飛翔機能も無ければ絶対防御も無く、基本的なハイパーセンサー位しか内蔵されてない【欠陥機】って訳だよ」

「【欠陥機】か……まぁ、少なくとも【Ｎｏｓｆｅｒａｔｕ（ノスフェラトゥ）】のパイロット・スーツとしては最適だったな」

「【不死者】なんて随分と物騒な名前だね？」

「割と気に入っている異名だ。それに元々、アレを設計したのは俺だ、設計者が名前を付けるのは当然だろう？」

「まぁね、束さんが開発したＩＳの幾つかも、名前は束さんが付け

たから

でも、ＩＳを戦闘機に搭載するとは中々の考えだよ。天才である束さんも感心しちゃったなぁ……」

「だが、お陰で俺専用機となっちまったがな……まぁ、元々は俺が操縦する事を前提に設計したから、当たり前だと言ったら当たり前だけどな」

だが、ＩＳを搭載した事については予想外だったが、と付け足して俺は言う

「でも、ジェイ君ならＩＳを起動させても不思議じゃないかな……何たって、束さんの【旦那様】なんだから♪」

「だから、俺はお前の恋人でも旦那様でも無いが……？」

「今はまだね、でも直にそうなるよ？」

「その根拠のない自信は何処から湧いてくるんだかな……」

一通り、ＩＳの検査は終わり俺は脱ぎ捨てた上着を着直す。その際、束から残念がる視線を感じたのも気のせいだと思っておこう

そうこうしていると血液検査とやらの結果が出てきたらしい。束は機材の画面からその結果を映し出した

画面に映し出されたのは、映画やテレビなどによく登場する遺伝子の配列図の様なモノだった

「簡易的なモノだけど、そこらの病院や研究施設とは比にならない程の精度を誇るのだから、間違いは無いから心配ご無用だよ♪」

「いや、そこらの病院や研究施設以上の精度を誇る機材は簡易的とは言えないと思うけどな……」

「お堅い事は無しだよ、ジェイ君？

さてさて、検査の結果は……」

束はしばらくの間、検査結果とやらが映し出された画面を眺めていた。だが、流石は【天災】というべきか……十分もすれば、束は俺の方へと向き直る

「んー……検査結果は至って正常かな？

でも、【一部】を除いてね」

「……【一部】を除いて？」

すると束は先程、採血の際に注射器を刺した右腕を指差す。右腕には刺した筈の小さな針穴の痕は無く、うっすらと出ていた血も何時の間にか、止まっていた

「ジェイ君の治癒過程の速度は常人の５０倍ってところかな？

掠り傷なら数秒で治っちゃったり、殆どの病気なんかにも免疫を備えている……正に有り得ない事だよ？」

「……つまり？」

「白血病や癌なんかの現在でも不治、治療困難の病気にすら高い免疫力を備えているから、全ての病気に克服している状態って訳

それにあらゆる毒物、薬物にも免疫があるから、強力なモノでも時間があれば勝手に解毒しちゃうだろうね」

「……常々、自分が化け物じみた奴と考えていたが正真正銘の化け物だったとはな……」

すると束はこう言った

「寧ろ、これは【進化】なのかもね？　他にも高い身体能力や桁外れの適応力……

これは束さんの推測なんだけど……ジェイ君は現在の人類よりも数段階、先を進んだ人ーーー所謂、『超人類（スーパー・サピエンス）』ってモノじゃないのかな？」

「【超人】って訳か？

なら、納得できるわな……見ただけで乗り物の操縦方法が理解でき

て、ＩＳを起動させたのも……」

まぁ、随分と無理矢理なこじつけだがな…、と俺は付け足して言う

「でも、これは束さんも驚きだねぇ……ＩＳ以上の大発見だよ？」

「少なくとも、この事を知られたら各国の科学者たちは狂喜して、各国は躍起となって俺を狙うだろうな

正に絶好の【研究対象】かつ最高の【実験動物（モルモット）】って訳だ……唯でさえ、ＩＳを起動させた男として目を着けられているのによ……」

すると束は俺に近寄るとその細い腕を俺の首に巻き付け、抱き付く

「ジェイ君は大丈夫だよ……だって、ジェイ君は私のモノなんだから……

……他の科学者なんかには渡さない……」

俺は束の瞳を見た。その瞳は普段とは違い、暗く無機質というような感情が無い瞳だった

「……俺は誰のモノでも無いぜ？

……少なくとも、科学、研究オタク共のモノでも無いがな」

俺は束の頭をゆっくりと撫でる。束は俺の胸元に顔を埋めた

「……束、あの無人ＩＳ機……製作したのはお前か…？」

「…ううん……アレは私が作ったモノじゃないよ……

でも、作った連中の目星は着く……」

「…そうか……なら……【スタウロス】の一件、あれはお前の仕業か？」

「……分かっている事をジェイ君は聞くのかな…？」

「…俺はお前の口から聞きたいんでな……」

すると束は顔を胸元に埋めたまま、静かに言い始めた

「……ジェイ君はＩＳに人生を翻弄されていたでしょ……でも、ジェイ君は束さんやちーちゃん、女性を憎んだりしなかった

それにジェイ君は、この【女尊男卑】の世界でも常に自分を貫き通していた……」

束はゆっくりと言葉を続ける

「ジェイ君は何時も空を眺めては寂しそうな表情をしていた……でも、当たり前だよね…

だって、ジェイ君から空を奪ったのは私が原因なんだから……」

束は俺の上着を握り締める。その細長い指には指先が白くなる程の力が込められていた

俺は、ただ黙って束の言葉を聞き続けた

「……ジェイ君が此処にちーちゃんと一緒に来た時、あの戦闘機の事を知ったんだ……勿論、ジェイ君が設計した事もね……

ジェイ君がＩＳを起動しなければ、私がやった【賭け】は成立しなかったけれど、私はジェイ君が起動できるって思ったんだ……

科学者っていうのは感情よりも理論を優先して、物事を考えるモノなんだけどねぇ……」

「随分と分が悪い上、危険な【賭け】だな……俺が起動できなければ、都市は消滅して数万人が死ぬ事になった……

俺一人に対して、大きすぎるリスクだな…？」

「……私はね、ジェイ君……この世界が嫌いだった。幼い頃から私は自分の才能に気付いていた

みんなが、一を知って二通りの答えを出せるようになる頃、私は一を知って千通りの答えを出せた

みんな、最初は凄いって誉めてくれた……でも、時が経つにつれて、

私を気味悪がっていった……学校の先生や自分の両親にすら……」

俺は束の話を聞いて思った。人間って生き物は異なるモノを恐れる

最初は束を優秀だと、皆が持て囃したのだろう……だが、束の底知れぬ才能に皆は恐怖を抱いた

行き過ぎた才能は何れ、自分たちを脅かす脅威となるのではないか？

きっと、そう考えたのだろう……随分と勝手な考えだな……束は自らが望んでその才能を得た訳では無い。ましてや、その才能を私利私欲の為、使った訳でも無い

ただ、一人の人間には有り余る才能を持っていただけで周りからは畏怖の目を向けられた

人間ってのは、つくづく身勝手な生き物だ

束は言葉を続けた。相変わらず、顔を俺の胸元に埋めたままで表情は見えなかったが……

「……でも、幼い頃からちーちゃんが居てくれたから私は平気だったそして、私はＩＳを開発して世界に私の居場所を作ろうと考えた……でも、そのせいで私は両親から非難を浴びて、妹の【箒ちゃん】にも迷惑を掛けて……結局は居場所を無くしちゃったんだ……」

俺は束の頭を撫でながら、こう言った

「……束、俺はよ……生まれて直ぐに両親を亡くしたんだよ」

「え……？」

「生まれて直ぐだったから、親の顔なんて写真でしか見た事が無かった。それに俺が軍に入って出会った仲間も相当、キツい人生を送った奴らばっかりでよ……

目の前で親兄弟を殺された奴、唯一の肉親だった妹をどこぞのゴロ

ツキ共にボロ雑巾のように暴行された上、なぶり殺しにされた奴…
…挙げ句の果てには生活苦で無理心中を図ろうとした親を自分の手
で殺した奴……

そんな連中も居た……だからよ、お前は人生のどん底を経験したと
思ってんなら……そりゃ、小さい事なんだよ。お前はまだ、【一番
の居場所（家族）】を失った訳じゃないだろう？」

「……そう…かな……？」

束は埋めていた顔を上げ、俺を見上げる

「あぁ……それによ……」

そう言って、俺は束を外へと連れ出した

ーーーーーーーー

俺は束を外へと連れ出し、バイクの後ろへと座らせて日の出前の薄暗い街を駆け抜けていた

「バイクになんて、乗った事なんか無いだろ？」

「うん、私は今日が初めてだよ♪」

先程とは違い、普段の様な明るい口調で束は言う。バイクを駆る俺の後ろに座り、束はしっかりと俺にしがみついた

「こうして、バイクや車を飛ばしているとよ……普段の道が全く違う様に感じるんだよ

それに……世界ってのは見方の角度を変えれば、幾らでも変わるモノなんだぜ？」

俺はバイクを加速させ、まだ誰一人として起きていない街を駆け抜ける

「……ありがとう…」

風を切る音と共に、束が呟いた言葉が微かに聞こえた。俺は静かに笑みを浮かべて、更に速度を上げた

――――――――

バイクを最大速度まで飛ばし、俺と束がたどり着いたのは山岳部の峠道の頂上だった

俺はバイクを止め、ドイツの街並みを一望できる場所へと足を運ぶ

「随分と走ったけど……此処に何か、あるの？」

「……まぁ、見てみろって……俺のお気に入りだぞ」

2～3分が過ぎると水平線の彼方から朝日がゆっくりと昇り、薄暗かった街を眩い光が照らしていく

「うわぁ……綺麗……」

束はその光景に暫し、目を奪われている様子だった

「…俺はよ、ガキの頃から夜明けをよく見ていたんだよ。どんな場所だろうが必ず、夜明けってモノは来る……明けない夜ってのは無いってな

それによ、世界ってのは……そう悪い所ばかりじゃない。こういった良い所もあるんだ……

お前には千冬や妹の【箒】って娘、それに俺が居るんだ。お前の居場所はまだ失ってないんだからよ……」

「…ジェイ君……」

「だから、何でも一人で抱え込むなよな……また、俺の為とか言って軍事ネットワークやらにハッキングしての大騒ぎはゴメンだからな？」

「酷いなぁ、全てはジェイ君を想っての行動なんだよ？束さんみたいに一途で相手に尽くす美人は早々に居ないと思うけど？」

「尽くす手段がブッ飛び過ぎだろうが……まぁ、相手の見せ場を作る為に都市に巡航ミサイルを発射させる奴なんざ、お前しか居ないだろうけどよ」

「それ位、束さんのジェイ君に対する愛は大きいんだから♪」

すると束は俺に近寄るとこう言った

「でも、ありがとうね……ジェイ君のお陰で何だか、スッキリした

よ。それに、この世界もそう悪くないって思えてきたしね」

「そりゃ、何よりだ。これで世界中に核弾頭だの巡航ミサイルなんかをぶっ放す事を避けれた訳だからな？」

「ふっふーん、そうかもね？　それとさっきも言ったけど……」

―　ジェイ君は私のモノだからね？　―

そう言って、束は軽く俺に唇を重ねた

「っ……それじゃ、また会おう♪」

唇を離すと束は俺から数歩、離れた。俺は束を目で追うも朝日の眩い逆光で一瞬、視界を遮られた

次に束が居た場所を見れば、既に束の姿は無かった

俺は海辺の方向へと視線を向けるも、其処にはあの『人参』型の移動用ラボも既に姿は無かった

「…神出鬼没というよりも……予測不能な奴だよ、相変わらずな……」

俺はため息をつきながら、バイクに跨ると基地へとバイクを飛ばした

それから、数日後……ドイツでの教導生活も残り僅かとなった俺に一通の手紙が届いた。手紙といってもソレは一枚の写真が同封されているだけのモノだった

写真には無邪気に笑う束と……ぎこちなさそうな堅い笑みだが、少しだけ嬉しそうな表情を浮かべる少女が写っていた

そして、写真にはこう書かれていた

『箒ちゃんと一緒に　まだまだ、ぎこちない感じだけど私の大切な居場所――家族と』

俺はソレを見て、静かに呟いた

「……何か、束とは真逆な感じだな…？」

回想　―　【天災】との再会と【居場所】　―（後書き）

作者は原作知識は皆無であり、基本的にこの作品は二割の原作沿いと八割のネタとオリジナル展開で構成されております

また、作者自身もこの話を書いている最中に「何か、ベタな展開だろ？」と思いましたが、作者のちっぽけな頭と微生物以下の文才ではこれで精一杯ですので、どうか寛大なお心でこれからもよろしくお願い致します……

次に更新する話で回想編を終わりとする予定です

内容としては『亡国機業』との対抗勢力として、ジェイソンが新たな【部隊】を結成するまでの話を考えています

作中では、ジェイソンの率いた【ファントム隊】の愉快（？）なメンバーも数名、登場予定です

メンバーとしては、女ったらし、寝る時以外は喋り続ける奴などの個性的なキャラを考えております

それでは……

回想　ー　【別れ】、そして【現在】へ　ー

ドイツの教導生活も終わりに近付くにつれ、俺はこの基地での一年間という長い様で短かった期間を振り返った

初めは千冬の補佐官として、途中からは同じ教導官として……

まぁ、ナターシャとの再会など色々とあり、今では国連所属の傭兵パイロット兼【世界初の男性ＩＳ操縦者】となった訳だ。俺もそろそろ、三十代に差し掛かるが……これまでの人生でも、正に怒涛の一年だったな…

教導生活が残り１ヶ月となった頃、多少は世間からの反響とやらは収まってきた。だが、今ではこの世界ーーー【女尊男卑】に生きる世界中の男たちからは俺を【英雄】と崇める奴も居るらしい

しかし、世の中の女性たちも【スタウロス】の一件以来、これまでの極端な男に対する【扱い】とやらも以前に比べて良くなったらしい。それに各国の軍隊では戦闘機乗りに憧れて、次々と入隊志願する男たちが増えた様だ（但し、ＩＳの登場以降の軍事縮小の為に戦闘機の数は減っており、パイロットの数の方が遥かに上回っているのだが……）

だが、各国からはこぞって、俺を傭兵として雇いたいという申し出が多数、出てきた

待遇はかなりのモノであり、報酬も結構な額を提示している上、望むモノは全て手配するという中々、魅力的な条件を出してきた

だが、どの国も本当の目的は同じだ。男であり、ＩＳを起動させた俺を研究したいのが本心だろう

何故なら、俺は言わば、この【女尊男卑】という世界を引っくり返す『唯一の鍵』だからだ。誘惑に負けて、その条件を飲んだなら最後……俺が死ぬまで連中の研究材料にされるのがオチだって事は分かり切っている

まぁ、連中は無闇に手出しはしないだろう。今はドイツでの補佐官として……コレが終われば、国連の傭兵……既に予約済みなんでな

――――――――

ドイツでの教導生活も残り半月となった頃、俺は基地内でも引っ張りだこになっていた

千冬に呼び出されては以前、日本に居た頃に一度だけ、千冬と行った……『剣道』ってヤツか？　ソレの模擬戦を頼まれたり、ラウラやクラリッサの『黒ウサギ隊』の隊長格からは二人同時に接近戦の模擬戦を頼まれたりもした（千冬もだが、やたらと【本気】な目をしていたが……）

また、イーリの奴からはＩＳを使った空中戦での模擬戦を頼まれた事もあった（その模擬戦の直前までは、ナターシャに【絡まれて】いて、模擬戦時には【本気で撃墜する】と言わんばかりの勢いだったがな）

ナターシャやフランチェスカは……あー、あまり詳しくは言いたくないがその……教導が休みとなっている日の夜には現れて【搾り尽くされかけた】とでも言っておこう。というよりも、あの二人の体力は俺以上じゃないのか？（【夜限定】でよ）

……おふざけな話はここまでにしておき、半月前の【スタウロス】の一件の際、現れた【無人ＩＳ機】については海中に沈んだ残骸を回収し、国連の研究機関へと送り、調査された結果は半月後の最近になって届いた

あの無人機は【独立稼働型人口頭脳（ＡＩ）】を搭載、それに【遠隔操作システム】、ＩＳ自体も束が開発したモノとは違い、それらをモデルとした【擬似ＩＳ】だという事が判明した

あの無人機に使用されていた【擬似ＩＳ】は本来のＩＳの所謂、劣化品といった所だろうか。絶対防御などの基本的なセンサー類はあるものの、基本的な性能は劣るモノだった

しかし、厄介な事に【擬似ＩＳ】は開発途中の段階であり、もしも開発を終えていた場合は【男性】でも起動できる上、擬似（つまりは、コピー品）という面でも大量生産も夢では無いという可能性が見えてきた

俺は秘密裏に束から情報を頼んだ。以前、束と会った際に束はあの無人機を作った【連中】の目星は着くと言っていたからだ。束は情報を提供してくれた、あくまでも国連の為では無く、俺からの頼みだからだと強調してな

提供された情報で、あの無人機を開発したであろう【連中】――『亡国機業（ファントム・タスク）』と呼ばれる組織と判明した

フランチェスカからの『亡国機業』という名の組織について、尋ねてみるとある事が分かった

『亡国機業』とはかつての大戦――第二次世界大戦中に創設された組織――所謂、【秘密結社】らしく、これまでに起きた大規模な戦争、又はテロ……しかも、あの史上最悪のテロ――『９・１１』までにも関与しているらしい

これまでに判明している関与した出来事に対して『亡国機業』の目的は何らかのテストと思われている。実際、あの無人機の出現も実戦での性能をテストする為だろう

だが、『亡国機業』が関与しているモノはそれだけでは無かった。あの第二回目のＩＳ世界大会一一一『モンド・グロッソ』の時に起きた一夏の誘拐事件にも関与している事も分かった

どうやら、ここ数年……連中はＩＳ関連に目を着けている様だ。それに恐らく、連中は俺にも目を着けただろう、男でありながらＩＳを起動させ、自分たちが開発した無人機をいとも簡単に破壊したんだからな

少なくとも俺が連中ならば、そうする

この事を踏まえ、国連は『亡国機業』の開発している無人ＩＳ機はまだ多数、存在すると考えた。ドイツでの様に恐らく、連中は都市部を狙っての【テスト】を何れ、また行うと想定した国連はナターシャやイーリを通して、ある命令を出した

それは、国連が指名する『ＩＳ操縦者』と俺が推薦する『戦闘機乗り』たちで対『亡国機業』専門の部隊を結成しろとの事だ

現在、その部隊とやらのメンバーは俺とフランチェスカ、ナターシャとイーリ……正式では無いが千冬の名も挙がっている

しかし、まだ教導期間中である為、結成は教導生活の終了後と先延ばしにした。一度、頼まれた事はキッチリとやり遂げるのが俺の流儀なんでな

――――――――

俺と千冬は晴れて、一年間という教導生活を今日で終える。既に荷物（とは言っても日常生活に必要最低限のモノなので、極めて少ないのだが）は纏め終え、俺と千冬、ナターシャやイーリ、フランチェスカに『黒ウサギ隊』の一同が【ＣＦＡ－４４】が納められてい

た格納庫に勢揃いしていた

今では、俺の専用機となった【ＣＦＡ－４４　Ｎｏｓｆｅｒａｔｕ】は二日前に国連から派遣された作業員たちにより、俺の新たな『配属先』へと既に輸送済みだった。格納庫の外に位置する滑走路には一機の輸送機－－－【Ｃ－１３０　Ｈｅｒｃｕｌｅｓ】が待機していた

千冬は日本へと帰国するそうだが、俺は直ぐに『配属先』へとナターシャとイーリの二人と共に移動するそうだ。フランチェスカはまだ、この基地に駐在するらしい

何でも、自分の後任に相応しい人物を見付けて『キッチリ』と教育した上で、これから結成しなければならない【部隊】に配属されるようだ

俺と千冬は一年間、教え子だった『黒ウサギ隊』の一同に別れの言葉を送る最中だった

「キミたちは、私たちが一年という期間で鍛え上げた。正直、言えば……直ぐに音を上げると思っていたが、流石はドイツが誇る精鋭たちだ」

千冬は『黒ウサギ隊』の一同を見つめ、言葉を続ける

「今や実力はこれまでとは比較できない程、高いモノになっているだろう……しかし、過信はするな

過信は己を滅ぼす事となる。常に鍛錬を怠らず、より高みを目指して精進する事を忘れるな！！

キミたち、『黒ウサギ隊』――ドイツ軍ＩＳ配備特殊部隊『シュヴァルツェ・ハーゼ』の教官を務めた事を誇りに思う」

千冬は言葉を締めくくると敬礼を隊員たちに向け、行った。その姿は正に軍人、そのものだった

千冬の言葉が終わり、俺の番がやって来る……正直、千冬の言葉が良すぎる為、俺は非常に気まずい

ご立派な言葉など、考えもしていないからな……まぁ、下手に着飾らずに思った言葉を言えば良い

その方が、俺らしいからな

「…あー……『黒ウサギ隊』の諸君とは、トレーニングなどの基本的な教導しか担当していなかった。正直、千冬たちに比べれば、俺がキミたちに教えた事は微々たるモノだろうな……

キミたちに送る言葉は……まぁ、だいたいは千冬と同じ内容だ。だが、一度は部隊を率いた経験がある『隊長』として、そして『先輩』として、『黒ウサギ隊』――『シュヴァルツェ・ハーゼ』の諸君に一つ、言っておく事がある

何れ、キミたちにも様々な任務を任される事が恐らくはあるだろう。もしかしたら、その任務は理不尽かつ人として、軍人として誇れない様な【汚い仕事】かも知れない

だが、これだけは覚えていて欲しい。キミたちは最高の部隊であり、【最高の仲間】たちに恵まれている……だから、仲間だけは誇れ

……俺が言える事はそれだけだ」

俺は千冬と同様に敬礼し、言葉を締めくくる

それと同時に俺を除く格納庫内の全員が一斉に敬礼をした。隊員たちの顔を改めて見てみれば、既に何人かは泣きそうな表情を浮かべているのが居た

「……ラウラ・ボーデヴィッヒ少佐、前へ！！」

俺はラウラの奴を呼び出すと前へと来させる

俺はラウラが此方へと来ると一度は軍を離れても肌身離さずに身に付けていた認識票（ドッグ・タグ）を首から外し、ラウラの首へと掛ける

「隊長……コレは隊長の……」

ラウラは自分の首に掛けられた認識票へと視線を向ける

「……同じ隊長として、お前にコレを預ける。何時か、また会える日が来るまでな？」

するとラウラは視線を俺へと向け、敬礼をしながら言う

「っ……了解しました！　全身全霊を賭けて誓いますッ！！」

その時のラウラの右目は……今にも涙が零れ落ちそうだった

「…頼んだぜ、ラウラ？」

俺は軽くラウラの頭を撫で、笑みを浮かべる。湿っぽい別れは苦手だ……だから、こうして笑うのが一番なんだよ

ーーーーーーーー

「…そして、現在……つまり、今はこうして輸送機の中で、こうして昔話をしている……ここまでが【回想記録（エピソード・ログ）】って訳だ」

「……気を確かに、ジェシー？」

隣で不憫そうに俺を眺めるイーリが言う

「……あのな、これは独り言じゃなくて、今までの事を記録していたんだよ

第一、5～6時間も機内に缶詰だろうが……機内食も機内上映も無いんじゃ、記録くらいしかやる事が無いだろうが……」

俺は記録の際に使用していたパソコンを片付けると積み込まれた一台の戦車の上へと登り、寝転ぶ

「全く……普通、一度はアメリカに飛行機で行ってから、ヘリとかで移動するのに何が悲しくて、戦車と一緒に輸送機で運ばれなきゃ、ならないんだか……」

「それは仕方ないじゃない、ジェシーは今や世界で唯一の【男性】ＩＳ操縦者なんだから

普通に飛行機になんか、乗ったら各国の機密組織やら機関がハイジャックしてでも、拉致しようとするでしょうが？」

「それに……こんな美女が二人も同伴しているんだから、寧ろ幸運な事なのよ、ジェイ？」

先程まで、この輸送機の操縦者と何やら話していたナターシャは、そう言って戦車の上で寝転ぶ俺の腹部へと跨る

「……それに昔を思い出さない？　軍に居た頃、ジェイの愛機だった『Ｆ－１４Ｄ』の操縦席で【イイ事】をしたじゃない…？」

まぁ、明らかにアレは規律を違反していたけどね？、と付け足しながら言うナターシャ

「少なくとも、今程は盛っていなかっただろうなぁ……お前はよ
それに幾ら、美女といってもベッドの上では【獣】だろうが？」

「あら、獣っていうのは失礼じゃない？　せめて、『愛が激しい』
と言って欲しいわ」

「それにアタシが散々、言ってるじゃない？
ドイツでは【裸同士】でキスまでした仲なんだから、ナタルみたい
にアタシの【純潔】をジェシーに折角、捧げてあげるって言ってる
のに……」

肩を竦めながら、言うイーリ……普通、女が言う台詞じゃないだろ
うが……

「聞いてないわよ、ジェイ？　何時、イーリとそんな関係になった
のかしら？」

……と、頬を膨らませながら言うナターシャ……

「……聞かれなかった上、言っても無いからな。知ってる訳が無いだろうが？」

「全く……千冬にフランキー、それに『黒ウサギ隊』のメンバー、それにナタルとアタシ……何人の女を墜とせば、気が済むのかしらねぇ、ジェシー？」

「人を女ったらしの様に言うな、少なくとも俺はお前らに一度も言い寄った覚えは無いぞ？」

すると二人はため息をつき、自分の頭を軽く押さえた

「ハァ……普通に無意識で墜としているから、厄介なのよね……」

「その上、中途半端にしか分かっていないんだから尚更、質が悪いったらありゃしないわよ……」

……等、と何やら呟く二人……俺、何か変な事でも言ったか？

「……しかし、また部隊を率いる事になるとはな……それも、ＩＳと戦闘機の混合とは……」

俺は先程、片付けたパソコンを取り出して画面に『とある紋章（エンブレム）』を映し出す

「……あら、それは？」

俺の腹部から降りたナターシャは、パソコンの画面を覗き込んだ

「……一応、部隊の隊章を考えてな。ＩＳと戦闘機の部隊って訳で、思い付いたのが【コレ】だ」

画面には俺にとってのＩＳの象徴――あの『白騎士』とかつて、俺が率いた戦闘機部隊の隊章――『漆黒の首無し騎士』が共に剣を掲げ、交差させている姿が描かれた紋章だった

「ふーん……中々、イイ感じじゃない？」

ナターシャの隣からパソコンを覗き込むイーリ

「……それで部隊の名前って、決まっているのかしら…？」

「一応はな……対『亡国機業』専門、ＩＳ編成戦闘機部隊……名前は――【ＴＡＳＫ　ＦＯＲＣＥ】だ」

現在　ー　【思わぬ出世】　ー

輸送機にて、延々と気流による揺れを散々、堪能した俺は新たな『配属先』へと向かっている最中だった。先程、パイロットに現在地を聞いた所、どうやら【北アメリカ北西部】を飛行中らしい

しかし、ここら一帯には軍事施設、基地は地図に無い筈……俺は暫しの間、考え込む

そう言えば、海軍での頃にこんな噂があった。噂といっても、くだらない内容なんだったがな……

当時、アメリカは年間の国防費を存在する軍事基地、施設の数よりも上回る費用を毎年、出費していた。噂ではあの有名な――『Ａｒｅａ　５１』での研究費用に回されていると言われていた

不思議な話では無い、【彼処】で行われている事は軍や政府でも僅か、一部の人間しか知らない。『大統領』までもが彼処の全てを掌握していないらしいしな

俺はナターシャとイーリの二人に問い掛けた

「ナターシャ、イーリ……俺の『配属先』について、何か知っているか？」

するとナターシャは言う

「……ジェイも知ってるわよね？　昔、アメリカは存在する軍事施設、基地の数以上の国防費を出費していた事は」

「あぁ、お陰様で世間では『軍は軍事施設、基地の【便所】に莫大な費用を掛けている』なんて、馬鹿な噂が広まったよな？」

もしも、それが事実なら……究極の税金の無駄使いだな、オイ……

「ジェシーの『配属先』の名称は……【第十六国防戦略拠点（イレイズド）】――『地図にない基地』よ」

「『地図にない基地（イレイズド）』？」

するとナターシャは言う

「言葉通り、地図に無い基地よ。知っている者も僅か……所謂、【秘密基地】って所かしら？」

「成る程……年間、消え行く莫大な国防費の謎の答えはソレって訳か……だが、随分と凄い所が配属先になったな……謂わば、【軍事機密】に指定されている場所だろ？」

「まぁ、ジェシーが【世界初の男性ＩＳ操縦者】である以上、其処しか配属先が無いんじゃない？」

「俺はてっきり、あの『Ａｒｅａ　５１』で徹底的に研究されると思っていたがな……」

そんな会話を続けながら、俺らを乗せた輸送機は『配属先』――【地図にない基地（イレイズド）】へと向かい、飛行していった

――――――――

更に輸送機で揺れを堪能する羽目となり、数時間……

俺らを載せた輸送機は目的地である『配属先』――【地図にない基地（イレイズド）】へと到着していた

基地自体は、そんなに他の基地とは変わりないのだろう――『地図に存在しない事』と『ＩＳとそれらに関連する設備が充実している事』を除けば……

ある程度、基地を案内（案内役（ガイド）はナターシャとイーリの二人なのだが…）された。俺の専用機の一つ――【ＣＦＡ－４４　Ｎｏｓｆｅｒａｔｕ】はＩＳの扱いに特化した整備士たちにより、丁重に保管されているらしい

まぁ、新顔（と言っても、今では知らぬ者は居ない程の有名人だが）が現れた為、それなりに【一悶着】はあった

――――――

今から僅か、数十分前の出来事だが……此処へと到着した時だ。俺はナターシャとイーリにある事を訪ねた

「なぁ、此処の責任者ってのは誰なんだ？　一応は新顔として、挨拶くらいはしとかないとな」

すると二人は……如何にも不快感を露わとした嫌そうな表情を浮かべる

「……何か、悪い事でも言ったか？」

「責任者……と言うよりは……」

「寧ろ、【足手まとい】な奴だよ……」

余程、その【責任者】には良い印象が無いのかは知らないが……イーリの奴、素が現れている

以前、ドイツの街へと繰り出した際にイーリの奴をナンパしようと試みた【勇敢な（またの名を愚かな）男たち】との会話の際、『寝ぼけた事を言ってんじゃねぇよ。テメェ等と付き合う暇なんざ、コンマ一秒たりとも無いんだよ』と一喝と共にＩＳの部分展開で哀れにも、イーリの奴に吹き飛ばされたなぁ……（まぁ、別にイーリの口調には驚きはしなかった。『ファントム隊』にも口を開けば、罵声が飛び出る奴は居たからな）

「足手まとい……？」

「……名前は『スカーレット・ヴァレンタイン』、階級は【少佐】此処の責任を任されてるけど、実質は彼の【優秀過ぎる部下】たちが役目を果たしているわ」

「あの野郎、親の七光りだか何だかは知らないけど、自分が責任者っていう立場に居るから我が物顔で基地を歩き回る事くらいしかしてないんだよ

基地の管理なんざ、全て部下に丸投げだよ」

「野郎って事は男って訳な……同じ男としても耳が痛い話だな、そりゃ……

というよりも、素が丸出しだぞ、イーリ？」

「此処はアタシの古巣のような場所。だから、素が出るのも当たり前なんだよ、ジェシー？

それとも、今までの方がジェシーの好みかしら？」

「好みも何も、どちらの口調でもお前はお前だろ？

口調が変わる位で一々、好意が変わる程、俺も小っぽけな奴では無いんでな」

するとイーリは若干、顔を赤らめながら何やら呟き始めた。それに比例する様に不機嫌に頬を膨らませるナターシャ……

……本当に俺、何か変な事を言ったか？

すると俺らの前に一人の男が現れた

「やぁ、ナターシャにイーリ！！　久々だなぁ……キミたちが居なくて、私は若干の寂しさを感じていたよ」

「……誰だ、コイツ…？」

俺はイーリの耳に小声で言う

「……今、説明していた奴…」

俺は改めて、その男へと視線を向ける

男の容姿は短く切りそろえた茶髪、体格もしっかりと鍛えられており、顔立ちも悪くない――寧ろ、同性の俺から見ても結構な男前だ……やたらと馴れ馴れしい態度を除けばな…

俺の目の前には、かなり鬱陶しそうな表情のナターシャ、そのナターシャの態度に気付きもせず、話しかけている男――『スカーレット・ヴァレンタイン少佐』の姿だった

「ナターシャ……キミに会えて、本当に嬉しい限りだよ私にとって、キミは太陽に匹敵する程に眩しい存在なんだからねぇ？」

「……えぇ、それは光栄だわ……本当に……」

するとイーリは俺に小声で言う

「ナターシャに気があるんだよ、下心見え見えの上にキザったらしい事、この上ないんだっての……」

「……そりゃ、同情するよ…」

すると『スカーレット・ヴァレンタイン少佐』は、ようやく俺に気付いたのか……此方へと近付いてくる

「……あぁ、キミが世間を賑わせている傭兵か……」

何処か、敵意が込められた見下す様な視線を俺へと向ける

「お会いできて光栄です……『ジェイソン・シーガー』、元海軍所属のパイロットであり、最終階級は【大尉】であります」

俺は敬礼と共に簡易的な自己紹介をする

「キミの話は聞いているよ、大尉……ナターシャとは【恋人】だったそうだと聞いているよ……？」

「昔の事です。今の私は傭兵として、国連に雇われて此処へと配属された只の兵士ですので……」

「ふむ、身の程をわきまえた当然の態度だな……言っておくが、此処での君の上官はこの【私】だ

君が世間で、どれほど持て囃されようが此処では関係の無い事……

『常に忠誠を』……それが此処のモットーであり、【陸軍】に所属していた私の信条でもある。此処で上手くやっていきたいのなら、それをよく覚えておく事だな、大尉？」

この手の奴は面倒だ、自分の気に入らない奴には理不尽なまでの不遇を与えて、困惑する様を喜びながら眺める……

それに【陸軍】で『常に忠誠を』……？

ナターシャの方へと目を向ければ、俯きながら握り締めた拳は余程の力が込められているのか、指先は白くなっていた。それは俺の隣に居るイーリも同様だった

「全く、ナターシャも昔は困った所があった様だな？

高々、少しばかり腕の立つ飛ぶ事しか脳の無い海軍パイロットを恋人にするとは……」

嗚呼……どうやら長時間、輸送機に缶詰めになっていた俺もストレスで我慢の限界の様だな……

俺は溜め息を吐き出して一一一目の前に立つ【少佐殿】の股ぐらを『蹴り上げた』

悲鳴にならない様な声を絞り出し、少佐殿は蹴り上げられた股間を押さえて無様に地面へと倒れ込む

俺は少佐殿に向かい、こう言った

「少佐殿、聞こえますか？　まぁ、聞こえてなくても良いけどな……勘違いをしてる事に気付いてない様だから教えときますけど……『常に忠誠を』は【陸軍】ではなく【海兵隊】のモットーだよ

……それにな、これが一番にマズかったな……俺の事を貶すのは幾らでも構わないが、仲間や海軍の悪口だけは勘弁ならないんだよ」

俺は地面でのたうち回る少佐殿を跨ぎ、基地内へと歩を進めた

その際、基地内で一部始終を目撃していた兵士たちから拍手を受けたのは気のせいだろう

――――――――

「それにしても、さっきのは本当に……凄く、ジェイを抱き締めたくなったわぁ……」

そう言いながら、上機嫌そうな表情で俺の右腕へと抱き付くナターシャ……

「本当、見てるだけでスカッとしたぜ、ジェシー？」

ナターシャと同様、上機嫌そうな表情を浮かべて左腕へと抱き付くイーリ

コイツ、完全に素を晒してるよな……まぁ、口調が荒い女も【守備範囲】と言えば、そうなんだがな……

そんな呆けた考えを思いながら、俺は言う

「さっき、言っただろ？俺の事を悪く言うのは構わないが……仲間や海軍の事だけは勘弁ならないんだよ」

「……でも、そこは【仲間】じゃなくて『ナターシャ』って言って欲しかったわ……」

若しくは【俺の女】でも可、と付け足しながら、ナターシャは言う

「それは昔の話だろ？　また、そう呼ばれたかったら……早い所、俺を振り向かせるんだな」

そんな会話を続けていると、背後から荒々しい声が飛んできた

「き、貴様ぁ……！」

振り向かえれば、片手で股間を押さえて鬼の様な形相で俺を睨む【少佐殿】が居た。驚いたな、もう立って歩けるとは……少なくとも、見掛け倒しの肉体では無い訳か……（まぁ、蹴り上げた【場所】は中々、鍛える事が難しいんだが）

「上官に対して、随分と舐めた真似をしてくれたなぁ……！！

たかが、傭兵風情が……処罰は免れんぞ…！」

すると、一人の兵士が俺らの間に割り込んできた。何やら、二つばかりの書類を腕に抱えて……

「ヴァレンタイン少佐、お話しの最中で申し訳ありませんが、少佐宛に本部から通告書が届きましたので……

それと、ジェイソン・シーガー大尉にも通告書が……」

兵士は俺と少佐にそれぞれの書類を手渡す

書類を手渡した兵士は、それぞれの書類の内容を読み上げる。先ずは俺の方の様だ

『ジェイソン・シーガー大尉、貴官はドイツでの都市防空、及び無人ＩＳ機の撃墜の結果、過去に例のない大惨事を防いだ貴官の勇敢なる行動と判断力、成績を鑑みた結果……

国連の命により、貴官を大尉からの【二階級昇進】――『中佐』へと任命する。尚、貴官にはこの命を拒否する権限は無い』

二階級昇進……俺が【中佐】に…？

続けて、兵士は少佐へと向き直ると、少佐宛の通告書を読み上げる

『スカーレット・ヴァレンタイン少佐、貴官に対する基地内での不評、貴官の【責任者】としての職務態度を内密に監査した結果……

貴官は【責任者】としての責任能力を含む技量が不足している面を鑑みて、貴官を【第十六国防戦略拠点】――『地図にない基地（イレイズド）』での役職――【責任者】を解任、貴官は極東部に位置する【軍事観測所】へと異動を命ずる』

少佐は唖然とした表情を浮かべ、此処での役職の解任と人事異動の通告書を見ていた

「あらあら、一気に出世しちゃったじゃない？

『ジェイソン・シーガー中佐』殿？」

「それに比べて、あっちはお払い箱って訳か。イイ気味だな、クソッタレめ」

それは、もうこの上ない程の上機嫌そうな表情を浮かべる二人……

随分と嫌われているみたいだな、少佐殿はよ…

「……【中佐】って、フランキーと同格の階級だろ？　出世には興味が無いんだがなぁ……」

寧ろ、大尉のままで良かったんだが……、と俺は言葉を付け足す

「ジェシーは、これから結成する部隊――【ＴＡＳＫ　ＦＯＲＣＥ】の隊長になるんだぞ？

大尉なんて中途半端な階級じゃあ、格好がつかないだろ？」

「寧ろ、中佐の方が中途半端に思えるがな……？」

俺は通告書を手に固まったままの少佐殿を横目に溜め息を吐き出した

因みにこの日以降、基地での俺の評判は鰻登りとなった様だ。大半

の理由は、翌日から異動された少佐殿の一件が理由らしい

【キャラ&ＩＳ（機体）紹介】（前書き）

簡易的なキャラとＩＳ（機体）の紹介です

ＩＳに関しては、後の話にて掲載する予定です

【キャラ&ＩＳ（機体）紹介】

『ジェイソン・シーガー』

本作の主人公であり、転生者

現段階での年齢は、２８歳。容姿のイメージは『ＡＣＥ　ＣＯＭＢＡＴ　６』に登場する敵国のエースパイロット【イリヤ・パステルナーク少佐】を若干、若くした感じです

転生者としての特殊能力－－－『超人的な身体能力』、『あらゆる乗り物の操縦方法と驚異的な操縦技術』、『比類無き知識』の三つを所持している

十代の頃、能力を使いこなす為にサーフィンやバイクなどの『エクストリーム（極限）ゲーム』の大会に次々と参加、世界大会での総

合優勝を果たした実績を持つ

１８歳で軍へ入隊、二年後の２０歳で『Ｔｏｐ　Ｇｕｎ』を主席で卒業、大尉となった２１歳の時、『第３１４戦闘攻撃飛行中隊　【ファントム隊】』の隊長へと就任

常に余裕を失わず、如何なる絶望的状況下においても仲間を勝利へと導く事から、『生粋のエース』―――【ＡＣＥ　ＯＦ　ＡＣＥ】と仲間からは呼ばれ、隊長を務めた『ファントム隊』の名と共に各国へと知らしめた

ファントム隊での戦歴は、当時の各国でＮＯ．１の出撃率と任務成功率を誇り、正に世界屈指の精鋭部隊として、数々の激戦の最前線にて活動していた

また、転生者としての特殊能力もあり、これまでに『一度も被弾した事が無い』という超人的な操縦技術を誇るエース・パイロットとしても有名

ファントム隊を率いる様になり、四年後の２５歳の時に『白騎士事件』にて、仲間と友軍の撤退の時間稼ぎとして、白騎士と交戦。僅かな間だが、互角に対抗した

その後、【撤退】という独断による処罰（白騎士に惨敗した軍の上層部たちの八つ当たりを含む）により、これまでの軍歴を剥奪され、不名誉除隊となる

その後、世界中を旅して回り、日本へと渡る、後に『白騎士』こと最強のＩＳ操縦者【織斑　千冬】とその弟【織斑　一夏】と出会う事になる

所謂、器の大きい性格の持ち主であり、周りからは『兄貴分的存在』となっている。また、多くの女性と親密な関係を持つが、女ったらしという訳では無く本人曰わく『信条である【来るものは拒まず、去るものは追わず】の結果』らしい

趣味は、鍛錬とバイクと車（特に年代物（クラシック）を好む）

現段階での近況報告では、ドイツで一年間の教導にて、『織斑　千冬』の補佐として活動。また、国際ＩＳ委員会からの命により、国際ＩＳ委員会－－－【国連】所属のフリー・パイロット（傭兵）と任命される

また、同時期にドイツを襲った試作兵器【スタウロス】と【無人ＩＳ機】を撃墜した事により、再び【ＡＣＥ　ＯＦ　ＡＣＥ】の名と世界初の【男性ＩＳ操縦者】として世間を賑わせる事となる

－－－－－－－

【ＣＦＡ－４４　Ｎｏｓｆｅｒａｔｕ】
（元ネタはそのまま、『ＡＣＥ　ＣＯＭＢＡＴ　６』に登場する架空機【ＣＦＡ－４４　Ｎｏｓｆｅｒａｔｕ】より）

ドイツとアメリカの二国共同開発により、開発された【ＩＳ搭載戦闘機】

従来の戦闘機とは比較できなく、現時点にて存在するＩＳの中でもトップクラスにあたる性能を誇る【試作機】

元々は、ジェイソンが『次世代型のステルス艦上戦闘機』として設計したモノをＩＳとその技術を応用する事で、完成させた

全方位型多目的ミサイル――【ＡＤＭＭ】や航空機用の試作段階である兵器――【ＥＭＬ】、【３０ｍｍ航空機関砲】などの武装を搭載、またＩＳ技術の応用により可能となった『フル・ブレーキング機能』など【高性能】という言葉が生易しく感じる程の高い性能を誇る

しかし、あまりの高性能さにより、設計者のジェイソン以外は誰も使いこなせないという所謂、ジェイソンの専用機となっている

機体カラーはメタリック・ブラック

【ＩＳ紹介】

【荒くれ者の魔銀（ヴォルフ・ガング・シルバー）】

元々は【ＣＦＡ－４４】専用のパイロット・スーツとして開発された強化服だが、現在ではジェイソンの専用機となっている

基本的な（【絶対防御】を除く）センサー類は他のＩＳと同様に内蔵しているが、装着者の身体能力の強化を重視している為、『飛ぶ』という機能は無い（裏返せば、『走る』という機能は全ＩＳ機で随一の性能を誇る）

地上での高機動を主体とした接近戦に特化したＩＳである

外見は機動性を重視した軽装甲（ライト・アーマー）仕様の全身装甲（外見イメージは『ＣＲＩＳＩＳ　２』というゲームに登場する【ナノ・スーツ】を想像してください）

【武装】

『ＪＥＴ　ＲＩＰＰＥＲ（ジェット・リッパー）』

両脚部に内蔵した鎖状の武装、鎖は【チェーン・ソー】と同じモノであり、相手の捕縛と広範囲での攻撃を目的としている。また、相手を斬る事では無く【削る】事を重視しており、攻撃の際には相手の【絶対防御】に使用されるエネルギーを削る事が可能

他に両腕部と両脚部に合計、４機の小型推進機（スラスター）を内蔵、移動と攻撃のスピードを向上させている

――――――

【フランチェスカ・アルマ】

通称『フランキー』

女性ドイツ軍人であり、階級は【中佐】
年齢は２４歳、ラウラたち『黒ウサギ隊』が駐在する基地での全権を任されている

容姿は艶やかな黒髪、左目を過去に負傷し眼帯を着けており、左目部分を中心に残る大きな切創が特徴。また、傷痕を差し引いても『織斑　千冬』や『篠ノ之　束』たちと引けを取らぬ美貌を誇る

性格は常に冷静、相手が如何なる人物だろうと物怖じする事の無い『男前な性格』

かつては精鋭戦闘機部隊－－－【スレイプニル】の隊長を務めていたが『白騎士事件』後に部隊は解体、自身は基地の最高責任者として活動していた

戦闘機乗りの腕前はドイツ随一を誇り、エース・パイロットとして活躍していた。当時の愛機は『Ｓｕ－３３　Ｆｌａｎｋｅｒ』

ジェイソンとの初対面は『白騎士事件』だったが、後に『織斑　千冬』と共に一年間の教官を務める為、ドイツへとやって来たジェイソンと改めて再会を交わす

『白騎士事件』にて、ジェイソンの戦闘機乗りとしての腕前と仲間を護る為、自身の犠牲を厭わない性格を惚れ込んでおり、他の女性陣と同様、ジェイソンに好意を抱いている

現在は、後にジェイソンが指揮する事となる『ＩＳ編成戦闘機部隊』――【ＴＡＳＫ　ＦＯＲＣＥ】の隊員として任命された（だが、本人は自身の後任者捜しの為、まだ正式には隊員となっていない）

【キャラ&ＩＳ（機体）紹介】（後書き）

簡易的な紹介ですので、あまり詳しくは書いておりませんが『主人公』であるジェイソンやＩＳの容姿（外見）をイメージし易くできる様になれば、幸いです

一　【七人の候補】　一

俺の思わぬ出世から二日が過ぎた。あの少佐殿は通告書を受け取った翌日、人事異動によって極東部にあるという【軍事観測所】とやらに飛ばされていった

ナターシャやイーリ曰わく『彼（あの野郎）でもペンギンや野生動物となら、上手くやっていけるでしょう（だろう）』らしい

思わぬ出世――【二階級昇進】により、大尉から中佐へとなった俺の基地内での呼び名は【中佐】と定着している。余程、あの少佐殿は好かれていなかった様で、あの時の一部始終を見ていた数名の兵士たちからその日の内に僅か、数時間の内で基地全体へと広まっていった（まぁ、上官の股ぐらを蹴り上げる奴なんざ、滅多に居ないからだろう）

……話を戻すとしよう。今、俺は基地内にある会議室を借り、ある資料を机の上に広げていた

その資料の内容はかつて、俺が率いていた部隊――『ファントム隊』のメンバー、１１人の詳細だった

俺は国連から、『対亡国機業専門』の部隊――ＩＳ編成戦闘機部隊【ＴＡＳＫ　ＦＯＲＣＥ】の結成を任された。ＩＳ操縦者に関しては米国代表のイーリ、同じく米国のテスト操縦者であるナターシャが担当を務め、俺は戦闘機乗りたちの担当となった訳だ

部隊メンバーに関しては、既にパイロットで俺とフランキー、ＩＳ操縦者はイーリ、ナターシャ、また正式にでは無いが千冬の５人が決まっていた

メンバー候補としては、ドイツの『黒ウサギ隊』の名も挙がったのだが……実力は確かながらもまだ、実戦経験が少ない為に却下となった。少なくとも、ナターシャたちは一国を代表とする操縦者である以上、高い実力と経験を兼ね備えている。それに俺とフランキー、戦闘機乗りとしては言わずとも、数々の修羅場を潜り抜けている以上、経験は誰よりも豊富だろう（修羅場を潜り抜けている以上、当たり前だが実力もあるからな）

そこで、俺は残る『ファントム隊』の１１人へと目を着けた訳だ。

だが、全員が俺が除隊となって直ぐに軍を辞めた為に現在の消息は不明となっていた

「さて……誰から始めるんだ、ジェシー？」

机の上に広げていた資料を手に取り、俺へと視線を向けるイーリ

「あー……先ず、一番に居所の分かる奴にするか……」

俺は広げていた資料の内から、一人目の資料を手に取る

「『カーター・ウィンストン』、ファントム隊でのＮＯ．５だった奴だ。ＴＡＣネームは【ＳＫＹ　ＫＩＤ】

コイツが、よく喋る男でな……」

「あぁ、カーターね……海軍内では【コンビニ】なんて異名で、呼ばれていたわよね？」

苦笑を浮かべながら、ナターシャは言う

「……【コンビニ】？」

「【２４時間ノンストップ】で喋り続ける奴でな……よくぞ、そこまで喋れると思ったら、兵役前はラジオＤＪをやっていたらしい」

「あぁ……そりゃあ、喋る訳だ……で、ソイツは何処に居るのかは分かるのかよ？」

【ＳＫＹ　ＫＩＤ】――『カーター・ウィンストン』の資料を指先でつまみながら、イーリは言う

「カーターは一番、見つかりやすい……『コイツ』を使えばな」

俺は基地内にある内、借りてきた一つのラジオを机の上へと置く。
ラジオの電源を入れ、各局のチャンネルへと回していく

暫くすると、ラジオからは一昔前の軽快なロック調の音楽が流れ出す

『ヘイヘイヘイッ！！　今日も清々しい日を送っているかい、諸君？

さぁ、このラジオの名物ＤＪであり、元戦闘機乗りである俺様――『カーター・ウィンストン』がハイテンションでお送りする【ＳＫＹ　ＢＯＹＳ】が始まるぜぇッ！！

このラジオは、ＩＳの影響で『女尊男卑』となった世界で、肩身の狭い思いをしている全ての男たちを応援する番組だ！！

おおっとッ、言い忘れてたが俺は女性差別する気は全く無いぜ？

この番組――【ＳＫＹ　ＢＯＹＳ】は『男女平等』と『ＬＯＶＥ＆ＰＥＡＣＥ』をモットーに……』

開始早々、息をつかせぬ勢いで喋り続けるラジオＤＪ――『カーター・ウィンストン』

相変わらず、よく喋る奴だな……寧ろ、昔よりも磨きが掛かっているじゃないか？

『さぁ、番組を始める前に何時もの【合い言葉】をキメてみようぜ？』

ラジオから流れるカーターの言葉と共に俺とナターシャは口を揃え、カーターの口癖ーーー【合い言葉】を口にする

『「「天使とダンスでもしてなッ！！」」』

「……何だ、そりゃ……？」

キョトンとした表情を浮かべながらイーリは呟く

するとナターシャは、苦笑を浮かべながら言う

「カーターの口癖よ、彼は戦闘機の事を【天使】と称していてね。何かと、この言葉をよく言うのよ」

「まぁ、『白騎士事件』以来はＩＳを指しているんだがな……」

俺らは再び、ラジオへと耳を傾けた

『さぁ、番組も盛り上がってきた所でお知らせだ。この番組――【ＳＫＹ　ＢＯＹＳ】は何時でもリスナーからの質問や要望を待ってるぜ？

この番組への番号は……」

俺は携帯を取り出すと、ラジオから流れる番組への番号を打ち込む。暫くするとラジオからは、こう流れた

『おおっと、早速の電話だ。はいはい、こちら【ＳＫＹ　ＢＯＹＳ】の名物ＤＪ――『カーター・ウィンストン』だ』

「相変わらず、絶好調の様子だな？」

『た、隊長ぉッ！？　何で、どうして、マジかよッ！！？』

「落ち着け、【名物ＤＪ】さんよ……詳しくは言えないが……【ＳＫＹ　ＫＩＤ】に戻る気はあるか？」

すると少しの間、沈黙が続き……カーターは言った

『勿論ッスよ、隊長ッ！！

俺は海軍名物－－－【パイロットＤＪ】ッスよ？　それに隊長の誘いを断る訳が無いじゃないッスかぁッ！！』

「期待してるぞ？　後で迎えを寄越すから、それまでは……【天使とダンスでもしてな】」

そう言って、俺は携帯の通話を切る

『リスナーの諸君、此処で重大なお知らせだ。この番組－－－【ＳＫＹ　ＢＯＹＳ】は暫くの間、お休みする事になっちまった

何故なら、俺は戦闘機乗り――【空の男】だからさ。俺の信条でもある『ＬＯＶＥ＆ＰＥＡＣＥ』の為にも、どうやらもう一度、空へと戻らなければならないみたいだ

しかし、心配無かれッ！！　俺様は空から、リスナー諸君を応援するぜ？　それでは【ＰＥＡＣＥ】！！』

ラジオからは再び、軽快なロック調の曲が流れ出す

「取り敢えず、一人目は確保したわね？」

「あぁ、先ずは一人……だが、此処からが面倒だぞ？」

俺は残る１０人の資料へと視線を向けた

「次はコイツだ、『リチャード・ウォルター』

ファントム隊でのＮＯ．７を務めた奴だ。ＴＡＣネームは【ｉＰｏｄ】」

「……【ｉＰｏｄ】？」

「彼は海軍史上初、『ＭＰ３　Ｐｌａｙｅｒ』と一緒に空を飛んだ男よ、イーリ？

どんな時も、携帯音楽器具を手放さない位の音楽好きだったわ……それこそ、食事から寝る時もね」

「……もしかして、その当時のＴＡＣネームは【ＭＰ３】か？」

「イイ勘してるな、イーリ？　大正解だ……まぁ、『ｉＰｏｄ』が発売されると同時にアイツのＴＡＣネームも【ｉＰｏｄ】になったがな」

「筋金入りの音楽バカってのは、よく理解出来たけど……ソイツが何処に居るのか、分かるのか？」

イーリは【ｉＰｏｄ】こと『リチャード・ウォルター』の資料を指差しながら、言う

「彼って確か、Ｌ．Ａ．出身よね、ジェイ？」

「……アイツの音楽バカを考えるなら……Ｌ．Ａ．で人気のクラブを捜せば、見付かるだろ？」

以前、アイツはクラブのＤＪという職業に興味を持っていたからな

「取り敢えず、二人目は目星が着いたわね……次は……【Ｖｉｐｅｒ（毒蛇）】ね」

苦笑を浮かべながら、三人目となる候補の資料を手に取り、眺めるナターシャ

「本名は『ハンズ・ラファティ』、ファントム隊ＮＯ．９だった男だが……ファントム隊の中で随一の女好きでな……」

俺はナターシャから資料を受け取り、資料にある写真をイーリに見せる

「……冗談だろ？　【女】にしか見えないぜ、しかもモデル並みの……」

「アイツは幼い外見と女顔を兼ね備えていてな。軍隊に居る以上、鍛えてはいるが体つきも細いから、女の格好をすれば、誰も男だって気付かないだろうよ……

だが、見てくれに騙されるなよ？　アイツは狙った獲物（女）は決して逃さないからな」

「ソイツ、女の敵だな？」

「あら、ハンズはやたらと手出しはしないわよ？

彼氏、または夫持ちの女性には一切、手を出す事は無かったわ。それに誰かに好意を持ってる人もね」

「妙な分別をつける奴でな、まぁ……アイツの事だ。捜すとすれば、女の集まる様な所だろう」

俺は四人目となる候補一一一ファントム隊、ＮＯ．２の資料を取る

「次は一体、誰だ？　お喋り野郎に音楽バカ、女負けの女顔で女ったらし……これだけでも、随分と【濃い】メンツだぜ？」

「まぁ、ファントム隊のメンバーってのは【癖モノ揃い】だからな……

だが、次は今までの三人に比べればマトモな部類だ。ファントム隊、ＮＯ．２『ショーン・トバイアス』

ＴＡＣネームは【Ｂａｒｏｎ（男爵）】だ」

「彼は中々、面白い経歴の持ち主よ。幼い頃、貧民街（スラム）での路上生活で育っていたけど……ある日、道端で拾った宝くじで巨額の富を得たの

家も無い貧しい生活から一気に大逆転を果たした幸運の持ち主よ。一度、ショーンに見せて貰ったけど……その時の宝くじを御守り代わりに肌身離さず、身に着けていたわ」

「そして、一切の不自由無い暮らしに退屈した奴は自ら、スリルを求めて軍へと入隊した訳だ。パイロットの腕前はさることながら、ギャンブルの腕も中々のモノだったな」

一度、まだファントム隊があった頃に休暇でメンバー全員でラスベガスへと訪れた際はたまげたモノだった。アイツはそこらで拾ったコイン一枚から、一気に数千万まで稼ぎ出したからな

まぁ、その時にアイツは笑いながら『お陰様で、あちこちのカジノで【要注意人物（ＢＬＡＣＫ　ＬＩＳＴ）】をされて、出入り禁止にされてますよ』なんて言っていたな……

「って事は金持ちだから、見つけやすいだろ？　ハリウッド辺りの豪邸を片っ端から調べ上げれば……」

「いや、アイツはラスベガスにある幾つかのホテルの最上階一一一『ペントハウス』を買い取っていてな

恐らくはラスベガス中のペントハウスを捜せば、見付かるだろう」

「……これだから、金持ちは嫌なんだよ……全く…」

「あら、ショーンは違う部類のお金持ちよ？　彼、自分が貧民街出身だから、毎年に孤児院や赤十字団体に多額の寄付をしているわ」

「……訂正するわ、ソイツって良い奴だな？」

「ファントム隊でも良心的存在でな、主に他の隊員（メンバー）が暴走しかけた時のブレーキ役でもあるんだよ」

俺は五人目の資料へと手を伸ばす

「五人目の候補は『バーンズ・アーチャー』――通称【B．A．】ファントム隊NO．4　TACネーム【Iron　Hide（鋼鉄の伯爵）】だ」

「昔からだけれど……とてもじゃないけど、軍人には見えない顔立ちよね……？」

苦笑を浮かべながら、【B．A．】の資料を眺めるナターシャ。その資料にある顔写真――軍人というよりも、かなりの修羅場と場数を踏んだマフィアの如く【凶悪そうな】人相が写っていた

「……本当に軍人か、コイツ？

アルカトラズ州刑務所から脱獄してきた様な面（ツラ）だろ、道行く老若男女が一斉に逃げ出しちまうぜ？」

写真を眺め、イーリは言う

「見た目とのギャップってのが激しい奴でな……殆ど無口だが過去に一度の犯罪歴は無く、特技が料理っていう家庭的な男だ

だが、地上攻撃と近接地上支援の専門家（スペシャリスト）で、アイツの愛機ーーー『A－10A Thunderbolt ?』が通り過ぎた後は、何一つ残らないって言われている位だ」

「OK、それでソイツの所在って分かるのか、ジェシー？」

「アイツは一応、自分の顔が……まぁ、【普通】じゃないってのは充分に理解してるからな……

あまり、他の人間と関わらない仕事を選ぶだろう」

ーーーーーーーー

所在地：【マイアミ】

『スパニッシュ・パーム葬儀社』ーーー【処置室】

葬儀前に遺体に施される防腐などの『処置』を施すこの一室の前で二人の白衣を纏った男性が口論を繰り広げていた

口論の発端は、とある一通の電話が掛かってきた事からだった。電話の内容自体は大した事では無かったーーー此処で働く一人の男性を尋ねたモノだった

しかし、その電話主が目当てとしている【男性】が問題だった

「お前が行けって、電話に出たのはお前だろッ！？」

「嫌だよ、俺は【あの人】が苦手なんだってッ！！」

「誰だって【アイツ】を苦手と思わない奴なんざ、居ねぇってッ！！　第一、アイツが話す所なんて一回も見た事が無いのに何処のどいつが電話なんてしたんだよ？」

電話が掛かり、既に十分が経過していたが男たちは未だに口論を続けていた。やがて、キリのない口論に痺れを切らしたのか、二人は『処置室』と書かれたタグをぶら下げた鋼鉄製の扉を押し開ける

扉を開ければ、奥には二人を背にして、その大柄な身体の前に位置する処置台に乗せられた遺体――この後、埋葬される予定で恐らく、遺族との最後の別れを迎える事になる遺体の身なりを整えている人物が居た

「あの、お電話ですッ！！」

扉から頭だけを覗かせた二人の内、一人がその人物へと声を掛ける

その人物は後ろへと振り返った――大柄で白衣を纏っていても分かる程、鍛え上げられた屈強な肉体、男の上腕部は丸太と匹敵するのではないか？、そう思わせる程に肥大した筋肉をしていた

髪は綺麗に剃り上げられており、全身の肌は【黒人】の証とも言える黒い肌をしていて鋭い眼光が、声を掛けた二人を見据える。太い首にぶら下げた『認識票』が男の前歴を物語っていた

男は処置室に備え付けられた電話へと歩み寄り、受話器を取る

『あー……【B．A．】か？』

【B．A．】と呼ばれた男――『バーンズ・アーチャー』は受話器へと視線を向ける。何故なら、電話主はかつて、自分が在籍していた部隊の隊長――その兄貴的な人柄で老若男女問わず、全ての仲間たちに慕われた男だったからだ

『もし、そうなら……取り敢えず、ボタンを押せ』

暫しの間、部隊の頃を思い出していた彼は――その大きな指先で電話のボタンを押し込んだ

――――――

五人目となるB．A．の奴までは確保できるとしても……

残る六人が【問題】だった

――――――

「あぁ、そうだ。『フランク・ゴードン』は居るか？」

『あぁ、ゴードンの奴は死んだよ。どっかの店を叩いて、運悪く店主に撃ち殺されたらしい』

「えぇ、『マックス・エヴァンズ』が何処に居るかをご存知でしょうか？」

『マックスは『フランク・ゴードン』ってバカとメキシコに行ったわよ。あと、貸した金をさっさと返せって言っといて頂戴』

「そうだよ、アタシは『ジミー・オーリス』と『パトリック・シュタイナー』って二人の野郎が今、現在で何処に居るのかを聞いてんだよ？」

『二人共、今も仲良く同じ刑務所に入ってますよ。確か、過剰防衛とかの罪状で五年の刑期だって聞いてますけれども？』

ーーーーーーーー

「四人共、消息は不明みたいね？」

「しかも、死んだって言われているのにメキシコに居るって言われている奴だって居る始末だぜ？　どれが本当なのか、分かりゃあしねぇ……」

苦笑を浮かべるナターシャとため息を盛大に吐き出すイーリを横目に残る二人の資料へと俺は視線を向けた

「残るは……この二人だな…」

するとナターシャは俺の横から資料を覗き見た

「……【Ｒｅａｐｅｒ（死神）】と【Ｒａｔｃｈｅｔ】？　この二人は……ちょっと、問題なんじゃないの？」

「だが、腕は二人共、ファントム隊でもトップクラスだ。その上、

メンバーはもう他に居ない」

「……どうなっても知らないわよ？」

「……どんな奴らなんだ、ジェシー？」

「ファントム隊のＮＯ．３　ＴＡＣネーム【Ｒｅａｐｅｒ】本名は『クリスタ・ネコルヴィッチ』――通称【クリス】」

「ファントム隊の紅一点ね。同性の私から見ても美人よ、彼女は」

「但し、美人の前に『残念な』が付くがな……」

「……『残念な』？」

「口を開けば、罵声しか出ない様な女だよ。口の悪さもファントム隊でトップ、その上で【戦闘狂】兼【スピード狂】だ」

「そりゃ、スゲェ……」

「昔、彼女に……そのセクハラ紛いな事をした上官が居たんだけどね……

彼女、その上官をこれでもかって位の罵声を浴びせて除隊へと追い込んだ上、自殺寸前にまで追い込んだ位に気の強い女性（ヒト）なの」

「いや、気が強いってレベルじゃないよな、普通に考えてよ……」

最早、引きつった表情を浮かべるイーリ

「因みにクリスのＴＡＣネーム【Ｒｅａｐｅｒ】の由来はそのままだ。アイツの撃墜率は常に１００％　その上、スピード狂だから標的を撃墜するまでは、何処までも追いかけてくる様子から着いた名だ

端から見ても、狙われた相手から見ても【死神】としか表現できないからな」

「おっかねぇ女、敵に回したく無い奴ＮＯ．１だな？」

「まぁ、スピード狂のアイツだ。ロシア出身だが、育ちはシアトルでな

まぁ、北西部辺りのハイウェイで大型バイクをカッ飛ばしている女なんざ、アイツしか居ないだろ」

あちこちの州でスピード違反を含む交通違反を繰り返しているって、よく言っていたからな……

「最後は【Ｒａｔｃｈｅｔ】ね、ファントム隊の１２番機に乗っていたわ」

「本名は『ライリー・オドネル』　パイロットは勿論、メカニックとしての腕前も中々だ

ただ……昔からだが【情緒不安定】な面があってな……」

「【情緒不安定】って大丈夫なのかよ、ソイツ？」

「謂わば、心を病んでいるってヤツだな。まぁ、鬱病とは違って【常識】ってモノを考えられないだけだ」

「そうねぇ……空軍に私が在籍してた時も、彼の噂は耐えなかったわ……」

「飛行中の状態から、エンジンを切っての急降下や地面スレスレの背面飛行を笑いながら、平然とやる奴だ。しかし、アイツに飛ばせない機体は存在しない――所謂、天性としてのパイロットの才能を持っている」

「今までのメンツで、最もブッ飛んだ奴だな、オイ……」

「……資料によれば、彼って今は【ドイツ】に居るらしいわよ？また、とんぼ返りする羽目になりそうね……？」

また、あの缶詰め地獄を味わうのかよ……

「……フランキーに連絡を取ってくれ…

どうせなら、アイツも拾っていくぞ」

―【最後の一人】―

メンバー集めから2日が過ぎた。一応は候補――【ＳＫＹ　ＫＩＤ】、【ｉＰｏｄ】、【Ｖｉｐｅｒ】、【Ｂａｒｏｎ】、【Ｉｒｏｎ　Ｈｉｄｅ】、【Ｒｅａｐｅｒ】、【Ｒａｔｃｈｅｔ】の七人が決まった

俺らは、ドイツに居るフランキーに連絡を取り、ドイツに居ると言われている【Ｒａｔｃｈｅｔ】――『ライリー・オドネル』の所在を確認してもらった。フランキーも、どうやら【後任者】の目処が着いた様子で此方へと向かう予定だったらしく、手間が省けたと言っていた

――――――

「ジェシー、一応は六人の候補、全員を確保したって連絡が来たぜ？」

「そうか、それで全員は予測していた通りだった訳か？」

「そうねぇ……カーターとB．A．は真っ先に連絡が着いたから……残る四人は大体、ジェイの読み通りだったわ」

「先ず、【ｉＰｏｄ】って奴はＬ．Ａ．でクラブを経営していたってよ。クラブの名前は『Ｄａｎｃｅ　Ｗｉｔｈ　Ａｎｇｅｌ（天使と踊る）』

クラブの経営者兼（オーナー）ＤＪをやっていたって報告されてるぜ？」

「因みにその店には丁度、【Ｖｉｐｅｒ】も居たから二人共、同時に確保したんですって。その時、【Ｖｉｐｅｒ】ったら、１０人の女性を一斉に口説いていたそうよ？」

苦笑を浮かべながら、ナターシャは言う

「如何にもアイツらしいな……まぁ、口説いていた最中に確保されたんだ、結果は残念なモノだろうよ」

「いいえ、彼はちゃんと１０人の電話番号を手に入れたそうよ？」

「それに確保に来た国連の奴ら――まぁ、【女】だったんだけどよ……

ソイツ等の電話番号もしっかり聞き出したらしいぜ？」

最早、呆れ顔のイーリはため息を吐き出す

「昔、言っていたが……アイツの夢は【世界中の女と寝る事】らしいからな。着順に夢を実現させようとしているみたいだな……」

「……ショーンに関してはラスベガスを捜したら、カジノでギャンブルの真っ最中だったそうよ。カジノの全資金を空にしかねない程、大勝ちでね」

「しかも、イカサマ無しで完全なる運と実力だから質が悪いな？」

「アイツは恐らく、【世界一の幸運】の持ち主だからな。幸運の女神に愛されているとしか言えない位にな……」

「因みにソイツ、大勝ちして稼いだ金を全額寄付に回したらしいぜ。

他の金持ちもソイツみたいな奴だったら、世界は安定するのによ……」

「最後にクリスなんだけど……一番、手こずった様子ね。市警に協力を要請して、確保に向かったんだけど……」

「白バイを含めて警察車両を２０台、ヘリを2機も導入しても中々、捕まえられなかったみたいでよ……」

「それで、ヘリからジェイの名前を伝えた所でようやく止まってくれたそうよ？」

「だから言っただろ？　クリスは【スピード狂】だってな……まぁ、俺の名前を出さずに捕まえたかった場合は戦闘機かＩＳを持ち出す必要があるな」

最も、それでもアイツを捕まえられる保証は出来ないが……

「それで……また、あの缶詰め地獄を味わうのは嫌だが、輸送機の準備は出来てるのか？」

すると、イーリはこう言った

「輸送機？　どうせだったら、『もう少し』速いヤツにしようぜ？」

――――――――

「これが『少し』速いってレベルか、イーリ？」

ドイツへと向け、飛行する一機のヘリの操縦席からイーリへと問い掛ける。ヘリはアメリカ陸軍でも愛用されている『多目的・強襲用ヘリコプター』――【ＵＨ－６０　Ｂｌａｃｋ　Ｈａｗｋ】

少なくとも、俺やファントム隊のメンバーは戦闘機以外の機体を飛ばせる様に訓練されている。最も、俺が得意なのは車にバイク、戦闘機だが……俺らの目当てである【Ｒａｔｃｈｅｔ】――『ライリー・オドネル』ならば、目を綴じたままでも曲芸飛行を平気でや

ってのける程だがな……

だが今、俺が操縦するヘリは普通のとは違った――何故なら、このヘリは現在『超音速』の速度で飛行中だからな

「大体、どうやってヘリが超音速で飛べるんだ？　従来の戦闘機の最高速度（トップ・スピード）だぞ？」

「昔、アメリカ軍は運用しているヘリなんかを改良しようとしていた時期があったのはジェイも知ってるでしょう？」

隣の席に座るナターシャは俺へと視線を向け、言う

「あぁ、確か……１０億の予算を出したが結局、その計画も打ち切られたよな？」

「実は、その計画で五機のＢｌａｃｋ　Ｈａｗｋをベースに改良した機体があったのよ。機体の材質もスペース・シャトルに使用される様な特殊合金を使ってね

でも、エンジンに関しての改良で行き詰まって計画は中断になったのよ。一機で2億もの改造費を掛けた五機の改良途中のヘリを残してね」

「それが【コレ】って訳か……だが、その問題点はどうやって解決したんだ？」

すると後部席に座るイーリは口を開いた

「【擬似ＩＳ】だよ　『亡国機業』の技術を利用してやった訳って事だ

【擬似】って事もあって、ＩＳの基本性能（スペック）は本物に比べては劣るが、扱いやすさは本物以上、それに機体に搭載すれば、基本性能は従来の性能に比べて飛躍的に向上できる。一石二鳥ってヤツだよ」

「…要するに【ＣＦＡ－４４　Ｎｏｓｆｅｒａｔｕ】に使った技術の応用って訳か……それなら、超音速での飛行が可能なこのヘリも納得だ。因みにコイツの名前は何なんだ？

『Ｓｕｐｅｒ　Ｂｌａｃｋ　Ｈａｗｋ』とでも言うのか？」

「いいや、コイツの名称は【超音速攻撃ヘリ】－－－コード・ネー

ム『ＡＩＲ　ＷＯＬＦ』だよ」

「成る程、それは大層な名前だな……」

「因みにだけど、ジェイの指揮する事になる部隊――【ＴＡＳＫ　ＦＯＲＣＥ】の機体には全て、擬似ＩＳを搭載してるわよ？　実戦での稼働テストを含めてね」

「俺らを使って、テストする気かよ？　いい根性をしてるな、オイ……」

するとイーリはある事を問い掛けてきた

「そういやよ、ジェシーとナタルって戦闘機乗りだったんだろ？二人のＴＡＣネームって何だったんだ？」

「何だ、いきなり？」

「良いじゃんかよ、ふと気付いたからさ。教えてくれたって減るモンじゃないだろ？」

「……当時、戦闘機乗りだったナターシャの愛機は純白の『ＲＡＦＡＬＥ　Ｍ』でな。優雅に空を舞い、味方を支援するその姿から『空の聖母』――【ＳＫＹ　ＭＡＲＩＡ（スカイ・マリア）】というＴＡＣネームが着いたよな、確か？」

俺は助手席に座るナターシャへと目を向ける

「えぇ、随分と大げさなＴＡＣネームだったわ。そして、ファントム隊の隊長になる前だった貴方は私とは正反対で漆黒の機体――『Ｆ－１４Ｄ　Ｓｕｐｅｒ　ＴｏｍＣａｔ』を愛機として、如何なる攻撃を仕掛けようと決して命中する事が無く、確実に捕捉された敵機は落とされる……

敵から『幻影』又は『亡霊』――【Ｐｈａｎｔｏｍ（ファントム）】と呼ばれたのがＴＡＣネームの由来よね、ジェイ？」

苦笑を浮かべ、ナターシャは言う

「まぁな、それで俺が率いた部隊は隊長を務めていた俺のＴＡＣネームから『ファントム隊』って呼ばれるようになったな……何時の間にかによ」

「白と黒、ＴＡＣネームも正反対だよな？」

「そうよ、イーリ……お陰様で当時は『空の聖母』、『海の亡霊』
ーーー【光と影】なんて呼ばれてたわよ？」

因みにその時には、もうジェイとは付き合っていたし、【抱いて】
もらっていたしね？、と付け足すナターシャ

余計な事を言うなよ……お前は、しかも分かっていて言うんだから
尚更、質が悪い……

「……ジェシー……」

鳴呼、後部席に座るイーリの地を這うように低い声が俺の耳へと入
り込んでくる……

「…あー……何だ、イーリ？」

「……【Ｒａｔｃｈｅｔ】って奴とフランキーを連れて帰ったら、『ヤる』ぞ」

「……一応、聞くが『ヤる』って何をだ……？」

「……そりゃ、男と女が裸で……」

「分かったから、それ以上は言うな。つーか、女がそういう事を堂々と言うなよ……恥じらいってのを少しは持ったら、どうだ？」

「恥じらいを持ったら、ジェシーはアタシを抱いてくれるのか？」

「……悪い、お前に恥じらいなんて言った俺が馬鹿だった……」

そんな会話をしながら、俺らを乗せた機体――【ＡＩＲ　ＷＯＬＦ】は超音速の速度でドイツへと向かった

……あれだけ、盛大な別れを交わしたというのに僅か、数日で戻るとは情けないけどな……？

ーーーーーーーー

「だ、駄目……ですっ…て……シーガー…さぁ…ん…」

女の甘い吐息と共に喘ぎに近い声が零れる。女の柔肌に舌を這わせ、蛇の様に腕を絡めて離さない『シーガー』と呼ばれた男は意地悪げに笑う

「駄目だって……？　口はそう言っても身体は素直だぞ。クラリッサ……」

男ーーー『シーガー』は『クラリッサ』と呼んだ女の首筋に軽く歯をたて、文字通り『噛み付く』様にキスをする

「っ……は…ぁ……！」

軽い痛みと共に快感が首筋から脳髄へと迸る。女ーーー『クラリッサ』は甘い声を漏らし、快感に身を震わせた

「……俺しか見えない様にしてやるよ、お前は俺のモノだ」

シーガーはクラリッサの乱れた服へと手を掛け、そして……

「おい……何、とんでもない事を口走ってるんだよ？」

「ひゃあぁぁぁッ！！」

状況を説明しろだって？　話はこうだ。かつて……といっても数日前に後にしたドイツ基地へと到着した俺らはフランキーへと会いに行ったが、フランキーは俺らより速く【Ｒａｔｃｈｅｔ】－－－『ライリー・オドネル』が居ると言われている場所に向かったらしい

フランキーはクララの奴に行き先を教えている様なので、クララの所へと向かったら……冒頭にある様に何やら、卑猥な事を口走っていた。手にしている本のタイトルは『シーガー×クラリッサ』と手書きで書かれていた。まさか、自作か……？

「あら、中々の出来じゃない？　私を相手にしたのも作ってくれないかしら」

「これは私の全身全霊を込めて書いた傑作です。あと、構いませんよ？　もっと濃い内容を書こうと思ってましたし……」

「アタシを忘れんなよな？　アタシのも一つ、書いてくれよ」

「おぉい、そこの三バカトリオ。本題を忘れている上に俺が居るのを忘れているぞ」

それから、数十分程の時間を費やして暴走（いや、妄想か？）している三人を何とか、正気に引き戻した俺はフランキーの居場所を聞き出した

どうやら、フランキーは【Ｒａｔｃｈｅｔ】――ライリーの奴が居るという陸軍の精神病院へと向かったらしい。何故、ライリーがドイツでしかも、海軍だった奴が陸軍の精神病院に居るのかは不明だった。だが、精神病院の類に居る事は納得できた

何故なら、アイツは所謂――『飛行中毒（フライト・ジャンキー）』、飛べるのなら飯も酒も女も……挙げ句の果ては睡眠すら必要ないと豪語する奴だからだ

昔を思い出す……管制塔からのバンジージャンプ、戦闘機での正気とは到底、思えない様なアクロバット飛行……その度に俺がアイツの始末書を書かされたよなぁ……

思い出したら、頭痛がしてきた……

基本的にファントム隊での始末書の内容は……主にクリスとライリーの二人だった。時折、【Ｖｉｐｅｒ】――ハンズの奴の女遊びに関してのもあったが……

俺が始末書を片付ける羽目になる度、Ｂ．Ａ．とショーンの奴が頭痛薬を差し入れてくれたものだ……

昔の事を思い出し、頭痛に見舞われた俺はナターシャ、イーリの二人を連れてフランキーとライリーが居る精神病院へと向かった

――――――――

目的地――精神病院の屋上のヘリ・ポートへと着陸、俺らは屋上から一階の受付へと向かった。到着して、俺が会ったのは……

「ほぉ、僅か数日で再会するとは……そんなに私が恋しかったのか？」

「……まぁ、そういう事にでもしておこ……痛ッ！！？」

「ジェイ、私たちが居るっていうのにまだ物足りないのかしら……？」

「幸いにも此処も病院の一種だから、怪我をしても問題無いよなぁ……ジェシー？」

ニヤニヤという表現が良く似合う笑みを浮かべるフランキーと……
軽い冗談を言った俺の両脇腹を抓るナターシャとイーリだった……

「冗談を言っただけで、両脇腹を抓る必要は無いだろうが……痛てぇっての…」

「冗談とは随分だな、基地での夜の事を忘れたのか？
二人、一つのベッドの上で激しく求め合っただろう……？」

その細い両腕を俺の首へと絡ませ、顔を近付けて耳元で囁くフランキー

「あのな、此処で言う台詞じゃないだろ？
それに二人を焚きつけるな……」

後ろからは鬼神（オーガ）も裸足で逃げ出す程の禍々しい気迫（オーラ）を放つナターシャとイーリが……しかも、二人共に【物っ凄い笑顔】を浮かべる為、余計に恐怖を感じさせる……

というより、周りの医師や患者が怯えて俺らの周りから離れていくぞ、オイ……

「あー……取り敢えず、本題に取り掛かろうぜ？
ライリーの奴は此処に居るんだろ？」

「あぁ、お前が言っていたファントム隊の【問題児】か……取り敢えず、担当医を呼んである」

するとフランキーは奥に居る初老の医師を指差した。するとその医師は此方に気付いたのか、軽い会釈をすると此方へと歩み寄った

「どうも、私は此処の医師の一人で『ライリー・オドネル』の担当医を務めている『Ｄｒ．ハッチャー』です」

「これはご丁寧にどうも、私は『ジェイソン・シーガー』　元海軍パイロットで現在は国連所属のしがない傭兵パイロットを務めています。一応、階級は……『中佐』であります」

「貴方があの有名な……いやぁ、会えて光栄ですよ。貴方はこのドイツを救った英雄ですからね」

「英雄っていうのは大げさですよ、私は仕事をしたまでの事ですよ」

「いえいえ、貴方のお陰で大勢の人々が救われた……それに大きな声では言えませんが、貴方はこの『女尊男卑』の世界に生きる男性たちの希望であり、憧れなんですから」

「私なんかを憧れにするのはどうかと思いますがね……私は今も昔もただのパイロットですよ、空を飛び回るのを生き甲斐にしているね」

「……貴方のその人柄も大きな魅力なんでしょう、後ろにいらっしゃる女性の方々もきっと貴方の……」

おぉっと、これ以上は余計な詮索でしたね、いやぁ……ただの老いぼれの戯言だと思ってください。それでは、案内しますよ」

俺らはライリーが居る病室へと向かった

向かうまでの最中、ライリーの担当医である『Ｄｒ．ハッチャー』はカルテを広げ、こう言った

「もう二年位ですかね……彼の担当医を勤めるのは、彼は……何というか中々、ユニークな人物でして……」

「でしょうね、私も彼の上司をしていましたが【個性的】でしたので……」

「彼の経歴を拝見しましたが、正に歴戦の強者ですよ。あらゆる機体に精通している……ですが、症例からして心を病んでいると言うべきでしょうか…」

「もしかして、何か騒ぎを？」

「いえ、幾つかの騒ぎはありましたが人を傷付ける事は全く……ですが、先々週と先週の二回程、脱走をしようと試みた様子でして……」

「……脱走？」

「えぇ、先々週は【看護婦】の格好をして……先週は救急車を盗もうとしまして……それも【A．E．D．（電気ショック器）】を使って」

「成る程、それで自分が感電したと？」

「はい、ですが命に心配はありませんでしたが……少々、拘束をしました」

そうこうしている間に俺らは一室の病室の前に辿り着いた

「私は外で待っておりますので何か、あった場合には……」

「あぁ、その辺は心配無用ですよ。私たちの内、三人は軍人なので」

そういって、俺らは病室へと入っていった

ーーーーーーーー

病室に入り、目にした光景は……ベッドしかない殺風景な病室で、ベッドの上に拘束着と猿轡を着けられたライリーの姿だった。まる

で【某　人喰いの天才精神科医】を彷彿させる程の拘束だな……

「ムグ……？　ムググ、ムグムグ！！」

「あぁ……久しぶりだな、ライリー？　相変わらず、ブッ飛んだ奴の様だな」

「なぁ……何で、あれで会話が成立してるんだよ？」

「私に聞くな、私だって知りたい位だ」

「ほら、ジェイと彼は長年の仲間だったから……以心伝心ってヤツじゃないかしら……多分？」

俺とライリーの後ろではナターシャ、イーリ、フランキーのそんな会話が聞こえた

「取り敢えず、猿轡（コレ）を外すぞ。噛みつくなよな？」

俺はそう言って、ベルトで固定された革製の猿轡を外した

「っぷはッ！！　やーっと楽になった……それよりも隊長（ボス）が何でこんな所に居るの？」

「その言葉をそのまま、そっくり返すぜ？　まぁ、此処に来た理由はお前の力を借りたいからだ。単刀直入に言う……もう一度、俺と共に飛んで欲しい」

「僕以外にも他に誰が居るの？」

「あぁ……元ファントム隊のメンバー、六人がな」

「六人？　隊長（ボス）と僕を入れて八人でしょ、あとの四人は？」

「…それが……まぁ、消息不明というか何というか……まぁ、他の四人は乗り気じゃなかったんでな……

……で、お前はどうなんだ？」

ライリーは子供の様に笑みを浮かべ、言った

「何、言ってんッスか？　隊長（ボス）と居れば、またアドレナリン全開の【臨死飛行】が出来るんだから、乗るに決まってるじゃないですか？」

「……【臨死飛行】は勘弁願いたいが……これで、候補は全員が揃ったな」

俺は静かに呟いた

一　【問題児】　一

ライリーを拾い、フランキーとも合流した俺らはライリーの退院手続きを済ませた。事前に国連から部隊――【ＴＡＳＫ　ＦＯＲＣＥ】の結成をする為、ある程度の無茶が通る様にそれなりの権限を得ている為にライリーの退院手続きは滞り無くスムーズに済む事になった

屋上にあるヘリ――【ＡＩＲ　ＷＯＬＦ】へと向かったが、ヘリを見たライリーはまるで子供の様にハシャギ、目をキラキラと光らせた

「嗚呼、麗しき愛しのヘリ!!　しかも、最新鋭の機体!!　嗚呼、もう最高ッ!!

隊長（ボス）は最高、世界一の隊長だよッ!!　もう一生、ついて行くよッ!!」

興奮した表情で一気にまくし立てるライリー、正に『飛行中毒（フライト・ジャンキー）』だな……

「なぁ……本当にコイツで良いのかよ？」

イーリはライリーを横目に俺へと耳打ちする

俺はライリーへと再び、目を向けた。其処にはヘリのローターにぶら下がり、上機嫌で口笛を吹きながら回転するライリーの姿が……

「ローターのチェック、ＯＫでーす♪」

「……心配すんな、アレはアイツの性格であって腕は確かだ」

俺はライリーへと呼び掛けた

「ライリー、腕が鈍っていないかの確認だ。行き先はドイツ基地まで、お前が操縦しろ」

ライリーは、その言葉で笑みを浮かべる。そして、ぶら下がっていたローターから降り、それは見事な敬礼をした

「了解ですッ！！　久し振りの【極限飛行】を繰り広げてみせますよ！！」

するとナターシャは苦笑……と言うよりも、引きつった表情を浮かべて言った

「それ、本気なの？　ジェイ……」

「あぁ、本気（マジ）だ」

「……ＯＫ、今朝は何も食べてこなくて正解だったわ……イーリ」

ナターシャはイーリの方へと視線を向ける

「何だよ、ナタル？」

「私やフランキー、ジェイは元々は戦闘機乗りだったから……まぁ、平気だけど……ある程度、覚悟した方が良いわよ？」

するとイーリは強気な態度で言った

「はッ、アタシはこれでも一国を代表するＩＳ操縦者だぜ？たかが、頭のネジが二、三本はブッ飛んだパイロットの曲芸飛行にビビるかっての」

そう言って、イーリは機内へと乗り込んでいった。残った俺ら、四人も直ぐにヘリに乗り込む

「……二、三本どころか、全部を無くしちまったヤツだけどな……」

俺はそう呟き、俺以外の四人を見る

操縦席へと座ったライリーは、口笛を吹きながら上機嫌でヘリのエンジンを起動させ……

ナターシャは念入りにベルトで身体を固定し、胸の前で十字を切り、何やら祈りを呟いていた（お前、カトリックじゃないだろ？）

ナターシャのただならぬ様子を見て、同じく念入りにベルトで身体を固定するフランキー……

そして、完全にライリーの【極限飛行】を舐めているのか、余裕綽々といった表情を浮かべるイーリ……

……基地まで持つかねぇ……（主にイーリが）

そう思いながら、俺は……他の二人と同様にベルトを固定した

――――――――

さて、ヘリに乗り込んだ俺たちはどうなったかだって？

「お次は新技だよ。病室で、ずっと考えていたんだ♪」

「そうか……なら、どうなるんだ……ッ！？」

現在、俺らを乗せた上、ライリーが操縦するヘリは超音速で旋回中だ。しかも【連続三回転】でな

「もう、勘弁してくれないかしら……お願いだからッ！！」

「流石に……コレは堪えるな……ッ！」

固定したベルトにしがみつき、懇願するナターシャに色々とキツそうな表情を浮かべるフランキー

イーリはというと……

「もう嫌だッ！！　アタシは自分で飛んでいくッ！！」

涙目で必死にロックされたドアを開けようと叫ぶイーリ……無理だっての、超音速飛行に耐用出来る様に予圧システムを搭載しているからロックを解除しない限り、開かないっての……

すると開かないドアに対して、イーリはＩＳで腕部の部分展開を……って

「おい、ナターシャッ！！　イーリを止めろよ、ドアを破壊されたら俺たち、地面にキスする羽目になるぞッ！！」

余談だが、現在の高度は地上からおよそ2万メートル程だ

「イーリ、落ち着きなさいってばッ！！　そんな事をしたらどうなるか分かってるでしょッ！！？」

発狂の勢いで暴れるイーリをナターシャは押さえつける。一方でこの混乱している状況の発端であるライリーはと言うと……

「このヘリ、最高ッ！　もう最高ッ！！　今まで出来なかったあんな技やこんな技も簡単に実現できちゃうもんね♪」

更に機体を急旋回からの垂直上昇、その後に地面ギリギリまでの垂直急降下を繰り出し、ハイになっている状態だった

「目的地（基地）までどれ位で着くんだ、フランキーッ！！」

「今の……速度なら後、数分って所だな…ッ！！」

「えーッ、もうお終いなの？　これからが僕の十八番なのに」

「こっちじゃなくて、前を見ろよッ！　イカレ野郎ッ！！」

操縦しながら、此方を後部座席に座るフランキーを見るライリーに叫ぶイーリ

「後、数分が地獄だな……」

俺は正に混乱とした機内で呟いた

――――――――

ドイツ基地へと無事に【生還】した俺らは一旦、燃料補給を兼ねて

休憩を取る事にした。ナターシャやフランキー、俺に当たり前だがライリーは元々、戦闘機乗りである為にG負荷というモノには慣れているが……ISというのは高性能であり、操縦者のG負荷も緩和させる……が、その高性能さが仇となる事もある

「イーリはどうだ？」

「全然、一時間前にジェイに抱えられてトイレに行ったけど……未だに籠もりっぱなしらしいわ」

フランキーのオフィスにて、ナターシャとフランキーの声が静かに響く。ライリーはオフィスに備え付けられた来客用ソファーに寝転び、呑気に昼寝中だった

「全く……【問題児】とはよく言ったものだな。流石にパイロットだった私でも、アレは堪えたぞ？」

「そんな【問題児】たちをまとめていたジェイは凄いわよねぇ……？」

「そうだ、私やナターシャは元空軍だったが……ジェイソンの経歴

はどうだったんだ？　海軍に所属していたと聞いているが……」

「私も詳しい知らないのよ。私が彼と出会ったのは、ジェイが『ＴＯＰ　ＧＵＮ』に居る頃だったから……」

すると一人の声が二人の会話へと割り込んできた

「……隊長（ボス）は元海兵隊だよ。それも武装偵察部隊――『Ｆｏｒｃｅ　Ｒｅｃｏｎ（フォース・リーコン）』所属の凄腕だよ」

「あら、ライリーったら……寝ていたんじゃなかったの？」

「……続きを聞かせてくれないか、ライリー？」

「ＯＫ、海兵隊だった隊長は直ぐに戦闘機乗りに鞍替えしてね。パイロットの腕は天下一品って事で直ぐに『ＴＯＰ　ＧＵＮ』に行って、首席卒業した訳だよ

でも、卒業する前からナターシャとは付き合っていたもんね。当時は凄い噂になったよ？　『アメリカ軍史上、最強のカップル』ってね」

「……中々、良い思いをしていた様だな？」

「えぇ、そうよ？　【元恋人】の強みとでも言っておきましょうか？」

若干、額に青筋をたてながらナターシャを見るフランキーとニヤニヤという表現が良く似合う様な笑みを浮かべるナターシャ

「あのー……話を続けても良い？」

「「えぇ（あぁ）、続けて（くれ）」」

「何で僕が知っているのかって言えば全部、【Ｒｅａｐｅｒ】――『クリス』から聞いたんだけどね？

隊長とクリスは『海兵隊』からの付き合いだったから」

「初めて聞いたわ……ジェイってパイロット以前の昔話はしないから……」

「あの二人って不思議な関係なんだよねぇ……恋人かと思ったら、親友みたいな関係で……あ、でも二人一一一って言っても、クリスからだけど良く【相手】をしていたみたいだったしね？」

その言葉と同時にナターシャとフランキーはライリーの肩を掴む。
ミシミシという擬音が聞こえそうな程の力を込めた上で

「「ライリー……」」

「……何で御座いましょうか？」

「「詳しく聞かせろ（聞かせて）？」」

「了、了解（ラジャー）ッ！！」

一一一一一一一一

「ヘッキシッ！！」

風邪でも引いたか……【妙な悪寒】がする…

俺は基地へと到着すると同時に今にもダウン寸前のイーリを抱え、トイレへと向かったんだが……

「うえぇぇぇぇッ……」

個室トイレからは唸りに近いイーリの声が響く。こりゃ、重症だな……

「スッキリしたか、イーリ？」

「うぇぇぇッ……まだだよ……胃が裏返された気分だ……」

「まぁ、ライリーの操縦にそれ位で済んで良かったな？　昔は痙攣を起こしたヤツも居たぞ？」

「そりゃ、最高……よくあんなイカレ野郎を……っうぇぇぇぇッ……！！」

……こりゃ、マジで重症だな…

――――――――

「成る程な、つまりはこういう事か

そのクリス――【Ｒｅａｐｅｒ】はジェイソンとは海兵隊時代からの付き合いであり、ジェイソンがパイロットになると共に自身もパイロットになったと？」

「そうでありますッ！！　クリスは隊長と居れば【退屈】って言葉を忘れる程、スリルを楽しめるから隊長について行った訳でありますッ！！」

「そして【戦闘狂】という性格のせいなのか、空を飛べない時や哨戒飛行などの簡単過ぎる任務で一定のストレスが溜まる度にジェイに寄ってきて【発散】していた訳ね、ライリー？」

「はい、その通りでありますッ！！　隊長も毎回、断ろうとしていたのですがクリスの押しの強さに根負けしてであり、隊長も隊長で毎回、様々な逃げ道を考えていたのですが……」

「……それで？」

まるで女神、又は聖母の様な美しい笑みを浮かべるナターシャ――但し、醸し出している気迫（オーラ）は悪魔や死神すら裸足で逃げ出す程だが……

一方でライリーは冷や汗をナイアガラの如く流しながら、引きつった表情で言葉を続ける

「以前、二回程ですが隊長が【相手】をしなかった際、【発散】する事が出来ず、溜まりに溜まったストレスの影響か、都市部の防空戦でビルを三棟、車両を数十台破壊した事があったので、それ以降は隊長も仕方無いという事で【相手】をしていたでありますッ！！

因みにその際、民間人の避難は完了していたので死傷者は一切、ありませんでした。その上、人が居ない場所をピンポイントで敵機ごと破壊していたでありますッ！！」

そして、ライリーは高らかと敬礼をして言葉を締めくくった

「…成る程……【問題児】がもう一人、居る訳か……」

「えぇ、それも【ジェイ絡み】でね」

ナターシャとフランキーは、それはそれは見る者全てを魅力するかの様な美しい笑みを同時に浮かべた――但し、その目だけは二人共に一切、笑ってはいなかったが……

「でも……一番、キレたらヤバいのは隊長だよ?」

「……ジェイソンがか?」

「ほら、ナターシャも知ってるでしょ? その……【ラインハルト】の一件で…」

「えぇ……あれは、アメリカ軍でも封印された出来事よね…」

「……何か、あったようだな？」

するとナターシャは言った

「ファントム隊は十二人編成の部隊として有名だけど……結成当時は十三人居たの……

当時、十三人目の隊員の名前は【ラインハルト・レノックス】　階級は少尉であって、正に筋金入りの悪党だったわ」

「はっきり言って、アイツの名前を口にするのも気分が悪いね。アイツは人間の悪い部分で構成された様な奴だよ」

嫌悪感を露わにして、吐き捨てる様に言うライリー

「それで、ソイツが何をやらかしたんだ？」

「……アフリカ辺りだったかな、反乱軍の制圧で僕らが出撃した際に隊長は撤退する者、無抵抗な民間人には一切の攻撃をするなって言ったんだよ。でも、アイツはその命令を破って民間人に攻撃したそれで、隊長はアイツを『処断』したんだよ」

「……今でも、覚えているわ……あの時、基地に帰還した時のジェイの顔……

まるで触れるモノ、全てを傷付ける様な刃物みたいな雰囲気に氷の様に冷たい瞳をしていたわ……」

「……想像出来ないな…あのジェイソンが……」

「でも、隊長はアイツを何とかマトモな奴にしようと必死に努力していたんだよなぁ……結局、それも無駄だったけど……

それにその任務に着く時、僕らの何人かは隊長に反対したんだよ。アイツを連れて行くのは危険だって……でも、隊長は言ったんだ

『例え、どんなにクズ野郎でも俺の部隊に居る以上は俺の部下であり仲間だ。それに信じてみたいんだよ――アイツにも【良心】ってモノがある事をな』って」

「でも、結局はジェイソンの願いも努力も虚しく無駄だった訳か……それも、ソイツが裏切る形でな」

「でも、話はそれだけで終わりじゃないの。その一件から数日後、ジェイはある事を知っちゃったのよ」

「ファントム隊ははっきり言えば、腕は確かでも【問題児】の集まりだから、上層部の何人かは忌み嫌っていたんだ。それで、その上層部の一人が自分の上官を脅してファントム隊へと入隊しようとしていたアイツを入隊させた訳。幾ら、隊長でも軍人である以上、上からの命令は断れないからね」

「その上層部の一人の目的はラインハルトを入隊させ、何かしらの問題を起こせば、隊長であるジェイは責任を取らなければならない――つまり、ジェイを失脚させようと考えていたのよ」

「……どの国にも必ず、腐った奴は居るものだな……」

嫌悪感を露わにして、フランキーは呟く

「あの時の隊長はマジでヤバかったね……それを知った隊長は、いきなり武器庫をこじ開けて散弾銃（ショット・ガン）を取り出しちゃってさぁ……」

ーーーーーーーー

「ブェッキシッ！！」

「随分と爺臭いくしゃみだな、オイ？」

「ほっとけ、俺はもう直ぐで三十路だぞ？　というよりも具合が良くなったのは構わないが、何時まで俺はお前を抱えてなきゃならないんだよ？」

約一時間半、個室トイレに籠もりっぱなしだったイーリは漸くスッキリしたらしい。だが、何で未だに俺はイーリを抱えてなきゃならないんだか……

「普通、具合の悪い乙女を介抱するのは男の義務なんだぜ、ジェシー？」

「普通、乙女ってのは個室トイレに籠もって唸り声を上げないと思うぜ、イーリ？」

そんなくだらない会話をしながら、俺はイーリを抱えたまま、フランキーたちの居るオフィスへと向かった

――――――――

「それで、完全にキレた隊長はヤバかったねぇ……その上層部の一人に銃口を向けてからの第一声なんて『懺悔は済んだか？　クズ野郎』だよ？

オマケに基地内を逃げるソイツを追い掛けながら、散弾銃を冷静な表情でブッ放しながら追いかけているのなんて、夢に出てきそうな勢いだったよ」

苦笑を浮かべながら、ライリーは言う

「本当、あの時は大変だったわよ……私は偶々、基地に居たんだけれども、基地内で銃声が聞こえたから、兵士たちが総出で駆け付けたら、追い詰められたその上官の額に銃口を押し付けているジェイ

が居たんだから……」

「それで、ソイツはどうなったんだ？　まさか、そのまま、ジェイソンに無惨にも頭を吹き飛ばされた訳では無いだろう……？」

フランキーはナターシャとライリーへと視線を向け直す。だが、そのフランキーの問いに答えたのは二人のどちらでも無かった

「いいや、生憎だが散々、撃ちまくっていたせいで丁度、弾切れだったんでな」

声のする方へとフランキーたち、三人は視線を向けた。すると其処には……苦笑いを浮かべ、何故かイーリを抱き抱えたジェイソンの姿があった

「ライリー、口が過ぎるぜ？　お前には【死人に口無し】って言葉を教え込む必要があるかもな？」

「いやぁ……それは勘弁してもらいたいですよ、隊長…」

冷や汗を流しながら、ジェイソンへと視線を向けてライリーは言う

「ねぇ、ジェイ……？」

ふと、声を掛けられた俺は声の主であるナターシャの方へと向く。
すると其処にはニッコリという表現が良く似合う笑みを浮かべたナターシャが居た……

だが、俺にはその笑顔がとてつもない【威圧感】を感じる……最早、恐怖すらもを感じた俺はイーリを下ろし、反射的に後退り、ナターシャから距離をとる

「ナ、ナターシャ……ライリーから何を聞いたのかは知らないけどよ、俺にも弁解って余地を……」

「残念だが、その余地はお前には無いぞ、ジェイソン？」

ふと、背後から気配と共に声を掛けられ、俺はゆっくりとその声の主――フランキーの居る方へと振り返る。其処にはナターシャと同様に思わず、見惚れてしまう程の眩しい笑みを浮かべたフランキーが居た――しかし、俺にはナターシャと同様、とてつもない【威圧感】と恐怖を感じるが……

「フ、フランキー……マジで何を聞いたのかは知らないけどよ……取り敢えず、落ち着け……」

俺はナターシャとフランキーの【笑顔】に挟まれ、イーリとライリーに助けを求めようと言わんばかりに視線を勢い良く向けた。視線の先には何やら、イーリに小声で何かを耳打ちするライリーの姿が……すると、イーリの様子は【急変】した

「ジェシー……中々、面白い昔話をアタシは聞いたぜ？　たった今な……」

俺の目の前には、それはそれは眩しい笑顔を浮かべたイーリが居た――但し、ソレは俺を挟み込む二人と同様の【笑顔】だった……

「……ライリー？　お前、何を三人に言ったんだよ……！？」

「えー…っと、そのー……【Ｒｅａｐｅｒ】との『昔話』を……」

「……オイ、まさか『昔話』って……」

するとライリーは……

「ゴメンね、言っちゃった♪」

嗚呼、こんな状況を何と表現するべきだろう。確か、昔に何処かの誰かが言った筈……

嗚呼、そうだ。こう言ったな……ーーー『神は死んだ』

「「「ジェイ／ジェイソン／ジェシー……」」」

三人から、それぞれの呼び名を呼ばれる……

「燃料補給したら、基地を発つ筈だったげど、予定変更よ……」

「今日は、この基地に一泊しようではないか……何、新たな所属先にはナターシャたちが報告してくれる。それに私がこの基地に居る間、此処の責任者は私だ……心配する必要はない……」

「そうだぜ、ジェシー？　だから、ジェシーも気兼ねなく今夜は……」

「「「私（アタシ）たちに喰われなさい（喰われろ）」」」

……『亡国機業（ファントム・タスク）』と戦り合う前に俺が『亡霊（ファントム）』になりそうなのは気のせいだろうか……？

――因みにこれはジェイソンたちとは関係無いのだが……同時刻、日本に居る【最強】は持っていたペンを粉砕し、とある某所に居る【天災】は作業中の手を止め、無機質な暗く濁った瞳で何処か【狂気】を孕んだ笑みを浮かべていたとか何とか……――

一　【まだ見えぬ敵】、【伝説の戦闘機乗り】　一

あの後、といっても時間帯で言えば夕暮れ時だったのだが……ライリーのお陰でナターシャたち、三人から解放されたのは既に深夜を回っていたと言っておこう……

同時に三人を【相手】取って、三人共にスる事を終えて解放された時の感想は余韻などでは無く……一一一『生きてるんだな、俺……』とただ、無事に生きている喜びを感じる羽目となった（戦場でも無いのに何故、そんな感情を抱かなければならないんだよ……）

ふと、自分の左右へと視線を向ければ一一一昨日の【長期戦】の反動なのか、一糸纏わぬ姿の上にベッドのシーツを羽織り、寝息をたてる三人が居た。三人の位置は……フランキーが右側に、イーリが左側にそれぞれが寄り添う形で……そして、ナターシャは俺に抱き付く形で俺の腹部に眠っていた

まぁ、こんな美女たちに好かれるのは悪くは無いが……

「……どうも、女運は別の意味で良くないみたいだな…」

そう、確かにナターシャたちは誰が見ても美女という部類の上位に入るだろう。他にも【友人】として、千冬や束……海兵隊時代からの付き合いである【Ｒｅａｐｅｒ】―――『クリス』もそうだ

けどな……何故、俺の知っている女ってのは【普通】の奴ってのが居ないんだ？　ナターシャは元軍人であり、アメリカ、ＩＳのテスト操縦者……イーリはアメリカを代表するＩＳ操縦者、フランキーは現役の軍人であり、基地の全権を任される程の実力者、束の奴はＩＳを開発して『天災』と称される程の頭脳を持つ科学者……クリスは【死神】の異名を持つ『戦闘狂』兼『スピード狂』

そして、千冬は言わずと知れた『世界最強』のＩＳ操縦者―――【ブリュンヒルデ】

これを普通と呼べるのだろうか？　間違い無く【普通】とは到底、程遠いだろう

俺は三人を起こさない様、静かに身体を起こして三人に脱がされた（いや、身包みを剥がされたという方がしっくり来るな）衣服を羽織ると部屋を後にした

――――――――

昨日から姿を見ていないライリーの奴を捜したら案の定、ヘリ――『ＡＩＲ　ＷＯＬＦ』の機内で寝ていた。相当、コイツを気に入った様子だな……

「おい、起きろ……」

俺は暢気に鼾をたてて眠るライリーの頭を軽く足で小突いた

「うぅん……あれ、隊長（ボス）……幽霊じゃないよね…？」

と起きるなり、人の足を確認してくるライリー

「この通り、ピンピンしているよ。お前のお陰で危うく【死にかけた】がな？」

「いやぁ……あんな気迫（オーラ）を纏って、あんな笑顔で迫られたら話すしかないでしょ？　もう、僕なんか冷や汗がナイアガラだったんですよぉ……」

「……まぁ、その気持ちは良く分かるぜ……アレはどんなに戦場でヤバい状況に陥った俺らでも、マトモに耐えられる奴なんざ、居ないだろうしな……」

俺は溜め息混じりにヘリの機体へと寄りかかる。懐から煙草を出し、一本を取り出すとソレをくわえて火を着ける

煙草なんて今まで吸うことは殆ど無かったが……今では必需品となっている。寧ろ、今後の事でも尚更、必需品になるだろう――昔、ファントム隊では胃薬は手放せなかったけどな……

「隊長、煙草なんて吸っていたっけ？」

ライリーは俺が吸う煙草を指差した

「一種の精神安定薬だ……今後の事でも頭が痛くなりそうだからな…」

「……そう言えば、まだ聞いてなかったけど、今度の【相手】ってどんな連中なの？　昔は軍隊や傭兵集団、独裁国家なんて奴らも相手にしたけどね」

「強いて、言うならば……正体不明だが今まで以上にデカい影って事は確かだ。俺らの新たな雇い主である【国連】が今、現在も調査中だが……姿形すら不明のままだ」

「ワォ、それって【秘密結社】って奴？」

「イイ勘、しているな？　敵の呼び名は『亡国機業（ファントム・タスク）』――表に裏、両方の社会に様々な影響を与えている様な組織だ……だが、どちらも名前だけであり誰一人として、その影すら見た事が無い

……はてさて、俺らの相手は『幽霊』か――或いは大戦後、７０年以上の年月を経て膨れ上がった亡霊か……

正直に言えば、最も相手にしたくない連中の部類だ。先ず、向こう側が何かしらを仕掛けてこなければ、連中の動向の推測すら難しいからな……」

「……もし、その『亡霊』の正体を知ったら、隊長はどうする気？」

「…決まってるだろ？　【潰す】――金輪際、その名前すら忘れ去られる位に徹底的にな、だが……その頃には『亡霊』の姿も見えやすくなれば楽なんだがなぁ……」

するとライリーは苦笑を浮かべて、俺に言った

「相変わらず、敵と見なした連中には容赦ないよねぇー……

でも、女や子供に対しては弱いんだよね、隊長って」

「……今回はそうも言ってられないかもな…」

まだ、無人機が相手ならば撃ち落とす事に何の躊躇いも必要ないが

……ＩＳの技術を連中一一一『亡国機業』が所有する以上、【操縦者】も恐らくは構成員として存在する筈……

そして、その【操縦者】は俺の様な『異例（イレギュラー）』では無く、確実に【女性】だろう……

「……っと、ちょっくらトイレに行ってくる。今の内に機体の点検をしておけよな？　ナターシャたちが起きたら、直ぐにお前や向こうで待たされ続けてるアイツ等の【配属先】に向かうぞ」

俺は吸い殻を指先で抓み、機体から離れていく。するとライリーが背後から声を掛ける

「そうそう、その【配属先】って何処なの？」

「……存在しない場所一一一『地図にない基地（イレイズド）』だ」

ーーーーーーーー

僕はトイレに行くと言った隊長の後ろ姿を見つめていた。どんなにヤバい状況になっても常に余裕を失わず、誰一人として見捨てないーーー【偉大な戦闘機乗り】の後ろ姿を……

暫くして、僕は愛しい愛しいコイツ、隊長が言っていた『超音速戦闘ヘリ』ーーー【ＡＩＲ　ＷＯＬＦ】を眺めてた

ファントム隊での僕の愛機は『Ｆ－１６Ｃ　Ｆｉｇｈｔｉｎｇ　Ｆａｌｃｏｎ』だったけど……もう、僕はコイツにメロメロなんだよねぇ……

嗚呼、人は恋すると世界が変わって見えるって言うけど……コレが【恋】なんだなぁ……♪

僕は機体を撫でながら、例えようのない幸福感に包まれる。嗚呼、もう最高…♪

「……ジェイソンから聞いていたが……まさか、ここまで【重症】とはな…」

「あ、フランキー中佐じゃないですか。お早う御座います」

振り返れば、昨日はナターシャたちと一緒に隊長を【喰って】いたフランキー中佐が居た。寝起きなのか、衣服は若干、緩められておりラフな格好となっていた

「あぁ、お早う……ジェイソンは見なかったか？　今朝、起きたら既に姿が無くてな……昨日はあれほど、長時間を掛けたと言うのに凄まじい体力だな、アイツは……」

「もしかして、途中からは隊長が【主導権】を持っていたとか？」

「その通りだ、お陰で腰に鈍痛が今も走っている……」

そう言って、フランキー中佐は細い腰に手を当てた。本当、隊長って美人さんに好かれるよねぇー……でも、何でだろう。ファントム

隊でも随一である女好きの【Ｖｉｐｅｒ】―――『ハンズ』も『隊長って美女に好かれるけどよ、色んな意味で苦労するから決して羨ましいとは思えない』って言ってたけど、本当だなぁ……

「……何故、遠い目をしているんだ？」

「いえ、隊長の苦労って奴を考えてまして……」

「……しかし、ジェイソンとは不思議な男だな……海兵隊から戦闘機乗り、その類い希なる操縦技術を持ち『生粋のエース』―――【ＡＣＥ　ＯＦ　ＡＣＥ】と呼ばれ、今では世界初の『男性ＩＳ操縦者』……」

「あ、やっぱり隊長だったんだ。ニュースなんかでも大騒ぎだったけど……」

「……驚かないんだな？」

フランキー中佐は不思議そうな表情で僕へと目を向ける

「何せ、隊長だからねぇ……ナターシャは空軍だから、この事は知らないけど……隊長って、あの【ＣＩＡ】や【ＦＢＩ】なんかの様々な組織の『要注意人物』―――【ＢＬＡＣＫ　ＬＩＳＴ】に載ってるんだよ？」

「……それも初耳だぞ…？」

「元海兵隊、その後は海軍のエース・パイロットとしてのお墨付き。色んな任務に着任したよ

ファントム隊の隊長としてのデビューからは、もう激戦地の最前線に駆り出され、世界各国を巡る羽目になってね。世界的なテロ組織の壊滅、【超危険】と称された傭兵集団、独裁者が支配する独裁国家……そんな連中を隊長は僕らを率いて相手していった」

僕は機体を点検しながら、話を続ける

「つまり、隊長はファントム隊を率いて戦う内に【一個師団】に匹敵する腕前になったんだよ」

「……成る程、一個師団では無く【一人師団】となった訳か…」

「陸や空でも戦い続け、戦況を読めた上で常に向上を望んだ隊長は偉大な戦闘機乗りの一人だよ

でも、そんな隊長も【憧れの戦闘機乗り】ってのが居るんだよ。昔、その話題を聞いたら隊長は子供みたいに目を光らせて言っていたよ」

普段はクールな感じの隊長がだよ?、僕はそう付け加えた

「それは……気になるな、あのジェイソンが憧れる人物――同じ【戦闘機乗り】か?」

「フランキー中佐も聞いた事はあると思うよ? 戦闘機乗りなら誰もが知っているあの『伝説の戦闘機乗り』――【ＳＫＹ（スカイ） ＣＡＰＴＡＩＮ（キャプテン）】だよ」

そう、あの『白騎士事件』の数年前に周囲の仲間のみならず、各国の軍に惜しまれながらも名誉除隊した【歴戦の戦闘機乗り】――たった一機で一個師団を相手取り、無傷で勝利した『空の覇王』とも称された人物――その名前は……

「フランス空軍の英雄、『空の覇王』とも称された戦闘機乗り――『クロード・デュノア大佐』か……愛機は『Ｍｉｒａｇｅ ２０

００－５』であり、任務成功率は単独及び団体を問わず、全てを完遂している」

「そう、正に史上最強かつ最高のパイロットだよ。ファントム隊の【ＳＫＹ　ＫＩＤ】－－－『カーター』は熱烈なデュノア大佐のファンでね、ＴＡＣネームもカーターの愛機が『Ｍｉｒａｇｅ　２０００－５』であるのも憧れから来ているんだよ」

「ジェイソンのみならず、戦闘機乗りならば皆の憧れだろう。偉大な戦闘機乗りであり、我々の【大先輩】にあたるのだからな」

フランキー中佐は静かに笑みを浮かべ、言った……僕って女の人よりも機体の方が好きだけど思わず、中佐の笑みに見惚れちゃったよ……隊長、ゴメンね？

「……さて、ナターシャやイーリもそろそろ起きる頃だろう。私も身仕度を済ませるとするか……

機体の点検は抜かりなくな、ライリー？」

「了解（ラジャー）、お任せ下さいよ♪」

僕は敬礼をフランキー中佐へと向け、中佐が去った後に機体の点検を再開した

番外編　ー　とある老人の【手記】　ー

それは【ジェイソン・シーガー】がまだ軍へと入隊する以前の頃だった

カナダにて一人の男性が長い生涯を終え、家族が見守る中で安らかに息を引き取った。亡くなった男性は七十年という歳月の中、かつては名ジャーナリストとして名を馳せた。その男性の名は『ーーー』カイル・ウィーバー』

遺族は『カイル・ウィーバー』が生前、肌身離さず、常に持ち歩いていた一つの【手帳】を遺産として相続した。その手帳は名ジャーナリストと呼ばれたカイルがまだ、駆け出しの新米ジャーナリストから愛用していたモノだった

【手帳】の最初のページはこう書かれていた

『空には偉大な戦闘機乗りたちが居る。歴史に名を残す者、又は歴史の闇へと葬られた者たちが……

私は彼らをこう呼ぶ。『空の守護神』――【ＳＫＹ　ＧＵＡＲＤＩＡＮ】と……』

これは一人のジャーナリストが遺した【手記】に書かれたモノである

――――――――

私はジャーナリストとなった。所謂、新米――まだ駆け出しと言った所だ

私が追っているのは軍の活躍した出来事――つまり、『戦争』というジャンルだ。元々、私は陸軍に在籍していたが……任務中、背中を負傷して医師からは【椎間板損傷】と宣告されてしまった。日常生活やある程度の激しい運動でも別に大した支障は無いのだが……腰に爆弾を抱えてしまった兵士が追いやられる場所は情報部などの所謂、机仕事を専門とする所くらいしか無い

私は戦場に立つ事を軍人としての誇りと見出していた為、除隊の道を選んだ

ジャーナリストとなったのは、今まで国の為に【戦争】へと駆り出されてきたが、別の視点から【戦争】という存在を見てみたいという好奇心からだった

私は陸軍時代に空軍の【言い伝え】を聞いた事があった。それは昔、遥か彼方の大陸には優れた技術力と精強な軍隊ーーー特に空軍を持つ国があった

その国は経済恐慌の煽りを受け、徐々に衰退していった。そして、隣国の豊富な天然資源に目を着けた。そして、衰退していく国の領土の拡張、隣国の天然資源を奪う為に戦争を始めた

戦争を仕掛けられた隣国は総力を用いて、戦った。だが、自国よりも優れた技術力と軍隊を持つ国が相手である為、苦戦を強いられた隣国は【とある傭兵】たちを味方に付けた

その傭兵たちは優れた戦闘機乗りであり、各々が歴戦の兵揃い。苦戦を強いられた戦況を簡単に巻き返したと言い伝えられていたらしい。これが空軍に言い伝えられていた【片羽】と【鬼神】の伝説だ

伝承などに興味が無かった私には単なるお伽話としか思えなかったが……私はある【一人の戦闘機乗り】と出会う事になった

その戦闘機乗りは『D』と名乗っていた。どうやら、名前の頭文字（イニシャル）らしい

私は『D』に【片羽】と【鬼神】の伝説についてを聞いた。すると『D』は笑いながら、こう答えた

『知っているも何も……俺は【あの二人】と飛んだ事があるんだよ。まだ青臭いハナタレの小僧（ガキ）の頃にな…』

『D』は私に【片羽】と【鬼神】の事を語ってくれた

【片羽】と【鬼神】の正式な呼び名は【片羽の妖精】と【円卓の鬼神】

その二人の部隊は『地獄の番犬』の異名を持ち、畏怖と敬意の狭間に生きた存在だと私に言った。『D』は後に雇われたパイロットであり、終戦までの間、僅かながら共に空を飛んだ間柄らしい。そして『D』は言った

『あの二人は戦友であって相棒……いや、それ以上の信頼関係を持ち、誰から見ても名コンビだった

俺も一人の戦闘機乗りとして、あの二人に恐れを抱き、そして憧れを抱いた』

だが、戦争の最中だった。【片羽】が突然の離脱をしたのは……

【鬼神】は相棒を失うもその呼び名通りの強さを発揮して、戦争を終結へと導いたと『D』は言った

私は【片羽】はどうして離脱したのかと聞いた

『……恐らくは国家間の資源を巡る貪欲であって、卑劣な姿勢に嫌気が差したんだろう…』

そう言った『D』は空軍に言い伝えられてない【続き】を語り始めた

戦争末期、戦争を仕掛けたその国は自国内へと進行してきた敵軍を討つため、自国内にて核兵器を起爆させるという愚行を行った。その愚行による混乱の最中、【片羽】は乗機ごと離脱したらしい

後に【片羽】はクーデター軍へと参加、大規模破壊行為による文明の崩壊を切欠に腐りきった世界を再構成ーーー『リセット』しようという軍の思想を実行しようとした

だが、【鬼神】はそれを阻止すべく相棒であり、戦友でもある【片羽】と命を賭して激突したらしい

その時、『D』は【鬼神】と共に出撃し、クーデター軍を攻撃して

いた様だ

そして、激しい死闘の末……勝ったのは【鬼神】だった。自らの手で【片羽】を撃墜して……

私は『D』に聞いた

『何故、相棒であり戦友でもある二人は戦わなければならなかったのか？　他に解決策は無かったのか』

すると『D』はこう答えた

『……俺は以前、二人に聞いた事がある。【何の為に戦う】と……そしたら、二人はこう答えたよ

【片羽】は『俺らは傭兵なんて生業をしているけどよ、腐った政治やらお偉方の為でもなきゃ、荒れ果てた大地の為に戦う訳でも無い』

【鬼神】は『そんなモノよりも……もっと価値があり、最も大切な【護るべきモノ】の為に俺たちは戦うんだ』

……俺は二人に聞いた。なら、その【護るべきモノ】ってモノは一体、何なんだとな

すると【鬼神】はこう言った――『それは人それぞれだ。皆が同じ答えを持つ訳じゃない』

そして、【片羽】は笑いながら言ったよ――『まっ、何れはお前にも分かる日が来るだろうよ。そん時のお前が飛ぶ姿……見てみたいかもな？』ってな』

『D』は静かに言った

『あの二人は……そう、互いに自分たちの【信念】の為、戦ったんだろう』

そう言った『D』は……どこか、嬉しそうな表情を浮かべていた

―――――――

あれから、長い歳月が過ぎた。私は最愛の妻と娘にも恵まれながらもジャーナリストを続けていた

あれ以来、私は戦争に対して【加害者】と【被害者】、両方の視点から真実を見出す様に心掛けていた

私は幾つもの戦争を記事にしている内、名ジャーナリストと呼ばれる様になった

『D』とはあれ以来、友人と呼べる関係になっていた。だが、私は彼についてはあまり知らなかった

年に数回は会うが彼は様々な戦場を経験したと言う。私に【存在しない戦争】又は【重巡管制航空母艦】という聞いた事も無い様な兵

器の破壊任務にも参加したと言っていた

彼には何と妻が【三人】も居るらしい。既に息子も居る様で、その息子も結婚したらしい

これまた驚きなのは三人の妻の内、二人は元【ＣＩＡ】であり、もう一人は【陸軍】所属だった様だ

『Ｄ』は苦笑いを浮かべ、言っていた

『お陰様で浮気をする前にバレて【搾り尽くされる】よ、モテる男も辛いな……』

私たちは笑い、互いに昔話に華を咲かせた。それが友人としての『Ｄ』と私の関係でもあった

―――――――

そして、月日は流れた。私はジャーナリストを引退し、カナダにて隠居生活をしている

既に娘も成長し、結婚……私には孫娘が出来た。彼とはもう長い間、会ってはいない

だが、お互いに穏やかな余生を過ごしているだろうと感じる

私は彼―――『D』と出会う事である事を知った

我々が日常で何の気なしに見上げる空には『偉大な戦闘機乗り』たちが居るという事を。我々が知っているのはほんの一握りだけであり、各々が【護るべきモノ】の為に命を賭して飛んでいた事を……

彼―――『D』に最後に会った時、彼は自分が飛ぶ理由をこう言っ

ていた

『【あの二人】は決して譲れなく、曲げられない『信念』の為、命を賭して飛んでいた。俺はまだ分からない、何の為に自分が飛んでいるのかを……

その理由を知りたいから、俺は飛ぶんだよ』

彼もまた『偉大な戦闘機乗り』の一人なのだろう。私はそんな【彼ら】をこう呼ぶ

『偉大な戦闘機乗り』――【空の守護神】と……

――――――――

そして、最後のページにはこう記されていた

『私以外の誰かがコレを見る頃、私はもう居ないだろう……

私はかつて、名ジャーナリストと呼ばれた。だが、私がジャーナリストとしてしたかったのは何か……

それは【次の世代】に伝えたかったからだ。『歴史』とは長い歳月の間に起こった物事の表れでは無く、その一つ一つに意味がある事を……

『英雄』とは何か、それは【本当に護るべきモノ】を見出し、それに命を賭した者だという事を……

だが、この『空の守護神』の話だけはこの手記に閉まっておこう。彼らは地位や名声だけの為に飛んだ訳ではない

各々、自分たちの【護るべきモノ】の為、命を賭した……『偉大な戦闘機乗り』たちへの私なりの手向けだ

だが、何時の日か……その信念を受け継ぐ者たちが現れるだろう。ならば、私はその者たちの為にもコレを遺す』

――――――――

『カイル・ウィーバー』が亡くなった数日後、一人の老人が現れた。
その風貌は老いを感じさせるものの【筋骨隆々】という表現を表した様な肉体であり、鷲の様に鋭い眼をした老人だった

その老人は『カイル・ウィーバー』とは生前、友人であったと言い、その墓前に挨拶をしたという

『カイル・ウィーバー』の孫娘――【アリシア・ウィーバー】はその老人の名前を聞いた

すると老人はこう言った――『【D】――【ダリアス・シーガー】』と名乗ったそうだとか……

―【集結】―

それから数時間後、漸く起きたナターシャとイーリに合流した俺らは基地を発つことになった。向こう――『存在しない基地』までの足はライリーの操縦する【ＡＩＲ　ＷＯＬＦ】だ

因みにだが、昨日の【一件】以来、ライリーの奴はナターシャとフランキーの二人に対して、かなり【従順】――いや、寧ろ【絶対服従】という様な状態になった。ライリー曰わく『あの二人を敵に回すなら、まだ気化爆弾を抱えて敵陣に特攻した方がマシ』らしい

だが、俺だけは【別の機体】で行く事にした――フランキーの愛機【Ｓｕ－３３　Ｆｌａｎｋｅｒ】だ。フランキーの愛機だけはまだ擬似ＩＳを搭載していない通常仕様（スタンダード・エディション）……

だから、一度は向こう――『存在しない基地』に持って行く必要がある訳だ

そこで俺は【ある事】を実行すべく、フランキーから操縦許可を得

た。一応は『アイツ等』にも挨拶をしないとな……

――――――――

「遅いぞッ！！　展開は０．５秒で済ませるんだッ！　戦場では僅かな時間差で命運を決すると常に心掛けろッ！！」

『イエス・マムッ！！』

私――ドイツ軍、ＩＳ配備特殊部隊『シュヴァルツェ・ハーゼ』――通称『黒ウサギ隊』の隊長である『ラウラ・ボーデヴィッヒ』は隊員たちへと一喝を飛ばす

【あの日】――『教官』と『隊長』が一年間という指導期間を終え、この基地を去ってから数日が過ぎた。私の首元には『落ちこぼれ』と呼ばれた私を再び【隊長】という座へと押し上げてくれた恩師――元アメリカ海軍のエース・パイロットであり、『生粋のエース』の呼び名を持つ戦闘機乗り……

そして、私にとって【理想の隊長像】――『ジェイソン・シーガー元大尉』から預かった認識票が太陽の光を受け、鋭く輝いていた

隊長は正に『生粋のエース』――【ＡＣＥ　ＯＦ　ＡＣＥ】だった。私たち、『シュヴァルツェ・ハーゼ』は隊長の戦いを二回程、見た事がある

一度目は我が隊の監査として、ドイツへとやって来たアメリカ代表のＩＳ操縦者――『イーリス・コーリング』との模擬戦にて戦闘機でＩＳと戦い、圧倒的な戦力差を隊長はＩＳの比類無き高性能さを利用し、勝利した

二回目は祖国、ドイツを襲った試作兵器――【スタウロス】の時だった。隊長は【男性】でありながら、ＩＳを起動させ……ドイツとアメリカが二国協同開発した『ＩＳ搭載戦闘機』――【ＣＦＡ－４４】を操縦し、この国を救った

だが、その直後だった。謎に包まれた【無人ＩＳ機】が現れたのは……

しかし、隊長はその【無人ＩＳ機】をも撃墜した。その時、私たち――『シュヴァルツェ・ハーゼ』は悟った

隊長は私たちが想像できない様な修羅場を潜り抜け、そして勝利してきた『歴戦の兵』――私たち、ＩＳ操縦者の頂点に立つ存在……

『ブリュンヒルデ』――【織斑　千冬】教官と同じ『高み』に立つ存在である事を……

私は一人の兵士として……そして一人の女としても隊長に憧れ、惹かれた。いや、私以外にも他の隊員や教官、フランキー中佐たちも隊長に惹かれているのだろう

私たち――『シュヴァルツェ・ハーゼ』の目標は、フランキー中佐から聞いた『ＩＳ編成戦闘機部隊』――【ＴＡＳＫ　ＦＯＲＣＥ】の一員となる事

まだ結成はされていないが、隊員たちは隊長やフランキー中佐を含

む歴戦の兵揃い。正に世界最高かつ最強の部隊、私たちはその部隊の一員となるのを目標に今も鍛えている

何時か、必ず――『隊長と共に空を羽ばたいてみせる』

そう誓って……

「隊長、アレを見て下さい……」

ふと、思考の海へと引き込まれていた私を副隊長――【クラリッサ・ハルフォーフ】の声が引き戻した。声を発したクラリッサの方へと視線を向けると、クラリッサだけでは無く他の隊員たちもが空を見上げていた

私は同じように私以外の向ける視線の先へと目を向けた。そこには……

「あれは……フランキー中佐の【Ｆｒａｎｋｅｒ】…？」

私たちが見上げる空には……白銀の機体と尾翼部に刻まれた『八つの足を持つ神獣』――『Ｓｌｅｉｐｎｉｒ（スレイプニル）』の隊章（エンブレム）を持つフランキー中佐の愛機――【Ｓｕ－３３　Ｆｒａｎｋｅｒ】が空を舞う姿があった

優雅であり、鋭い機動で空を疾走していくその姿に私たちは暫しの間、訓練中である事を忘れて見惚れていた

その一つ一つの動きにも洗練さを感じさせる機体は私たちの視線に気付いたのか、機体を傾けて操縦席が見える姿勢となる

ＩＳを展開していた私には、はっきりと見えた。操縦席に座るパイロットが私たちに向け、敬礼をするのを……――そして、そのパイロットが誰であるのかを……

「…『隊長』……」

私が見たのは……マスクを外し、口を動かす『ジェイソン・シーガー　元大尉』の姿だった。そして、隊長の口の動きを見て私に伝えようとしている言葉……

『…頑張れよ、ラウラ』

今まで経験した事の無い嬉しさで涙が零れそうになるのを感じる。
でも、私は必死で堪えた

そして、私は……精一杯の笑顔を浮かべて、空を舞う隊長へと敬礼を掲げた

ーーーーーーーー

《挨拶とやらは済んだか、ジェイソン？》

【Ｓｕ－３３　Ｆｒａｎｋｅｒ】の進路を目的地－－－『存在しない基地』へと向け、飛行する俺に隣を飛ぶヘリ－－－【ＡＩＲ　ＷＯＬＦ】に搭乗しているフランキーの無線が入る

《まぁな、取り敢えずは俺が操縦していたって事も分かったみたいだしな……》

すると俺とフランキーの無線による会話にヘリを操縦するライリーが割り込む

《でも、隊長　どうせだったら、ナターシャの時みたいな風にすれば良かったんじゃない？》

《あぁ……ジェイが私の誕生日を忘れていた時の【プレゼント】の事？》

《昔の話だろ……あの時だって、お前の誕生日をすっかり忘れていたのを悪いと思ったから、無理を言ってやった事だぞ？》

するとフランキーとイーリからの無線が入る

《一体、何をプレゼントしたんだよ　ジェシー？》

《付き合っていた相手の誕生日を忘れていたとは随分と酷いな、ジェイソン？》

手厳しい言葉を貰い、俺は苦笑を浮かべた

《……ライリー、弁護してくれないか？》

《ＯＫ、その頃の隊長は毎日が忙しくてねぇ……ファントム隊も彼方此方に引っ張りだこだったんだよ。それで、すっかりナターシャの誕生日を忘れてプレゼントを用意出来なかったって訳

そしたら、隊長は整備班の連中に必死で頼み込んで『航空ショー』とかに使われる発煙器を取り付けた機体を借りてきたんだよ

それで、空にナターシャの名前とお祝いの言葉、それに謝罪を描いたんだったよね、隊長？》

《あぁ、お陰様で整備班の奴らにひと月は酒を奢る羽目になったけどな……》

《随分とロマンチックな事をするんだな、ジェシーって？》

《ロマンチックって言っても、パイロットにしか分からないだろうけどな？》

《あれ？　でも、クリスは昔、誕生日祝いで隊長が車のタイヤ痕で名前を書いてくれたって言っていたよね？》

《……ジェイ、それはどういう事かしら？》

ナターシャの低い声が無線から聞こえてくる……心底、ヘリに乗ってなくて良かったと感じたのは余談だ

《おいおい、車で地面にやるのと空にやるのじゃあ、スケールってモンが全然、違うだろうが？

それに車なら手元にあれば、何時でも出来るが、あの時はかなり無理を言ってまでやってやったんだぞ？

始末書を書かされるのを覚悟してな》

《なら、私の誕生日の際にはナターシャと同じように空に描いて貰うとしよう》

《おい、抜け駆けはズルいぜ　フランキー？　なら、アタシは車の方で頼むぜ、ジェシー？》

《あら、じゃあ……私は両方でお願いしようかしら？》

ナターシャ、イーリ、フランキーの三人からは要望の声が挙がる

《……あのなぁ、そう簡単に言ってくれるが、無茶振りし過ぎだろうが…》

俺らはそんな会話を続けながら、ドイツを後にした……

――――――――

目的地――『存在しない基地』へと到着した俺はドイツから操縦していたフランキーの愛機――【Ｓｕ－３３　Ｆｒａｎｋｅｒ】を待機していた整備班たちへと預けた。【擬似ＩＳ】は用意しているらしく、直ぐに機体への搭載作業に取り掛かる様だ

流石、ＩＳに関する設備と優秀な整備班たちのお陰なのか……【４８時間】もあれば、作業は完了できると言っていた。大したモノだよ……

それに整備班たちからは【ある報告】を俺に伝えてきた。それは『ＩＳ編成戦闘機部隊』――【ＴＡＳＫ　ＦＯＲＣＥ】の戦闘機パイロットであるフランキーを除く俺たち、『ファントム隊』のメンバーの当時、愛機だった機体を揃えたという報告と……

【ＴＡＳＫ　ＦＯＲＣＥ】の結成祝いとして、国連から一機の【試作機】が届けられたという報告だった。どうやら、俺の専用機――【ＣＦＡ－４４　Ｎｏｓｆｅｒａｔｕ】の設計を基礎（ベース）とし、『擬似ＩＳ』を使用しての試作機らしく、男でも操縦が可能との事だ

それらの報告を受けた俺は、残る六人のメンバーが待機しているという会議室へと向かった

――――――――

会議室の前へと到着した俺らは、ナターシャたちを別室で待たす事にした

一部を除くが、数年振りに『ファントム隊』の一同が勢揃いする訳だ……積もる話もあり、昔の【戦友】――仲間たちと水入らずにしたいんでな……

俺はライリーと共に会議室の扉を開き、室内へと踏み込む。其処に居るのは懐かしい顔触れの面々だった

「……よぉ、お前ら……まだ、生きているみたいだな？」

「隊長ッ！　それにライリーッ！！　本当に久しぶりッスねぇッ！！」

陽気な表情を浮かべる【ＳＫＹ　ＫＩＤ】―――『カーター・ウィンストン』

「相変わらず、隊長も有名だよなぁ……お久しぶり？」

静かに笑みを浮かべ、軽く手を振る【Ｖｉｐｅｒ】―――『ハンズ・ラファティ』

「それにしてもマジで、久しぶりだよな？　この面子が揃うのもよ」

相変わらず、『ｉＰｏｄ』を手放さずに一同を見渡す【ｉＰｏｄ】―――『リチャード・ウォルター』

「隊長も元気そうで何よりですよ、それにライリーも久しぶりだな」

くだけた感じの敬礼を俺に向ける【Ｂａｒｏｎ】――『ショーン・トバイアス』

「その『生きていたか』って、台詞をそのまま返してやるぜ？　まぁ……相変わらず、イイ男のままじゃねぇかよ、コッチは【溜まってる】んでな」

白銀の髪を掻きながら、相変わらずの口の悪さを見せる【Ｒｅａｐｅｒ】――『クリスタ・ネコルヴィッチ』

「……」

相変わらず、無口のままで軽い会釈をする【Ｉｒｏｎ　Ｈｉｄｅ】――『バーンズ・アーチャー』

「いやぁ……この一同、勢揃いなんて昔を思い出すね、隊長（ボス）？
アフガンにナイジェリア、ボリビアとベトナムとかさ」

子供の様な笑みを浮かべる【Ｒａｔｃｈｅｔ】―――『ライリー・オドネル』

「あぁ、ファントム隊の集結って訳だ」

すると【Ｒｅａｐｅｒ】―――『クリス』は言う

「集結ね……まぁ、３～４人は居ねえツラも居るけどよ、それで彼方此方に散らばったアタシらを勢揃いさせて、どんな要件なんだよ？」

「そうだな……【二度目のチャンス】到来ってヤツだよ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6975u/

IS〈インフィニット・ストラトス〉 - ACE OF ACE -

2011年10月11日07時25分発行